

川柳塔

創刊大正十三年 通卷八四二号



日川協加盟

No. 842

同人特集・海 百句

七月号

第4回 鳥取県民文化祭主催事業

第21回 鳥取県川柳大会

と き 9月28日(日) 午前10時開場
ところ 気高町営国民宿舎「貝がら荘」(☎八六八〇三三)
△JR山陰線「浜村駅」(鳥取駅から米子方面5駅
目)徒歩3分△

兼題と選者

「め し」 柏原 幻四郎 選
「顔」 奥田 みつ子 選
「生 きる」 長谷川 紫光 選
「恋」 和泉 香 選
「揺 れる」 内田 久枝 選
「歌」 新家 完司 選
「光 る」 門脇 かずお 選
「す っかり」 森山 盛桜 選

出句締切 午前11時半厳守(各題2句・席題なし)

欠席投句 9月10日締切(当日消印有効)用紙自由

参加費 〒689-03 鳥取県気高町飯里84-4 鈴木公弘あて

当日会費 2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句 1000円(発表誌呈)

夕食会 9月27日午後6時半から貝がら荘・50000円

宿泊 貝がら荘(先着30名) 110000円(夕食会全)

◎7月末まで受付(満室後は旅館あつせん)

連絡先 〒689-03 鳥取県気高町飯里84-4 鈴木公弘

(☎〇八五七一八四―二八八六)

主催 鳥取県川柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県
後援 気高町・気高町文化協会・新日本海新聞社ほか

◇川柳塔八〇〇号記念出版◇

集句夫婦
旅 人
福寿草
麻生路郎
麻生葭乃

B6判・184頁・紙装並製
頒価1500円(〒240円)

定本
西尾 栞句集

橋高薫風・東野大八序文
B6判・248頁・布装上製本
頒価3000円(〒340円)

◎お申込みは川柳塔社事務所へ

発行所 川柳塔社

545 大阪市阿倍野区三木町二一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室
電話 〇六・六二九・六九一四番

カップル

橘高 薫風

比叡山・高野山 名玉展を見た。

伝教大師坐像と弘法大師坐像が並んでいた。二人は七歳違い、同じ船で入唐しそれぞれ天台教学や真言密教を修得、日本の仏教界に寄与したことも双璧と言える。

最澄の像は頭巾を着していて瞑想の姿、いかにも学僧らしく気難しそうだ。

一方、空海の像は、若い修行時代には阿波や土佐の山中を駆け巡っていたにしては全身ふくよかで、包容力のある慈眼の持ち主だ。

両者は時に助け合い、あるいは反目しながらも、お互い大きな事業を成し遂げた。私は二つの坐像から、書齋学者型の麻生路郎、事業行動型の岸本水府両先生のイメージをダブらせるのであった。

作家の藤沢桓夫先生は川柳にご理解の

深い方だったが、関西の巨人的な存在だった両先生を次のように比較されている。短いながら誠的な指摘であらう。

「この二人の偉大な川柳作家が持つ作品の特長は、世相風刺、人情風俗への切り込みにおいて、岸本水府には、どこかに柔道を思わせるやわらかさがあり、麻生路郎には剣道を思わせるきびしさがあったといえないだろうか。

熊野灘鯨がみえた母の背

大阪の恋人といわれた初代中村鴈治郎の舞台姿を写して

頬冠りの中に日本一の顔

とうたった岸本水府のソフト・トーンに比べて麻生路郎の方は、

古くとも僕には仁義礼智信

と、どこか肩ひし張って見得を切っている日本人の潔癖さが、風刺とはむしろ反対になにか暖かな人間の優しさを訴えてくる。そこところに麻生路郎の独自の持ち味があったともいえそう。

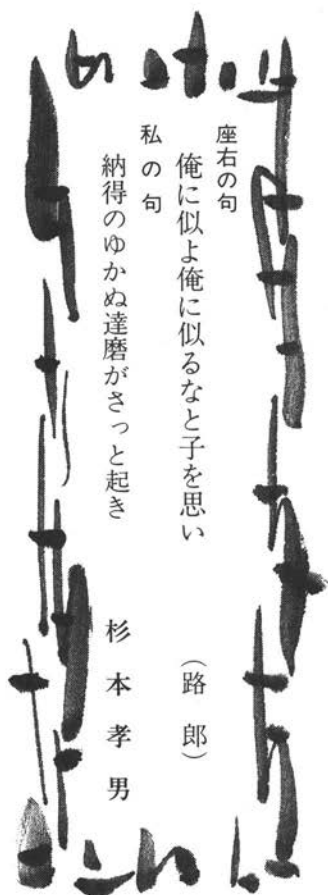
大阪柳界の偉大なライバルであった。

ライバルといえは直ちに思い起こされるのが、野球の阪村山投手と巨人の長嶋選手である。

すでに半ば神話のようになっているが野球でのライバルは競争相手ではなくて好敵手、敵対者なのである。それでいて美事なカップルとも言えることが出来る。

巨人に移籍してから成績振わず呻吟している清原和博選手は、私もファンの一人であるので気が気でない。しかし理由がないではないとも思っている。清原はこの世で一番大切な「天の時」に背かれたのである。私は野茂英雄投手が米大リーグへ移籍したとき、これで清原は精彩を無くすると直感した。村山・長嶋に匹敵する野茂・清原の対決だけが、現在のプロの見せ場だとたのしんでいた実感なのであった。野茂のあの直球やフォークボールをホームランした清原が、セ・リーグの凡投手に三振の山を築かれるのも天の配剤であるかも知れぬ。

さて、昨年の同人総会で私が主幹に、小出智子さんが理事長に推されて新体制で出発することになった。その直後智子さんの病氣再発で入院加療が今に続いている。一度は克服した病だ。再度打ち勝って復帰して下さらないと、私は清原選手のように三振ばかりしているのです。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子进行い

私の句

納得のゆかぬ達磨がさつと起き

杉本孝男

(路郎)

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 カップル

道具

川柳塔(同人吟)

自選集

大空のころ (78)

川柳の群像 大熊吉三

古川柳歳時記 『納涼』

水煙抄

秀句鑑賞 同人吟
水煙抄

渺湖抄

茴香の花

橘高薫風 (1)

林荒介 (2)

橘高薫風選 (4)

橘高薫風 (51)

東野大八 (52)

清博美 (54)

高杉鬼遊選 (58)

堀端三男 (56)

木本朱夏 (83)

八木千代選 (80)

西出楓楽選 (84)

道具

林荒介



年中行事の一つになった四月五月の神戸だが、五月の「時の川柳」大会からの帰途、楠公さん前から車を拾って三宮に向かった。五分も走った頃だったか「荒介さんあそこ」と同乗の友達が一軒の骨董屋を指さした。

彼の家には古伊万里、黄瀬戸、唐物など古い道具がごろごろとあって、その昔、神戸から車に一台、気に入ったものを積んで帰った話を聞いていたから、そうか、あのお店からかと直ぐに理解できた。彼と出歩くと骨董屋巡りに付き合われる。かつて津山でも何軒かの骨董屋を歩いた。古くからの民芸の仲間でも眼も確かで、いろんな人が鑑定を依頼するほどだ。そんな彼との出会いも川柳で十年以上の付き合い。何回か彼の家を探ねたこともあるが、その近くで句会がある時だけで、都合を確かめ、何時ごろにと時間の約束をしてから訪問している。お互いに都合のある日常だから、相手の時間も大事にしなければならぬ。時間が約束してあるからか、普段もそうなのかは確かめていないが、何時も部屋には香が漂っているし、暑いときには水出しの玉

「宿」……………	光井玲子選……………	(86)
一路集「真似」……………	榎原公子選……………	(86)
「果たす」……………	山口高明選……………	(87)
初歩教室「丸」……………	吐田公一……………	(88)
同人特集「海百句」……………	……………	(112)
各地柳壇（佳句地十選／菱田満秋）……………	……………	(90)
六月本社句会……………	……………	(108)
各地句会だより……………	……………	(103)
横浜あおば川柳会……………	……………	(104)
坂本仙吉郎さんを偲ぶ……………	……………	(105)
稲葉眞郎さんを偲ぶ……………	……………	(106)
柳界展望……………	……………	(135)
七月各地句会案内……………	……………	(136)
■編集後記……………	……………	(136)

座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

（葎乃）

私の句

前身は語らぬ蝶の舞姿

福崎 しげお

露も用意して待っていてくれる。奥様もでき
たお方で、昨年の夏お邪魔した折には、暑い
のに「蕎麦掻き」の馳走に預かった。鍋を火
に掛けて蕎麦粉を掻くのは重労働で汗の出る
作業。勿体ないことだった。

そんな付き合いがずっと続いているが、
彼の家では古伊万里や黄瀬戸が普通に道具と
して使われていて、宝物として箱に収められ
てはいない。国宝に指定されている窯変天目
の茶碗も、無名の陶工が道具として作った茶
碗で、陶工も飾って欲しくて焼いた茶碗では
ないと思う。

手元に氣にいった蕎麦猪口があつて重宝し
ている。お酒もお茶もこの猪口一つで事が足
るし、何を注いでも受け付けてくれて拒むこ
とはない。同様に抹茶茶碗にご飯をよそふこ
ともあるし、お茶漬の井にも便利だ。箱に
納められて、使つても貰えない道具はきつと
嘆いていることだろう。

我々の頭にもいろんな情報がインプットさ
れていて、その情報を言葉や文字にして意志
を伝達するが、使い忘れた抽斗は宝の持ち腐
れで、使つても貰えない道具と同じだ。如何
にして自分の「念」を十七音字に纏めるか、
川柳の幅は広くてサラリーマン川柳・時事川
柳と多岐に広がっている。各人が自分の川柳
を創らねばならぬと自戒しきりだが、なか
か納得のいく川柳が出来ないでいる。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

和歌山市 川 上 大 輪

生きているうちはまだまだ句ですよ

ごめんなさいさつき餃子を食べてきた

街角でティッシュを貰う隙だらけ

禁酒禁煙 四角い文字にある決意

見つめればマネキン動くかもしれぬ

階段が地下へ伸びてゐるから怖い

堺 市 桑 原 道 夫

自画像が五月の風に裏返り

公園に松たか子似の猫が居る

観音にルーズソックス履かせたし

陰口をよろんでいるイタチかな

教室の窓から白鯨を呼ぼう

恋人とキャベツの芯にたどりつく

大阪市 西 出 楓 楽

男対女 男が勝てるはずがない

心までイミテーションになるまいぞ

まちがい電話ちよっとおしやべりしませんか

ブランコをブイブイ漕いでふっ切ろう

風みどりストライクゾーン広くとる

踊ってるお方へ笛を吹いて上げ

弘前市 佐 治 千 加 子

恐山わが骨ならむ白き石

からからと音する石を積みにつけり

水子地藏 赤き風たつ風ぐるま

前線通過 極楽浜の砂あらし

誰が声か今しばしとて風が泣く

蓮華八葉山暮れゆかむとす余光

岸和田市 岩佐ダン吉

マラソンを走る私も風になる
終電車電話は仕事好きらしい
モデルさんどんな服でも似合いそう
ライバルに得手の右手を封じられ
憲法五十歳富士には今だ星条旗
爽やかにひとり反対論の君

島根県 小砂白汀

断固たるフジモリ日本人より日本人
今年また月下美人が顔を見せ
高齢者もう要りません要りません
爽やかな一言その後ふりむかず
無駄なことばかりしている海の雨
閉めきられジャンプしているムツゴロウ

八尾市 吉村一風

桜の下少し雄弁になりすぎる
立場替えてみれば許せることばかり
花に水遣ると怒りも引いてくる
善人を丸出し嘘がついてこぬ
亡父の歳越したが亡母をまだ越せず
崩れてる豆腐気さくで食べ易い

和歌山市 木本朱夏

百済仏の朱唇に春は綻びぬ
仏頭の頬冷え冷えと春が逝く
一輪車で花道をゆくアルルカン
若作りして浅ましき膝小僧
あなたには蒼い哀しみ贈ります

和歌山市 川上富湖

私小説きつと退屈するだろう
柵が女ばかりを塞き止める
国会中継 眼精疲労始まりぬ
鯖折りを仕掛けて畳むダンボール
瓢箪のくびれを少し妬いている
遠吠えをしないか月が綺麗だよ

熊本市 永田俊子

国家論古いと男のピアスゆれ
男のピアスに首をかしげるロバの耳
脱皮した蝶は昔を語らない
百歳の気骨に小朝教えられ
考えがついたか鶴が歩き出す
夕やけ小やけ歌ってごらんいじめっ子

吹田市 栗谷春子

犬の背に日いち日と延びるかけ
好きな木の影でゆっくりカルシウム
石楠花が咲いて岡寺大和なり

おない年おんなじ怪我で長話

オルゴール鳴りやむ前のけだるさや

病院でビールのことはまだ問えず

茨木市

堀

良江

どなた様にも灰皿は出しません

亡くなった人がテレビで歌ってる

しばらくはれんげ畑の少女たり

胸飾る白い小さな花探す

ポケットから眼鏡陛下はさり気なく

探してもふるさとなない山や川

島根県

松本文子

瞳の中に星を育てている人と

暇ですか淋しいですか犬と居て

四十五キロが地団駄を踏んでいる

かつこ良くも死ねぬのそのそと生きて

外は夏こま切れとなる思い

孫と手を叩きハトポツポを唄う

鳥取県

岩崎みさ江

木洩れ日をもらう大きな木を植える

感動をいただきに行く美術館

身の程を知らぬ心がひもじそう

こんな日もあった二人の遠花火

簡単に乳離れされるのも淋し

しあわせなふりをしているふしあわせ

加古川市

吐田公一

寝たきりの黄泉はさぞやつらからう

走馬灯苦楽が巡る母の棺

無情とや黄泉の旅の死化粧

母逝って母の温みを知った通夜

五十年再会できた亡父と亡母

祭壇へプレゼント置く母の日に

鳥取県

上田俊路

せり勝った椅子でひとりの風を知る

庭先に毎朝鳩が来る平和

朝刊の生と死の記事菜種梅雨

ほどほどに悟った顔で老いてゆく

酒もハシゴ医者もハシゴでまだ元気

世俗にはうとい男の正義感

豊中市

湯浅馬洗

三国志読まずに巡る蜀の国

(中国・成都にて)

劉備より武侯の殿の人だから

(武侯は諸葛孔明)

竹林花径 杜甫の安定僊ぶ影

(杜甫草堂)

工部祠にあっけらかんと杜甫は立ち

霧引いて江上響く船の笛

(長江と嘉陵江合流点)

猿声も絶えて行き交う観光船

(二〇〇〇メートル級の船)

ルワンダの孤児にゴメンネ新刊書

大阪市 清水絹子

三回忌すめば遠くへひとり旅

風みどり初なり枇杷を風邪の床

風邪十日あれよあれよと葉ざくらに

二人しかない子異国の西ひがし

お役人様甘露の水をムツゴロウへ

鳥取市

植田 一京

宇宙人めく孫と話が噛み合わない

親の目で見ればどの子も不肖なり

余生では素顔のわたし取りもどす

アリバイは完璧脱線して帰る

毒のある花が黙って咲いている

バラ色もおぼろ枯野に佇っている

唐津市

浜本 ちよ

庭の木々愛でし亡父の瞳ほころびて

雑草の如生きて来た亡祖母の指

口紅は老いの点晴忘れまじ

地獄絵図死しても現世と変りない

親心いつも心配から振りに

おだやかに静かに生きてあの世まで

島根県

伊藤 寿美

頼杖ついて遠い花火を聞いている

早過ぎた切り札返り血を浴びる

父の日のカサブランカを絵に残す

年金の暮しに鍵の穴もなれ

御院家さんが株式会社況聞いている

眼鏡かけた丁髷も居る番付表

今治市

野村 京子

母さんの愛は一方通行です

たまごっちへ父の拳が似合わない

曲がつていくキュウリの辛さなど思う

二十一世紀覗いてみたい豆のつる

抱くものがなくなり母の手がうつろ

狂言は止そうよ村はお祭りだ

高槻市

井上 照子

湯上がりの化粧水に明日おもう

散歩道 身の上語る老紳士

再会の幼なじみに故郷におう

大好きな友の一喝力湧く

母の日の手紙を母は残してた

氣にいりのグラスでワイン楽しんで

出雲市

石倉 芙佐子

幻の部屋で一ぷく煙草吸う

逃げ場のない煙は虹になったらし

七月の夜空こんなに美しい

娘の部屋の鳴らぬピアノと話合ふ

竹藪の家にはるばると友よ

枝から枝に上手に渡る青い鳥

砂川市 大橋政良

火の匂い風の匂いの消えた傘
インターネット天に羽搏く夢を見る
手洗いの中に本音が浮いている
結論はどう決まろうと髭を剃る
反応をしない男の長い顎

弘前市 斉藤 焔

以心伝心花は蜂蜂は花
ワイングラスほろりほろほろ散る桜
りんごの実親指越えて曼陀羅忌
鎌の柄に亡母の手跡まだ残り
スタートラインにゆっくり着く王者

弘前市 小寺花峯

逆転の影は消えたり離れたたり
酒壺がタブンタブンと千鳥足
仏壇の水をときどき取り替える
通帳に利息がついてた子の貯金
対等に会話が出来ぬ赤いバラ

弘前市 蒔苗果林

種蒔けば芽が出る地球にある命
僕という命は一つ地球と一つ
すぐ近いあの世地球に帰れない
現実には妻の留守の日 飯食わず
地球賛歌 人間賛歌 生き甲斐と

弘前市 高瀬霜石

会う度に痛いところが違う母
祈ることだけしかできぬ木偶の指
記憶しておくには戒名長すぎる
玉手箱みたいな他人の冷蔵庫庫
妻という文字にこだわる妻である

弘前市 中山雅城

対面は国士無双の匂いする
こそこそと麻雀牌が朝帰り
役満も一本二本で逃げられる
暗槓に夢も希望も碎かれる
接待の麻雀牌が芝居する

弘前市 相馬銀波

雨を待つ心を洗う雨を待つ
さあ夏は素足で街を闊歩する
スランプを形で灰皿に残す
近眼も老眼もなく本の虫
この冬も薪をと夏山下見する

弘前市 浅田隆樹

再会のドラマのせいか花粉症
パリウムを飲む日一年振りかえる
菜の花を一日見てた過疎の村
二人きり娘はずーっと風呂のなか
この酒のどこに大志が隠れてか

弘前市 高橋 岳水

仙台市 川村 映輝

花衣脱いでわが身の置きどころ

ときめきの炎を秘めている文箱

火は風を呼んで野面を舐めてゆく

飯の世に執着はせぬ竹の花

地の塩を夢見た老いの聴診器

弘前市 今 生恵子

リュックサック歩けば両手振っており

スニーカーにリュックで若さと戻す

青い色こぼれ落ちそう初夏の空

青葉風ショーウインドーは水着なり

ムンクの叫びと板状土偶の表情と

黒石市 相馬 一花

ストレスを酒で洗えば癖になる

アル中の臓器提供断わられ

花よりも団子の好きな葬儀場

仲人が褒めて祝辞が褪せてくる

カルチャーで金太郎飴を練り直す

十和田市 阿部 進

子育てがペットのために手抜きされ

残業の疲れをいやす屋台酒

諭しても今は無駄です青リンゴ

かたくなに老舗の女将味守る

あり金を使い果した梯子酒

結ばれて六十五年夢のよう

悪妻と言うが案外夫思い

妻病んで否応無しに飯を炊く

老いたのし子女も気安く寄ってくる

満ち足りて雲なき初夏を満喫す

横浜市 菱田 満秋

腹にいる児が胸張って歩かせる

交番は鍵もかけずに留守をする

生傷が絶えずに猫を可愛がり

絵はがきの通りの景色観て回る

来年も咲く花なのに惜しまれる

横浜市 清水 潮華

連休に二泊三日のビデオ借り

看板に看板募集と大書され

犬二匹予防接種に休暇とり

夏風邪を一番先に私ひく

格安の切符を無愛想が売り

町田市 竹内 紫鏑

缶ビール店で選んで語学の日

時うつり名所みやげと別の杖

お客さんと言われずバスのお爺さん

診察の速さマウスとゴム印で

老化の度合映すハイテク

富士宮市 渥美弧秀

鶯の正調 森の風が呼ぶ

記念切手無沙汰を詫げる使者となる

還暦の教え子からの記念品

傘寿になって身につく休肝日

霧雨に揺れる青葉に吸い込まれ

静岡県 藺田 模 杳

立ち向う夏に力を溜める春

縁側で囁り聞きつ眠い春

へール・ポップ宇宙のドラマ春の宵

地鎮祭青年衾宜に春の風

葉桜と風のおいしい新任地

羽咋市 三宅 ろ 亭

わが柳塔 路霞のとしび絶やすまい

梨里さんがよくも漏らしたプロフィール

眼を洗おうたとえ盗泉の水なりと

慎重な返事も時には愚図と思われて

妻の読む本を半日そつと見た

富山市 舟渡 杏 花

ピカソの片眼さがしている画廊です

唐突の嘘 精彩を浴びてくる

ひとりぼっちにすこし慣れた爛徳利

待つひとの好きなのところが見当らず

ジャンケンに賭けられているボク之首

富山市 島 ひ かる

シーソーにひとり乗ってる夕餉刻

一滴のレモン情けを深くする

山歩きいつもお供の花図鑑

句が並ぶだけで嬉しい遠い人

尊厳死 息子に理解させてある

富山県 増田 紗 弓

対応が何か出来そう十指ある

たんぼぼを旅へ出してるひと呼吸

充電完了 持ちの長さは不明です

着地まで迷いもあらうバラシユート

負けず嫌いで直立不動のネギ坊主

大阪市 津 守 柳 伸

芹みつ葉 緑剛崎は小糠雨

イカソーマン御馳走でなし街そだち

朝市の二七軍艦島晴れる

千里渚 土管は地下を通される

リハビリの水着入れとく旅カバン

大阪市 大塚 節 子

猫のあくびうつって熱いお茶にする

融通のきかん奴やと杯を伏せ

義母は喜寿 娘は古希 綱引しています

定年はなし死ぬまで舞わせてもらいます

影ふみという遊び場のあった頃

大阪市 神夏磯 典子

消しゴムに笑われるから慎重に
色眼鏡かけて汚いものを見る
その昔憎んだ夫の顔でなし
裏道を知らずいつでも遠回り
母の日は亡母の写真へありがとう

大阪市 本間 満津子

友見舞う日を選んでる空模様
口だけは変らず達者久しぶり
のむ為に食べて忘れた食後薬
忘れても忘れたで済むそんな齡
花屋では五月には無い矢車草

大阪市 町田 達子

虚も実もこころえている花の顔
お地藏さまシャッター攻めにおうてはる(矢田寺)
外孫のプランにうまく嵌まり込み
煩惱もそれでよろしいとは羅漢
ユニークな娘らガーベラを母の日に

大阪市 榊 本 落 児

女房と乾杯しますありがとう
ポケットに愛をいっぱい詰めて春
花活けて花器がようやく息をする
須田剋太あまりに艶気ない裸婦よ
タコヤキを提げて入院見舞です

大阪市 稲本 凡子

入院へ勿体なくも寝てばかり
年金は上がらず消費税上がる
戒名はつけぬ忘れられるから
最後の箱出る時孫の連弾で
死ぬまでに自分を好きと言わせよう

大阪市 渡部 さと美

買い控え五パーセントに腕が要り
百花繚乱だれもそれほど名を識らず
安いから慣れてしまった缶ビール
ほめられて老父にあんなエネルギー
紫陽花に負けず着替えて若くいよ

大阪市 小糸 昭子

失楽園ほど艶の無い待ち合わせ
原色と太陽砂漠の果てで映え
含羞を無くし女を捨てて母
ストライキさぞや総理もしたかろう
春が逝く岩かき分けて芝桜

大阪市 板東 倫子

驚いて死んだだろうなムツゴロウ
団塊の世代がリストラへ突入し
薄情な女の風情わらびもち
吟行へ修学旅行のような顔
にんげんは幸せだろうか新世紀

友情の絆で結ぶ心の輪

大阪市 井上白峰

口裏を合せて嘘を積みあげる

七癖の一つに妻の眼が光る

集会に温和な仮面つけていく

自分史の汚点を隠す厚化粧

大阪市 中田あい子

リマ事件なぜか忠臣蔵にて

値を上げる法案可決の早いこと

コンビニの弁当がよいと中二の娘

叙位叙勲 主みまかりて後届く

花水木 花の紅白バス通り

大阪市 川原章久

奥の手は憎い男にとつてある

梅雨までに河童は皿の掃除する

西成はジギルとハイド住むところ

通り抜け何万分之一の僕

つまみ食いなんとおいしい指の先

大阪市 奥田良子

ロングヘア カットした娘に何かある

浜に立ち思いとどけよ天の川

履きなれぬ下駄のうれしさ夏祭り

遠ばやし今宵一人の祭り酒

鮎解禁 焚き火も弾み待つ夜明け

大阪市 小林周信

再会を霧が包んでくれた夜

和服着て歩幅変らぬ謝恩会

減塩に飼いなされた僕の覇気

名工の腕を見せてる鉋屑

大阪市 川内叭笑

大袈裟な肩書きほどに力なし

聞く耳を持たぬ親父が昔居た

薬指 貧乏記念外せない

仮設では夢も希望も服らまぬ

三食を二度に減らして縄のれん

大阪市 田中節子

絵心を誘う岬の落日よ

そこはかと匂うシャネルの遠い過去

運命のひとり紅茶を飲む静寂

雨水で命拾った物語

夫婦連れ見る度慕情堰を切る
大阪市 福岡雅楓

文明は夜の摂理をくるわせる

大井川いま一瞬の新幹線

昨日とは流れの違う春の川

川幅を広げ名を変え何時か海
サムライをペルーに輸出してました

大阪市 松永会美

一眠り車窓はいつか北陸路
朝寝して深夜にテレビ見えています
旬のものを食べないうちに春もすぎ
盆梅に春は来ながら雪の街
白梅に寄りそうように紅梅が

堺市 柿花紀美女

マイペースで無事に夕焼け雲仰ぐ
嫁った孫たのしい話もち帰り
父母の年越え余命表も越え
倖せは日光いっぱい老いの部屋
目をつむれば亡き妹のお下げ髪

堺市 近藤豊子

いつもいつも留守番電話母の春
縁談も留守番電話からきこえ
謎めいて留守番電話点滅す
るす番電話へ用件忘れそうになり
人質の指がだんだん白くなり

堺市 吉本菁風

各部屋にカレンダーを掛け一人住み
大阪の春のフィナーレ通り抜け
アベックもホームレスも居る中之島
世界でも行儀の悪い民となり
お芝居の嘘に夢見る宝塚

堺市 中野櫨子

もうとまだ縦と横から喜寿を知る
ゆったりも疲れも思慮に旧友と旅
新茶の威力超話題ですお八つ刻
屋根修理風神雷神来る前に
咲くつつじ変な寒さにふるえてる

堺市 山本半銭

早過ぎた花道ライトが届かない
曼陀羅の真ん中へんに母が居る
針箱に小さな知恵が詰ってる
ブランドに遠い装いわたし流
鍼灸に通うて旅の準備する

堺市 宮本かりん

日食へ意地を見せます昼の月
窓の月素知らぬ顔で見えています
露天風呂月と混浴しています
丸い月わたしの啖呵笑ろている
生き恥をまだまだ曝すこの世です

堺市 志田千代

男五十抱きしめられたく候
母の願いみごとはずした子と暮らす
単刀直入言葉にはあやもありません
あいにくとあなたの席はないという
ママのハミング パスタにバジル午後の五時

高石市 浅野 房子

歯磨きを済ませたあとへ来た銘菓

好きな人に冷や飯を食わされている

万歩計今日のノルマは今日中に

マンションを持っているのに火の車

一抜け二抜けあともぬけの吹き溜り

豊中市 田中正坊

なるようにならぬ世の中あみだくじ

心に灯ポツと点くようちひろの絵

ちひろ展観ていちにちを和みけり

古希過ぎた臓器は誰もほしがらぬ

今日もまた一日過ぎて日記書く

豊中市 安藤 寿美子

うぐいすよ許せ朝寝をもうすこし

かわかわかわ鳥に言葉ある如し

夜鳥か明け鳥かと不眠症

苗代冷え梅雨冷え一緒にやって来た

息子留守 嫁とこちそう食べに行く

豊中市 井上 直次

餅を焼く匂いの中の幼い日

アバウトが好きにじみ出る人間味

お粗末という裏にほの見える自負

にこやかに無理難題を言う御仁

ずばりノー言えたらほんと楽しから

豊中市 故稲 葉 眞 郎

子供の日瞞留られて嬉しい日

五月晴れ飛行機雲が誘う旅

入学式校名の文字読んで入る

流人の島レジャーランドの売り物に

生存者は涙し折り死者空し

豊中市 滝 北 博 史

古池の蛙見上げるモノレール

リマのテロ終ったニュース聴く牡丹

連休はこまる老人病弱者

誰だって賞められたいよこどもの日

仏壇の母へピンクのラナンキュラス

池田市 岡 本 吉太郎

若夫婦二人で食える事を見せ

力にはなれぬと知りつつ聞くつらさ

考えるすべをテレビに吸い取られ

人生とは考え抜いて早や喜寿に

美女達の胸に巣くつて根性悪

池田市 栗 田 久 子

フルムーン取り残されてひとり旅

テロリスト家を恋いつつリマに果て

夕やけがれんげ畑におりてくる

とげは取りバラ一輪を母の日に

青じそは芽生えですに香を放つ

箕面市 岩 津 ようじ

大勲位そのかみのリクルート

完璧なシンクロ僕と影法師

双方が平和望んでいる戦

生涯にいくら買うかな読まぬ本

喜寿近し派手なセーター着たくなる

吹田市 瀬 戸 まさよ

そそくさと主婦さびれたる市場出る

飢える世はくるペランダにねぎトマト

花料理あとは新緑シャープベツト

スジ論を青いと思いつつ黙秘

雪解けのように裏切り許す歳

吹田市 茂 見 よ志子

蛙の声夫婦随で能勢棚田

後や先夫婦の会話逝く話

娘のライブ上京したし繰る暦

ばら咲いて棘ある人を懐かしむ

街路樹に花ミズキ増え流行や

吹田市 山 本 希久子

五月もの憂し街に空き缶転がりぬ

風が動いてあじさい寺も夏になる

豆ごはん無欲無私にはまだなれず

思い余って環状線をひと回り

誘われる予感携帯電話鳴る

吹田市 古 川 喜美子

味噌汁の葱つながって人の妻

生きるため時には越える境界線

葬儀から祝儀へ走るモーニング

春うらら河悠揚と海に入る

人恋えと惜春の闇やわらかい

茨木市 藤 井 正雄

大正のロマンくどくど祖父の酒

妻連れてサンデーゴルフは河川敷

いい便りカーテンレース類さする

左遷地の慰め地酒旨い店

風呂の順狂うテレビの巨神戦

高槻市 川 島 諷云児

影法師お前も過労死怖いのか

岐路に佇つ男の影が揺れ動く

老骨に鞭打ち上る縄ばしご

空気までこんなに重い下戸の席

三人になると男も姦しい

高槻市 芦 田 静江

昇殿参拝神の血の色みてしまふ(海兵同期会に出席)

ククツと鳴く群から外れた白い鳩

立木観音慈悲まん丸い木の温み

絶句する離宮の藤に神やどる

五葉松 銚の形に夏謳歌

守口市 森川 まさお

煉瓦道しやれたパン屋が店開く
お辞儀して神社の前を急ぐなり
母の日のお供え嫁に聞いてみる
山吹は目立つ色なり昔から
浮浪者が寝ころぶ大阪どまん中

守口市 結城 君子

セレモニーのさそいばかりが来て五月
いつ見ても矢車草のような女
じゅんさいが通じてたがいの歳をいい
変心の経過はいかにレントゲン
萍の下の世界をのぞきたい

寝屋川市 柴田 英壬子

ひと言を埋めた浜辺の落日よ
椰子の実になりたい風船ひくく飛ぶ
相寄らぬ魂老姉弟なのに
喝采の淡い夢でしたと唄う
倅せなひとね言いたい事が言え

寝屋川市 岸野 あやめ

ストーカーに捉まる四条河原町
マンションがついの住処で初夏となる
マンションに引越して買う花の苗
ニアミスは地上にもある難しさ
模擬店のおすし御遠慮申します

寝屋川市 富山 ルイ子

寝た切りを思えば杖をついてでも
杖をつく私に増えた杖の友
ゆっくりの足ゆっくりとついて行く
むべなるかな痛み他人はわからない
母の日の母へ思いを馳せるだけ

寝屋川市 籠島 恵子

のろろ運転パトカーの前をゆく
風向きを予感している逃げている
単刀直入すこし急いでいるのです
では黙禱にアメ玉が口にある
御多分にもれずわが家も吊った絵馬

枚方市 八田 敏

夫植え妻が剪る趣味花づくり
雑草が花芽と競う春の庭
亡姉偲ぶ麦秋の里七回忌
カセットの法話を夜毎聞いて寝る
何時か着る積りで背広また仕舞い

枚方市 海老池 洋

瀬淵も遙か一本の父の川
酒の量怒る限度も知った仲
歯石がりがり過去の過ち暴くよう
揉めに揉め意外な人にきたお鉢
風邪薬 妻の残りを飲まされる

地震より三年 神戸の土を踏む

枚方市 森 本 節 子

合歡の花逝つた兄を偲ばせる

一目おく義姉端然として卒寿

北野坂疲れやすめるエスプレッソ

二世の乗るレース見守る騎手の目で

枚方市 前 たもつ

冷水で体を拭いてばくの夏

剃刀を当てられ眠る癖がある

習い立ての父の料理で和む夜

ミミズへび 好きで三歳よい笑顔

歩くために靴はくのだとわかる歳

交野市 福 崎 しげお

通り抜け一句うかんだ北出口

鉢巻が消えてメーデー行楽日

号令に従うくせが抜けきれぬ

多数決正論追いつくこともあり

面影が似てる毒舌聞いておく

東大阪市 森 下 愛 論

死神に疎まれていて生き続け

上等兵墓標の文字も苔むして

夢袋背負って登る老いの章

無料パス鬼がせつつく老いの章

グイ飲みで五体の調子確かめる

東大阪市 指 宿 千枝子

山の水大志を抱いて川下る

電柱のカラスが犬に吠えている

五月一日快晴うつになりそうだ

豆の蔓と一緒に明日を考える

元気です元気で居ます仏さま

松原市 小 池 しげお

もう二度と泣かせなかった納屋がある

じゃが芋に味方の顔と敵の顔

昨日より頑固になってきた引き戸

あき缶よお前も汚職していたか

蜘蛛の巣に今日はじめての夏の風

松原市 玉 置 重 人

元凶は私らしい妻の愚痴

妻の乱掃除洗濯ばかりする

花ことば人のやさしさあたたかさ

そよ風に誘われ上手夏帽子

モヒカンも茶髪もみんな自己主張

藤井寺市 吉 岡 美 房

お遍路のゆっくり見えて村を抜け

忘れもの我が少年の日の大志

躑躅燃え男の胸に火をつける

少年の眩しさと会う青葉道

只酒が昨日のことにしてくれず

藤井寺市 高田 美代子

この齡になつてもハッピーバースデー

蝙蝠もつばめも飛んで中之島

商品のうちは磨いていた娘

平均という線が有りのし袋

どつと疲れて喝采を聞いている

藤井寺市 福元 みのる

酔いまわる頃には意見言いそびれ

逆にして見れば真相分かるかも

ゆるゆると湯につかりつつ秘策練る

柔能制剛 弱音吐いてるわけじゃない

世紀末人災か地球荒れに荒れ

藤井寺市 中島 志洋

藍染めの浴衣で夏を若返る

堅物の妻も知らない裏の顔

大好きなひとへビールを注ぎこぼす

ラッキーマン相手チームに運が付き

タイガース勝つて何度も見るテレビ

羽曳野市 吉川 寿美

足の裏見せ合う友という和み

木登りの下手な男の耳飾り

内面外面父のラッパが孤立する

二人羽織地でゆく夫婦欠け茶碗

紙コップの軽さで別れ言いやすし

羽曳野市 福田 満州

はなみずきも散るとみんなに忘れられ

懸命に咲いて若やぐ樟大樹

お米屋でお米買わねばお気の毒

水田の苦勞は知らず舌鼓

目の前のしあわせ五十数えましょ

羽曳野市 田中 透太

ピリオドを打てずに今日も靴を履く

蕾まだいっぱいつけている六十路

石楠花の艶に染まりし石仏(岡寺にて)

選り好みされても何もない私

狂つてはならぬならぬと米を研ぐ

八尾市 内海 幸生

フィナーレの夕陽へ礼を大声で

師の影に顔向けできぬ句の並び

一日一句今日は白紙のまま捲る

一枚のハガキに貰う走馬灯

自動栓手を離しても流れおり

八尾市 高橋 夕花

ああ五月たつぷり私に水をやる

花の精に嫉妬してから花粉症

カラフルな一日風呂の湯が溢れ

ペン一本大切に生きて生きている

しなやかに生きる命の枯れるまで

八尾市 宮崎 シマ子

自慢話を一くさり添えバラもらう

青天白日病室を出て行ける

倒産したそんな出てゆかはったそんな

迎え傘若い二人のハーモニー

背くらべ柱の疵の劣等感

八尾市 生嶋 ますみ

戦争を知らぬ父と子武者飾る

筍の香り漂う温い土

肉嫌いと言つて残さず平らげる

母子の声ひびき風呂場の灯が温い

後ろ髪引かれる思い出る本屋

岸和田市 芳地 狸村

モノリザの真の微笑が素晴らしい (ループル美術館)

中世が見事に残るお伽街 (ローテンブルグ)

白銀の峰を手にとる凄い駅 (ユングフラウヨッホ)

音楽とワインに酔っている酒場 (リューデスハイム)

彫刻が氷河の中で生きている (アイスバレス)

岸和田市 高須賀 金太

匂い立つように新緑濃くうすく

禅寺へ行つてところを磨かねば

葛藤が始まっている軽い嘘

利子ゼロの時代がきつと来るだろう

かがやきの時間を持つている新人

岸和田市 原 さよ子

わがままも同居しているマイペース

あしたまた会う友達と立ち話

用心をしすぎ忘れたしまい場所

じんわりと腹立つ税と低金利

満々のやる気じいちゃん赤いシャツ

岸和田市 古野 ひで

以心伝心猫も私を嫌ってる

仔を愛す猫の瞳のやわらかさ

御堂筋銀杏の薫りのするところ

美しい花嫁だったね 帰路につく

風邪癒えた途端に友が案じられ

岸和田市 寺田 甚一

一面から新聞読んで知識人

日本語も悪貨が良貨駆逐する

富士京都あこがれが名を借りてつけ

まっさきに邦人を言う事故ニュース

一汁一菜薬に縁のない昔

岸和田市 長谷川 呂万

煩惱を忘れほろ酔う通り抜け

準備終え出発時間待つ長さ

元金があつての話利子の率

古稀過ぎて煩惱どれも角がとれ

また来たいテレビのコイン肩越しに

岸和田市 田 中 文 時

訴状未だ見てないと言う逃げ言葉

納得はせぬがお上のなされ方

さっぱりとするぞと外科医事も無げ

古希の坂しんごい医療費の値上げ

焼香もラスト近くと言うご縁

貝塚市 池 田 寿美子

万緑を揺るがす滝に祈り込め (那智山)

フアンタジー誘う菜の花河川敷 (桂川)

新茶摘む震災の子等生き生きと

ふれ合うて僻地の貌があたたかい

ターミナル老いも若きも胸を張る

富田林市 片 岡 智恵子

エフエンス雨に煙った古代都市 (トルコ旅行 三句)

ミステリアス自然風化の住居跡 (カッパドギヤ)

東西の文明溶けるイスタンブール

背なでドア閉めた記憶の部屋がある

いのちの根深くなるから耐えている

富田林市 松 本 今日子

三回忌木蓮の花香り居り

したいこと一杯あつて何もせず

釣堀で携帯電話なっている

その今が思い出せない五月晴

再会を果たしたあとの味気なさ

河内長野市 井 上 喜 醉

重荷抜け余生のハンドル風まかせ

思ひ出の時をゆっくり温める

国境を越えても平和な渡り鳥

老犬の胸の奥まで知ってやり

海外で日本語半分変になる

和泉市 西 岡 洛 醉

ほどほどの酒に寿命を保つ日々

妻の手に乗って踊るも良しとする

人生の橋真ん中を闊歩する

対峙する文机苦あり楽もあり

一輪に妻の愛情活けてあり

和泉市 岡 井 やすお

異国人みんな救って勇士死す

賛成も居る沖繩の難しさ

投票もせぬ人に死を決められる

良く当たる八卦悩みの種つくり

老人に東北良し来世紀

大阪府 八十田 洞 庵

夢追いに飽きず女の梳る

母の目へ昨日の嘘を言い出せぬ

誰ももう踊らぬ笛を吹いている

魅力にはとばしい素顔楽屋口

プライドが高くて居場所ない女

大阪府 榎山隆盛

流水の望郷はるか地球規模
三代代厄を落とした松尾寺
祭り好きみんなが山車を曳きにくる
ご婦人へ当てる消費のターゲット
花道で三國一の見えを切る

京都市 都倉求芽

桜前線が通過してゆく風邪の床
ピン札で渡し目の前で折られたり
陽に光る樹の精 水の精風の精
風邪デ休み がたまごっちに並んでる
冷房よく効いて子方の南無阿弥陀仏(謡曲「隅田川」)

京都市 山海友熙

七月もわたしも旅の風に逢う
これからの人生白い風の中
全身を女の風が吹き抜ける
母だった頃よわたしは風の中
手鏡にわたしの過去がよく映る

京都市 大河未佐子

洗濯が好き青空に白が好き
春風にしあわせ数えまどろみぬ
愛うけて目に触れるものみないとし
夕焼けを残し天女は山の蔭
ありがたきただ美しと見る入日

京都府 稲葉冬葉

きんつばがわたしの葬儀見届ける
減肥茶を仲よく飲んでゐる嫁姑
面影がだぶるので布団を被る
おたまじやくしが蛙になった祝事
雨の日のポストのお口拭いてやり

奈良市 宮口笛生

粗品あるから妻が行ってこいという
何うまいそうだね冷えたビールかな
古希にして酒一向に衰えず
年金の日を孫達もあてにする
寒い方がやっぱり良いかアア暑い

奈良市 天正千梢

百年の炭坑閉じし桜散る
もがり笛 襟裳岬にふきつける
若かったんだなあ相手をねじ伏せて
ただ酒に麻薬があると気がつかず
弾飛んで信仰厚い国とやら

奈良市 吉田笑女

一言の波紋広がるなきぬ仲
嫌なこと見て見ぬふりをしておこつ
二十余年過ぎて同居のすれ違い
それとなく子が陰となり日向にも
一家五人祖母には話の種がない

生駒市 北山悟郎

奈良県 長谷川 春 蘭

春うらら氣迫抜けした平和惚け
僕には何時も奇跡が付きまとう
それぞれに人うぬぼれを抱いている
老いの坂心にしきり錆がつく
掌を合わし最後を立派に飾りたい

生駒市 麻生 アート

お母ちゃんと呼ぶ心根にかえりける
忘却の彼方に星の輝けり
何時までも乙女であれやサクランボ
鳥瞰図わが家は物の蔭にあり
国というオルガン 総理もて余し

大和高田市 岸 本 豊平次

国宝の軒を塹にしている鳩
下手な字も肩書ものを言う色紙
ハイキング故里に似た道をゆく
建て替えて大黒柱のない実家
散骨をしても絆は捨てられぬ

大和郡山市 榊 原 慧 心

塩送るライバルいない定年後
権力を形で残すピラミッド
人生は3コーナーで決めるもの
波ひとつ越えても次の波が待つ
更年期津波警報出っぱなし

言葉尻とられて苦しふきのとつ
色ちがい夫婦湯吞で新茶汲む
師の句集読みふけるのもよき今宵
子等は皆ジーパンで足る衣替え
九の年の九の日句作る苦にならず
ヒロインはあなたナイトに徹し切る
浮き上がったところで梯子外される
お手製の句集が温い袋綴じ
新人を与し易しと見た誤算
乗り換えて里の訛りを聞く安堵
つぎはぎの思惑固め眉を引く
墓地の空広がる彼方鯉轡
旅行案内折って飛ばせる紙飛行
横文字に振り仮名孫からのファックス
とめどない雨に足止めされている
押し出され諦めがつく心太
それ以上脱げば周りが風邪をひく
油切れへ交換出来ぬ膝小僧
躓いてばかり一円玉拾う
死に神に仲良しばかり攫われる

和歌山市 福 本 英 子

和歌山市 桜 井 千 秀

和歌山市 堀 端 三 男

和歌山市 池 永 正 匍

嬉しさに何故か軍歌が口に出る
餅撒きで拾うた餅の有難さ
ストローは麦わらだった砂糖水
出合うかも知れぬ思いの散歩みち
空きつ腹に天下の味の握りめし

和歌山市 宮 口 克 子

それからのあなたへわたし元氣です
私とわたしがケンカするお酒
休日の私が歩む別世界
大丈夫もうトンネルは抜けたから
お陰様で強くなれたのよと涙

和歌山市 青 枝 鉄 治

雑巾を絞る感じで税をとり
腹芸に長けてリストラ免れる
物言わぬ社のロボットが肩叩く
映倫の顔で観ているエロ映画
芸無しは隣の膳もはしごする

和歌山市 田 中 輝 子

桐の花 忘れたきこと忘れず
疵跡を宥めすかして生きている
言いたい事を言ったわたしの丸裸
悟り開いた湖は渦など寄せつけず
旅靴ふいに岬が見たくなる

和歌山市 細 川 稚 代

尼寺で尼の自叙伝聞きたがり
頷いて聞いてないのか怒らない
肯定も否定も出来ずそばまんじゅう
水族館の鯨にウインクしてやろう
距離おいて愛の行方を見定める

和歌山市 岩 本 美 智 子

香焚いた宿に心の糸緩む(大分の旅 三句)
水に洗われ頬ほんのりと磨崖仏
屋根に覆われて磨崖仏の苦笑
銅鐸に積もる話を聴いている
信玄袋をショルダーにする初夏の街

和歌山市 玉 置 当 代

はぐれてはならぬと君に歩を合わす
ぞろぞろと又ぞろぞろと通り抜け
水上バス水の都の人となる
成るようになれとかぶった握りめし
毎日をエンジョイしてるローヒール

和歌山市 山 口 三 千 子

割り切ったつもりが情に流される
回り道した人生の夢芝居
未来図に描き足していく虹の色
引き返し出来ない道に蜃気楼
人生と言う時間には逆らえず

海南市 三宅保州

警笛を鳴らしてくれる友がいる

ひらがなの名前の店でホツとする

途中下車なかなかできるものでない

長生きをしてねと言った人が逝き

いやんなっちゃったと息子Uターン

神戸市 中村 ゆきをを

せわしない世間や階段気いつけや

地車も人も祭の輪をつくり

死にたいと思うに桜派手に咲き

尋ね道茶髪角まで連れてくれ

新緑や亡母に詫びたきことばかり

神戸市 池田 善守

ネクタイに罪の匂いを少しさせ

陰日向あつて私の味ができ

こんど会う日を早めてる同窓会

影法師笑ったつもりが泣いていた

引越してここに切手を入れたはず

神戸市 山口 美穂

震災の傷気紛れで疼き出す

週休七日忙しく七日すぎてゆく

救急車どうしはったか気にかかる

税アップされても食べずにはおれぬ

枇杷熟れて片恋の人過ぎる

神戸市 木村 貴代子

旅の本時間空間忘れさせ

制限食次々浮ぶ旅の味

円安も株安もなく土と生き

必ずと言えなくなった震災後

薄化粧することもない十八歳

尼崎市 春城 武庫坊

公邸突入古きラテンの血の決断（人質解放）

緑の風がみんな集まる葉の忌

休肝日なし意志薄弱と言われても

武者人形仕舞うと風が入れかわる

あわれみの顔で弱味をつつかれる

尼崎市 春城 年代

読み更けり胸ふくるも眼を病みて

もう一時ですよと母の日の亡母の声

お湯割りの焼酎きこしめし詩人たり

自由とはこんななにしたのし七十七歳

打たれ上手で夢まぼろしと生きている

尼崎市 長浜 澄子

雨は嫌 眸にモネの絵が濡れる

レトロシヨップであのとときめきに逢っている

偏差値も一掃 激辛のカレー

軽いジャブ返して窮地きり抜ける

振り出しに戻り五月の風を抱く

西宮市 奥田みつ子

クレーン直立 その復興に月しずか

子は遠く窓打つ風を聞いている

亡母を語れば幼いままの兄いもと

忘れた言葉ばかりが耳の底

大きい耳つまらぬ話聞き流す

西宮市 門谷たず子

亡友と見た虹が二度とは戻らない

子や孫がいるので祭り笛楽し

病む友の住む街抜ける新幹線

無言劇身の内を吹く寒い風

打たれ上手になって近頃よく眠る

西宮市 西口いわゑ

諍いをして夫婦はさし向い

大胆な空振りなのですくわれる

きざしが長く御利益ありそくな

森の中神のポケットかも知れぬ

れんげ菜の花人は遠い日と思う

西宮市 刈田泰司

捜し当て責めるのはまだ後回し

嫁探し大事な議題村議会

迷路抜け出ると花野にひとりきり

寝て待てば運また逃げた宝くじ

迷いたちきる土砂降りの雨

西宮市 山本義子

終点からまだまだ里のみち続き

亡母想い刺身包丁研いでみる

宝石箱 近頃とんと開けぬまま

あいさつは出たとこ勝負すると決め

山菜とり天地に申すありがとう

芦屋市 黒田能子

昨日から引きずったまま朝のうつ

耳なりのするほど静か山の夜

決心をしたのに雨が降ってきた

川下に流れて水は疲れきる

澄みきった川は命を呼びもどす

伊丹市 小熊江美

網棚に土産忘れて旅終る

正義感むきになる息子で気がもめる

足ることを知らぬ時代の子が育ち

ためになる話子にしてうとまれる

さわやかに老いたし朝の化粧水

伊丹市 山崎君子

メーデーの帰りやさしい嫁となる

すれ違いの香水かすか遠い人

雨の日も風の日もない仏みち

五月晴れゆとりをくれるひとり旅

宵の雨芝生にぼたん絵のように

宝塚市 嵯峨根 保子

昭和シングル晩学の辞書はなせない
鍵屋の辻でむかし話を聞いている

引つ越しが嫌だと猫は家を出た
どよめきの辻へ長刀鉾がくる
面影をうすむらさきに抱くところ

川西市 氏林 洋敏

足止めのためにお酒を用意する
葉桜になつても好きな人を待つ
青信号先頭きつて渡るなり
真実になるまで嘘を磨いてる
裸婦の絵へ分別くさい顔で立つ

岡山市 井上 柳五郎

東京も歩いた靴だ別れる日
ハオハオもハラショウも聞くハルピンよ
民意無視さつさと決まる消費税
味噌汁に目玉焼きですきよう迎う
減反と干拓もする腑におちぬ

岡山市 時末 一灯

春雨に故なく哀し街の灯よ
ひたむきに単線走る山の駅
バカだったではすまされぬツゲがくる
台本を逸れてから知る人の味
携帯を持ったらスパイめいてくる

岡山市 花田 たけ志

川端に住んで釣りには無関心
あばら屋に似会わぬ池と庭があり
ひき蛙 狸夫婦と池の番
言いくい事を自然に別れざわ
初ものを毒味よそおい食べてみる

岡山市 川端 柳子

夢を縫う針と糸とを光らせて
あと二三質問があるすしケーキ
群れたがるメダカの中の恐怖心
時計もわたしも急げ急げの世に疲れ
花道の思い出老後の身を癒やし

倉敷市 田辺 灸六

陰口が要らぬお世話をやいてくれ
なりふりは構わず飯の種探し
大声で男まさりのヨイトマケ
ありがとうそんなひと言目でくれる
日本人短い足は気にしない

倉敷市 小野 克枝

蛾を蝶に変える祝辞のあたたかさ
亭主関白許し続けて水になる
煮る揚げる女は業に侍りいて
亡母の瞳のやさしさに会う草の道
落日を胸の絵皿に画きためる

倉敷市 井上富子

ときめいて捲れば旬の花暦
名ばかりの椅子につかまるのはよそう
ちり打ちや佗びを疊んでいる袱紗
体形のくずれは言わぬ秘湯のゆ
うまい話に石橋が揺れる

岡山県 江口有一朗

寂しいとは何かを老いてまだ知らず (田中澄江女史)
九十五翁の表紙絵息を止めて観る (玉青翁)
砂浜が消えそう地球温暖化
幼児期の甘えが足りぬ子の育ち
娘に買った車で夏の旅プラン

岡山県 小林妻子

残高のない通帳と刻み足
離婚する理由にならぬ大いびき
採算は合わぬ瑞穂の米作り
子や孫のくれた旅だとすぐ分かり
のこのことコーヒー呑みに行く未練

岡山県 大石あすなろ

パンジーの彩とりどりの自画自賛
毒舌をさらりと躲す酌ぎ上手
どうぞどうぞとつんば棧敷に通される
太郎冠者ちか頃裏の庭いじり
ひたすらに來た足跡が浅すぎる

岡山県 福原辰江

鮮明に塗り変えたくて旅に出る
脱皮して訴えながら蝶になる
諫めてる母の涙を見てしま
末席の妙案静かに動き出す
絶好調亡父の声が聞こえない

呉市 榎田英詩

安住の地ではなかった壺の蝟
一張羅の悲鳴が好きな俄か雨
終点の見えた老い先考える
趣味一途家族の世話になってます
酔った箸絹ごし豆腐手にあまり

廿日市市 林野甦光

助言する妻が受話器のそばにいる
腰かけて対岸の火事見ています
頷いていると左遷の地も慣れる
お喋りの口元可愛いほけの花
カレンダーの裏にあなたの顔がある

竹原市 小島蘭幸

妻は今も打出の小槌もっている
いい人だ趣味の肩書きばかり増え
薔薇が咲いた結婚記念日の薔薇が
合掌を解いて淋しいことを言う
四十九歳みどりを少しもっている

竹原市 森井菁居

カランコロン日本の音へ安らぎぬ

笹の葉さらさら緑のコーラス聴いている

長男を直撃固定資産税

少うしは丸くなるかと茶を習い

蝙蝠よ嫌われ者と知ってるか

竹原市 古谷節夫

リアルタイム地球の裏が出るニュース

花の芽に夢がいっぱい付く日和

晴れた日に雨傘持つて出る女

母の日に妻へ贈ったバラ一枝

政治家も詐欺師も居ない過疎の村

竹原市 岩本笑子

うんとお鳴きよウグイスも恋を知る

給料日まず一番に米を買お

一本杉の命見つめていたカラス

留守電へちよっぴりかいた母の声

税金を払うに金を借りに行く

竹原市 時広一路

聞き慣れて太鼓の音に動じない

座らねば椅子の重さは分かるまい

石段を数える声が小さくなる

真っ直ぐの線に余裕は生まれぬ

少し橋低くなった雨上がり

竹原市 石原淑子

紅白の牡丹咲き初め誕生日

汗かいた分だけ苺甘くなり

ゴーギャンの世界にひたる温泉ランド

カーネーション姑の墓前に手を合せ

春の陽にひととき無心ミニ遍路

広島県 藤解静風

憂きこともなげに泳ぐや鯉のぼり

食糧費見境もなく公を食べ

5パーセントに慣れる頃には7パーか

母の日の妻にはいつも妬かされる

古井戸の過去は覗いてくださるな

広島県 森川抜智

白内障さやかな空に鯉泳ぐ

白内障なおり旅行の本買いに

五月晴 白内障の目にやさし

減反反対ニホンは瑞穂の国なるぞ

錦帯橋渡れば抹茶待っている

宇部市 平田実男

五七五 僕の砥石になってくれ

許されぬ日もありました共白髪

光陰は矢よりも早い六十五

リリーフの妻が後ろにいる安堵

ライバルが元氣沈んでおれませぬ

美祢市 安平次 弘道

鳥取市 美田旋風

自信喪失ひとり芝居が続かない
予想雨静かにピアノ聞いてます
モナリザの微笑は花粉症だろう
六法を繰るから敵にあなどられ
価値観の相違私は旅に出る

下関市 石川 侃流洞

飯と酒 満腹違う不思議な胃
酎二合 僕には天国まだ遠い
猫送るお経は鳥獣戯画の里
よきに計らえなどとオヤジ呆けて来た
沈黙考だれた会議に耐えている

鳥取市 両川 洋々

鬼だつて笑い袋を買いに行く
善悪の縫い目を神は見逃さぬ
地吹雪が眠る雪おんなを起こす
核の傘次の世紀でたたもうぞ
その先を読むと消しゴム放せない

鳥取市 岩原 喬水

災いが福になるまで寝て待とう
更年期奥歯を見せて欠伸する
春の湖老化の脳が甦り
春風は亡母の吹いてる笛だろう
子育ての鬼を終つて翔んでいる

その昔聞けばいきいき喋る老母
燃えてくる脳へ手足がそっぽ向く
流行を追つて気付いた自己破産
官僚の嘘も引き継ぐ天下り
口が滑り思わぬ副作用

鳥取市 小谷 美ツ千

紙飛行機とばすあなたに逢いたい日
困らせて困った顔の君もすき
優しくとつてもずるいおひとです
充電をしたくて海に佇んでいる
アルバムを開くと麦の穂がゆれる

鳥取市 西村 黙光

庭に菜種蒔いて雀に掃除さす
鯉織チームワークの素晴らしさ
旅行には問答無用のワンカップ
痴呆症の虜になった怠け癖
絵の具より吾が自画像は墨がいい

鳥取市 春木 圭一郎

趣味だからもうかりまつかでは困る
裏庭で金のなる木が実をつけた
幸せの条件やはり金ですか
愛情があるからお金惜しまない
お金ではなびかぬひとを妻にする

鳥取市 武田帆雀

春宵千金 北斗の水を頭から

錆びたペンチ文鎮にして菊工房

カルシウムには事欠かん背戸の猫

インテリの百婆さんは政治通

メイ・ストーム無惨や菊の新芽折る

鳥取市 坂田和歌子

それからを悟り悲しい鶴を折る

二つない生死に五体すり減らす

丑三つ時陽気な妻が泣いている

花暦ほんに短い逢瀬なり

チャップリン元気の種は貴男なの

鳥取市 杉本孝男

心配は要らぬ手紙が金ねだる

雑念の針はやたらに指を突く

甘え上手に母性本能くすぐられ

世直しを唄う先生嘘も混ぜ

大会という名の芝居演じきる

鳥取市 倉益一瑤

抱きしめてやりたい崖に立ってる娘

風景画 神の腕前には勝てぬ

女の城守る奥歯が疼きだす

満点の人が好きとは限らない

スタートライン ドキドキ欲の音がする

鳥取市 野中御前

ときには鬼ときには仏お姑さん

お若いといわれとうとう買わされる

食べ頃の女水着で街あるく

年波に大胆になる豆の花

日差しのシャワー貧富の差なくうけてます

倉吉市 松本よしえ

ソプラノを真似て金切り声になる

マンションの六階で見る鯉のぼり

昼ごはん食べるとすぐに眠くなる

丸木橋一氣に駆けたこともある

喪の帯を締めてドラマの列にいる

倉吉市 淡路ゆり子

繋がれた紐の長さの世を渡る

もう一度衣を替えて生き繋ぐ

英語 カタカナ 生きるに辛い世になった

スタートライン 余裕無いのは私だけ

夕焼はわたしの未来輝かす

倉吉市 最上和枝

知恵の輪が苦も無く解けるのも困る

よこれ役かって出見せ場盛上げる

一肌を脱いで纏れた糸を解く

問診のナース優しいジョーク見せ

田も山も背負って故郷後にした

倉吉市 野口節子

晩年の父は綻び縫いつづけ
計算器壊れてからの良い仲間
風船ふわふわ春の気配に落着けぬ
とべそうで跳べない母の水溜り
金運はないが五人の子が育つ

米子市 林荒介

ふる里があつて気楽な水を呑む
新茶揉む友達がいる蕎麦の猪口
古伊万里に煎茶玉露と注ぎ頒ける
だまし絵の中を出這入りして家族
ポストと煙草屋がある僕の縄張り

米子市 林瑞枝

髪を梳くひとりの指にある微熱
葱坊主どれも仏陀の顔である
呟きはわが黒猫の瞳の奥に
キャッチボールのかたち仁王の掌の形
花追うて谷のことには未だ触れず

米子市 木村富美子

大かきは海が風ぐまでやめられぬ
いい年で煙に巻かれてばかりいる
古古米を食べることに慣れておく
天までの階段今日も一つ登る
巢立つ日は海もやさしい声になる

米子市 政岡日枝子

船戻るかもめも嬉しそうに飛ぶ
大漁旗かもめも何か叫んでいる
あたたかい街だとかもめにも判る
かもめは群れて落伍者を底い合う
かもめ旋回 河口に浮いてる父の首

米子市 野坂なみ

清元の顔を白寿が締めている（清元志津太夫）
近道は通行止めにしておこう
亀になつてもこの階段は登りきる
続編は乗り換え駅で始まつた
散るまでに心残りのないように

米子市 光井玲子

変心の青虫うしろ振りむかぬ
思い出がつきぬセピア色の写真
電話よりハガキ一枚待つ母で
裏通りが好きな人情匂うから
会つて見ればごく普通の方でした

米子市 澤田千春

はちきれそうに輝いている匂が好き
この横穴は極楽へ行く道ですか
響き合つた二人だったな香をたく
遠いとおい海の話の塩に聞く
血縁の深さを想う藪つばき

米子市 田 中 亜 弥

目を伏せた方が負けだと言いきろう
さからった波にしっぺいがえしくう
背をのばすと一歩一歩が軽くなる
双眼に昔のままの母が住む
子供の背あれよあれよと伸びてゆく

米子市 白 根 ふ み

花びらに紛れあやしい羽化のとき
いたずらなひと日 大切ないち日
一人酔うグラスの底にひと恋うる
ふくらんで祈りになっていく夕日
脇役の顔も皺がふえてきた

米子市 鷺 見 正 子

草萌えるドリंक剤を二本飲む
沖に在る間は若い浦島だ
顔洗うたちまち元の木偶になる
みどり子を抱くポーズが美しい
月見草咲いてむかしを語り出す

米子市 青 戸 田 鶴

花吹雪舞台せましと玉三郎(松竹座こけらおとしを見て)
桜の精なりしか妖に美しく
感動を積み重ねたら塔になる
人混みの中でも目立つ友であり
旅の終りを満たす何かをさがしたい

米子市 茂 理 高 代

哀しむと亡母の位牌が動き出す
寒椿誰を庇って雪かぶる
気合い入れ朝焼け拝む朝の顔
影がはげますから私背をのばす
上向きにたまに咲きたい藤の花

鳥取県 林 露 杖

柳友の葬厳かに五月晴れ
老ゆことの酷しさひと夏が来る
涙腺に歯止め利かなくなつた老妻
チャネルが妻と合うのは巨人戦
乾杯に腰も伸ばして差し上げる

鳥取県 土 橋 螢

美しい女にアンテナ向けている
触らせてくれた乳房も小さくなり
その女の住所氏名をまだ知らぬ
真実が真つ赤な薔薇にきてとまる
うれしいことがあるように牡丹咲く

鳥取県 土 橋 はるお

トラクターがコウモリ傘をさしている
快晴にすっぱい布団干している
札束が金庫で軒かいている
尻穴がすっぱい高所恐怖症
町並みのいろんな崖を見て歩く

炎天にやせたあばらの骨が鳴る

鳥取県

津村 八重子

汗さなり流して明日の陽を待とう

エネルギー明日の分もためておく

平等と言う字に包む温い味

ご先祖に合やす両手をよく清め

鳥取県

鈴木 公弘

返せない傘を一本提げている

発火するものが拳の中にある

女眼にナイフをかざすから怖い

言い負けて雑木林に立てこもる

風みどり黙って歩くほかはなし

鳥取県

谷口 次男

五十前水虫までが同居する

オキナワとペルー未だに遠い国

傾いた地球の軸が直らない

黒幕の胸三寸で動く国

木橋の持つ温もりを忘れない

鳥取県

羽津川 公乃

山菜の宝庫に熊も顔を出す

手強いな孫の味覚が肥えて来た

義歯洗う顔を互いに笑い合う

垢抜けぬ顔だが信用出来そう

顔二つ持って組織を使い分け

新緑がもくもく初夏の天を突く

鳥取県

西原 艶子

母のことばかりあふれる夜の机

点滴のように涙が出て困る

哀しめば五月の空にわらわれる

しあわせは熱中させる詩がある

鳥取県

太田 幸枝

借りていた命を返す日がせまる

土に汗流したわな実り待つ

土に生き心美人で老いたしと

正直な土に骨身をおしまない

浮き沈み七坂越えて丸くなり

鳥取県

田村 きみ子

ひばりピーチク孫もピーチク平和だな

七色のリボンで敵を迷わせる

雨好きの紫陽花今日はきれいだよ

都忘れの花咲きました仏さま

まだ女明日着る服を選っています

鳥取県

石谷 美恵子

笑い袋の底半分は涙かも

退職金他人が計算してくれる

転ぶたび男結びが固くなる

新緑の陰亡父がいる亡母がいる (摩仁寺時行会)

去りがたい亡弟に似た地蔵さま

鳥取県 乾 隆 風

杖ついてこつそり縄のれんを潜る

暗やみのわたしを探す螢かも

ポイントが錆びて五感が鈍くなる

背伸びする足場が崩れかけていた

この世からもぬけの殻を脱いで往く

鳥取県 さえき や え

きり島満開ごらん下さい仏さま

ひからびた心に点す花あかり

雨城忌やわらびゼンマイ天ぷらに(俳人元町長の忌)

朝々のよろこび車椅子を押す

点滴がポトポト生きる夏をくれ

鳥取県 西 川 和 子

帰省した後ろ姿がたくましい

アドバールン大分自信があるらしい

その列の中で泣いたり笑ったり

風船が風に乘れないまましばむ

ぎこちない鍬が何でも植えたがり

鳥取県 乾 喜 与 志

牟寿坂振り返り見て余生だな

この駅もしつかり山の幸と乗る

ひとつ道も通えば近く思えだし

交配を終えた花から静かだな

梨園の白さの中に桃の花

鳥取県 橋 本 多 哥 由

骨拾う箸冷静な太さです

み仏をはらはらさせて生きている

赤い実をいっぱいつけて待っており

味方より敵にすてきな奴がいる

父無口時には放つホームラン

鳥取県 石 尾 かつ 乃

ランドセルもう慣れましたスキップ踏む

種粃を蒔いて一服夢談義

みんな出ておいでと初夏の風が呼ぶ

留守役のひと日変身して見よう

今までの雑談これも潤滑油

鳥取県 黒 田 くに 子

老母は未だ脆い絆をつないでる

頑固とは心の弱さかも知れぬ

あとを継ぐめどへ明るい嫁がくる

出不精がたまに出るから雨になる

勿体ない屋根あり三度飯を食う

松江市 舟 木 与 根 一

各論になると絆が小煩い

腰掛けで椅子の空くのを待たされる

駄菓子屋のレジへ収まる消費税

余生かな嫁へ傾くヤジロペー

化粧みな落して菩薩母乳を遣る

松江市 柳 樂 鶴 丸

日本訛りでキム・ウンスクの歌唄う

肩書も学歴もない人情家

第三の青春です未だ七十です

太陽が大好き僕の健康法

年下の妻が姉さん振っている

出雲市 尼 れいじ

同じ木で今日も鳴いてるハト時計

お手すらも出来ない猫を飼っている

ひょうきんな妻には丸い角がある

披露宴じつと耐えてる岩田帯

振り向けばだあーれもないお立ち台

出雲市 園 山 多賀子

葉桜に忘れ上手を囁われる

倅せは静かに充ちる沙羅の花

独りいて白湯の温みをもて余す

花言葉好きで濫用しています

伊勢物語恋のパターンを読み返す

出雲市 吉 岡 きみえ

母恋しああ浄土とはいかなるや

まぶしくて母娘の会話から抜ける

仲間にはひと粒ずつの餡がある

無為無策いつものように陽が沈む

色褪せた写真わたしの春十九

出雲市 板 垣 草 丘

楊枝から指の太さへ露伸びる

年毎に杓文字が浅い炊飯器

月蝕の形に菓子を食べている

連休が済んだ誘いに乗らぬ妻

黙禱三分さすが中国だと思ふ

出雲市 岸 桂 子

生命線今の命はどのあたり

人間をいつかは裁くパンの耳

腹の立つ事を黙って聞いている

墮落というまい眠いから眠る

どの皿も玉子平和に盛られている

出雲市 久 谷 まこと

筋書きもそうそう書けぬつくり事

手応えは無さそう拍手バラバラと

生かされる幸せ分けるボランティア

足ならしまだまだ遠い一万歩

子と親で角度の違う視野がある

出雲市 竹 治 ちかし

用事などないが覗いて父帰る

島を出た人から島の良さを聞く

的少しはずして父の矢がささる

夫は酒 妻は昼寝の二人旅

ビジネスとレジャーが同居する列車

出雲市 富田蘭水

太陽を拝む父親まだ安泰

足の裏活躍支えた今日のタコ

孫祝う幟武者絵も尼子方

別荘を建てると親友遠ざかり

霊柩車出あい喜ぶ縁起かつぎ

島根県 西村早苗

デザートはトマトひとりの昼を終え

あらためて齢を数える師の計報(津川紫叟師の死)

手のひらへ指先で書く忘れごと

百舌のくるアンテナがあり隠居部屋

故里を離れると淋しい汽車になる

島根県 佐々木鳳笙

せめてもの救いか何も訴えぬ(実弟容態)

暴走のバイクが去って元の闇

トンチンカンの孫の電話へ耳を寄せ

一斉にそばする音三回忌

分別も傘も忘れた旅終わる

島根県 堀江正朗

まな裏に抱きしめている師の温み

闇六十年 恥かくことも増えてくる

やれそうでやれぬ事にも湧く魅力

妻の手があれば不思議な安堵感

老いの道風に逆らい流されつ

島根県 堀江芳子

夫婦箸なんの不思議もなく妥協

ワンマンでいいよ元気を証です

骨董品のぞいて亡父を思い出す

ときどきは歳を忘れることの幸

軒下も木陰もみんな話し好き

島根県 藤原鈴江

カラオケで音痴もすこし唄ったよ

歳なればためらうことなく出雲弁

方言で孫と漫才しています

薬責めお陰でどうやら生きてます

歳かしらお化粧だんだんおつくうに

香川県 木村あきら

順風に帆を上げ新婚 鹿島立ち

箱入りの稚苗天日がマブシそう

火加減は妻にも秘めた登り窯

川柳の虜で俺は未だ死ぬぬ

根回しが過ぎると少し生臭い(沖縄特指法)

香川県 工藤吟笑

濁り水飲んででもやはり故郷がよい

ヒナ壇に座敷とられて小さく寝る

鷹産んでみても仕舞いは二人きり

この壁の向こうは波が荒れている

飲み込みが早くて消化不充分

香川県 川崎 ひかり

震度八思わず浮いた深海魚
おこぼれがほしくて尻尾ふってみる
タマゴツチ持って一日落着かず
どうしよう時計十分遅れてた
野の花はきっちり四季を守ってる

香川県 山地 マツエ

B級で小さな夢をあたためる
無になると人の心が見えて来る
駅弁に昔話をふり返す
桃活けて娘の居ぬ部屋を春にする
あちこちで血圧計って落ちつかず

松山市 丹下 美津子

幕切れはいつも素敵に散るさくら
霧囲氣にうかれた母のタンコ節
妻の留守目がけて飲んだ血糖値
玉ぐし料敗訴遺族のむなし日
金星に払うに惜しい肩の砂

今治市 越智 一水

うわの空で聞けば小言は面白い
タンポポの花だけ残し草は刈り
水草の花の白さへ松の影
偽りをその横顔で見えしまい
雲を追い雲に追われるひとり旅

今治市 矢野 佳雲

名刺交換軽くジャブ打つ小手調べ
お土産に目もとの似てるこけし買う
猿人の遺跡で尻尾もろてくる
よくわかる絵だから古いなど言われ
筆一本にじみかすれを使いわけ

高知県 北川 竹萌

茶摘み畑 釣銭戻し合う賃払い
月とすっぱん子等は等しく育てたが
母の日に姉娘家内をかんぼの湯
高齡の首を並べてかんぼの湯
町会費集め出合いの土佐美人

高知県 赤川 菊野

案内状夫婦で来いと書いてある
沈黙が金になるとは限らない
このままで逝く日待つか桜散る
無人駅門出の息子一人乗せ
一本の筆で書いてる慶と弔

北九州市 梅田 宣司

玄海暮色まだ眠らない淡い瀟
ずぶ濡れの野犬とタぶる過去がある
聞き役が所どころで火を煽る
ひとりぐらいいい一億が捨てるゴミ
余命表みつめマンネリではおれぬ

唐津市 田口虹汀

日の本に生れ私は余剰米
千金の宵を不粋な救急車
ストレスを乗せてブランコ揺れている
声だけは似ても父には及ばない
今日もまた昭和の友が旅立った

唐津市 久保正剣

イソップの頃はなかった脳死論
動燃が総理の脈を狂わせる
逆転打サードコーチもホームイン
昭和史にバンザイの字が消えている
先帝の遺徳を偲ぶみどりの日

唐津市 仁部四郎

勘違い税務署だつてあるだろう
失意の日背中にあつた昼の月
病窓へ距離動かさぬ昼の月
遺伝にはゴロ寝の癖はないはずだ
自分史に当人嘘は書いていず

唐津市 山口高明

緋緋の鎧累代愛でて春
勝敗を決める一手を待ってやる
母乳さえ汚染の二十一世紀
出稼ぎの帰る日母は美容院
軍隊を作ろかクロール人間で

唐津市 山門幸夫

螢来い甘いよ甘い露天風呂
人恋し梅も色づく五月雨
南溟に空しく散つた石飛礫
靖国も寺にも在す御霊たち
薫風や対の帽子で杖の旅

唐津市 山門タミ

タンポポは東京大阪根をおろし
父の背が小さくなつた風呂上がり
納骨堂こも来世の仮の宿
御無沙汰が新茶の香り持つて来た
汗拭きを握りうとうと五月晴

唐津市 市丸晴翠

玄関は燕に譲る五月晴れ
隣から洩れる灯りは温く見え
にじみ出た疲れと語る仕舞い風呂
深い皺ドラマそれぞれ畳み込む
埋み火に灰を掛け掛け耐えている

熊本県 高野宵草

衣食足りすぎて粗末な人となる
散髪で耳学問をして帰る
決心の宣言だけが先走り
われこそはわれこそはと立つねぎ坊主
温泉の真ん中に座す一人きり

弘前市 一戸ツネ

おぼろ月疲れた河童 影がない
南無南無と祈る花びら地に還る
淋しくて温い矢印搜してる
起承転結所詮人間ドラマです

弘前市 岡本花匠

バラバラで一緒の浄土路郎の忌
からみあう根っこが絆生活の譜
菜の花の迷路で惚ぶ花浄土
雉鳩の論す声聞く亡母だろう

弘前市 須郷井蛙

飲める人年々減ってクラス会
文化財あって道路が迂回する
自動かと立てば手動のいいお店
消費税客に小さく詫びて売り

弘前市 櫻庭順三

新のゴム長じゃぶじゃぶと弾み出す
カンニングかまきりの眼に蔑まれ
逃げ水を追いかけてまた追いかける
喜寿までも騙し続けた不整脈

八戸市 島田昭治

落ちこんだ僕を励ます亡妻の声
真心に触れて身体が熱くなり
天国で娑婆の続きの恋したい
人妻の手を握ったら夢がさめ

青森県 諏訪柳々

花の下心寄りそえ押す車
旅帰り和服に着替え吾が家かな
女湯でまた猥談のひとつきり
二十五年 堅炭ながら火がついて

青森県 西谷大吾

有線にじよんがら流れ花りんご
坪庭の石それぞれの貌を持ち
車座になれば不思議と回る舌
鍋底でじっくり煮込む嫉妬心

東京都 山口新子

回復の石段登り切るを待つ
まちがったふりしてかけてみる電話
つつじほつほつ柔軟体操しておこう
明日帰る娘のメモが弾んでいる

大阪市 北勝美

杖を突く脚にも自転車なら乗れる
看取る足行きたいとこへ行けぬ足
病床の窓に薰風そつと入れ
幻覚も薬の所為かパーキンソン

大阪市 松尾柳右子

女性誌に必ずヘルシーアドバイス
青々と水かけ不動の苔元氣
花筏水にまかせて姿変え
可愛らしい顔が空けてる大ジョッキ

大阪市 河井庸佑

実績を過信しすぎて落ちた穴
追い詰めた王がするりと擦り抜ける
見解の相違はあるが仲が良い
筆無精余程のことか手紙来る

大阪市 藤田頂留子

だんじりばやし亡兄が戻ったらしい声
雑草に夢を見させて居る更地
子育てにママもつばめもおいそがしい
ネックレス女ふんとすれ違い

大阪市 清水利武

銀行が傾き粗品質がおち
銀行が信用出来ぬという日本
伊勢海老と蟹へ喜ぶグルメ旅
綿菓子も虫も売ってる夏夜店

大阪市 寺井東雲

年毎に淋しさふえる同期会
ムツゴロウ助けてくれと大きな口
5パーセントに反対署名したけれど
楽しみは晩酌に出る旬のもの

大阪市 辻川慶子

豊かさになれておいしい水を買う
浴衣着てはたちの青春思い出す
仰ぎ見て登りはせぬが山が好き
この歳に迷う事なし今日の無事

大阪市 川端一步

朗読の李陵を聞いてうまいコーヒー
亡母の忌にやっぱり亡父が出て夫婦
孫の授業参観 母校の懐かしき
ヤングママ子どもとベアがよく似合う

大阪市 玉置英子

善光寺の鐘ききながら杏熟れ
買える値やおへん暫く目の保養
夢やないこれぞギヤマン ガレの瓶
打明けよう張子の虎も領いた

大阪市 黒崎恭子

はなみずき早や夏場所の番付表
立夏きて季節のあとを追いかける
天満ばし一年ぶりの友の笑み
カーネーションその日は母の花になる

堺市 黒田真砂

あれこれと行く末の事矢車草
取り越し苦労と娘に笑われていさぎよし
食べられる胃がうらめしい豆御飯
優しさと気遣い友の文とどく

豊中市 吉田あずき

おぼろ夜に掴むものなし花匂う
老人ホーム少し低めの鯉のぼり
世話役になった日にあるお葬式
携帯電話聞き耳立ててる訳じゃない

豊中市 江口 明 光

前サバキ上手な寺のコンサート
今日も照る入道雲を引き連れて
ドラマ見たその日我が家に置き替える
夜桜のむらさき色へのを置く

豊中市 松岡 久留美

子を待つ夕べの町に母は立ち
老いの性思い違いを押し通す
ライバルのきらめく様を嫉妬する
たつぷりとはったお風呂にひたる夜

池田市 藤井 計 光

初対面 慇懃無礼鼻につき
女とは矛盾という名の動物だ
微笑みに気むずかしさが透けて見え
過ぎ去れば孤独になつていく思い

箕面市 椎江 清 芳

濁り水鯉には鯉の住み心地
斬られ役目立たぬように息をする
落ち目ともなれば落ち目の人が来る
吊り橋で嘘かほんとか確かめる

茨木市 島元 ふ み

それぞれに色の違った子の家庭
友達が老いにブレーキかけに来る
到来のワインをあける客を待つ
青空の下で若者膝枕

寝屋川市 江口 度

来ては困るが一応声はかけておく
へび嫌いの妻はへびをすぐ見つけ
OB会のような葬儀が多くなる
阪神リード貧乏ゆすりとまらない

寝屋川市 平松 かすみ

花卉の泳ぐに琵琶湖大きすぎ
お喋りのお口も閉じる哀愁歌
長浜へ着けば曳山まつりなり
道端で旨いうどんを教えられ

寝屋川市 堀江 光子

待合室 隣 周平読むらしく
当日になって衣裳にまだ迷い
血統書などとは犬の知らぬこと
買い溜めは出来ぬ医療の値上げ案

寝屋川市 北岡 波留吉

八十路坂で戦友にお詫びの墓まいり
八十路坂鐘をついては過去洗う
弁当が発破をかける万歩計
腰弁でも我慢私に過ぎた夫

寝屋川市 太田 とし子

音無しの構えが恐い妻の背
ツアーの旅どこの誰にもありがとう
先ず一步出せばなんとかなる閑路
水澄んで姿かくせぬしじみ貝

寢屋川市 酒井 勇太郎

歯には歯をが出来ない妻でいとおしい

飾らない祝辞 功罪半ばする

四世代回らぬ舌が和ませる

子は巢立ち親が背中を押す哀れ

寢屋川市 森 茜

勘違いしているらしいベン尖る

にわか雨 花屋少しも慌てない

歯が一本抜けているらしアナウンス

誠実さにじませ竹の子が届く

寢屋川市 後藤 黎之助

タンポポの見上げる桜散りはじめ

鉛筆の先を丸めて日向ぼこ

筍の皮はぐように嘘がばれ

足速に葉桜の道通り抜け

寢屋川市 坂上 高栄

君の名はなんて言われて若返り

安心も不安も溶かす絵の具皿

核廃絶ドーム無言で語りかけ

呱呱の声5パーセントの税を負い

枚方市 二宮 山久

今日生きる為の朝刊ひろいよみ

夫婦喧嘩たまにはしたい幸せさ

酒好きが飲めない席にいる不安

人生をたえぬく靴をじっと見る

東大阪市 安永 暁子

学生の白の流れに添う日傘

はちきれる若さはないが踏むベダル

五月晴れ老い吹っ飛ばしクラブ振る

初夏の風電話ではずむ旅プラン

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

追うたとて一つ遅れの観覧車

泣きにゆく川は少女のころのまま

川底の小石も素足恋しがる

激情の川にわたしをおきかえる

羽曳野市 酒井 一壺

好きなパンいつも売ってる角の店

我慢しろ角を曲がれば楽になる

人目にはつかぬ根っこに夢がある

生まれつきいい根性を持っている

八尾市 宮西 弥生

ちひろ展やさしいところで午後のお茶

派手な彩選っても似合わぬ五月病

玄関もベランダも花花女の句

結局は女同士でお好み焼

八尾市 高杉 千歩

留守電が姑のプランをみな喋り

ママだけが希望捨てないピアノ塾

ゆびきりを思い出させる靴のひも

先頭を歩く演技かも知れぬ

八尾市 大内朝子

ときめきは恋と花火と観覧車

奈良市 米田恭昌

四面楚歌 風鈴までが知らんぷり

淋しいと笑顔づくりがうまくなる

ささやかに生きてほくほく夢を抱く

空に鷗尾ひとひらの雲よく似合う
好事家の顔赤らめる形見分け
土と木の香りも温い母娘展（妻と娘のすきですきでつくつ展 二句）
母娘展こんなに温い風に逢う

岸和田市 藪野けい子

今年こそ優勝せよとトラファン

0157 今年も不安手を洗う

年金の利子から税を差し引かれ

母の日に腕相撲する母さんパワー

岸和田市 井齋一齋

色々の鬼が並んだ撮影会

窓際の力を借りる新課長

寝たきりで保険満期が気にかかる

初給料手取り驚く控除額

富田林市 池森子

楕円形になってしまった正義感

歳月は遠い花野から枯野

長いながい髪のうしろは愛だろう

フルコースのスープに感性が鈍る

河内長野市 植村喜代

三連休私に休みなどはない

車椅子なれてすいすい走り出す

地獄よりこの世の鬼が怖過ぎる

安心して生きる陽ざしを待っている

誘いはあじさい寺の小糠雨

和歌山市 山田高夫

雨有情 四季には四季の雨が降る

世間との落差に負けたなと思う

身から出た錆そぎ落とす日の懺悔

前向きに生きろと父の檄がとぶ

和歌山市 玉井豊太

言い負けておこう男の喉仏

百歳を越える目標飯を食う

年金の中から送るビール代

クレヨンで菜の花晶青い空

和歌山市 福井桂香

木洩れ日の協奏曲に招かれて

竹藪で春のレシピを掘り当てる

しなやかなこころ耕す鋤をとる

横文字に弱いわたしのDNA

和歌山市 堀 畑 靖 子

あい染めの過去は貧しき者の詩
攻められて負けず嫌いが顔を出す

恋終るまだ駆け出した段階で

衣がえ白がまぶしい季節なり

和歌山市 古久保 和 子

トルソーを抱いて練習したダンス

献血車の前を素通りしてしまふ

カヌー初体験 木の葉もこんなようなもの

禁煙車 禁子供車も思うとき

和歌山市 榎 原 公 子

ばあちゃんの愛です白いシャツパンツ

どんな艶出るのか今は荒削り

割り切れぬ答をのんでずくなる

くすぶりの元を辿れば君に着く

西宮市 牧 渕 富喜子

蚊のうなりひとつの春を消してゆく

明日知らぬ指が無心にさし芽する

異常な暑さすこし怯えがまじり出す

遠い地に震度七あり後遺症

西宮市 秋 元 てる

気まぐれにお菓子贈れば誕生日

亡父よ母よ今宵山独活ほろ苦い

気に入られたくて自分を殺す夜

汐灼けの孫 日本丸帰港

西宮市 亀 岡 哲 子

ヘリコプター低空飛んでいる電話
スキップの蹟きそうな子のシヨパン

キッチン窓で育てている三ツ葉

迷い込んだ蝶ゆらゆらと弱冷車

西宮市 菊 池 トミエ

葉桜だそろそろ夏の衣替え

大正も先細りゆくクラス会

泣き砂を踏んで丹後の夏を呼ぶ

五月病枕を代えてふつとばす

西宮市 久 保 まさお

その一瞬 新幹線は走り抜く

明日問わずいまを生き抜く若葉かな

マイナスをプラスに替える時の運

その一瞬いのちは消えて深い闇

川西市 松 本 ただし

色に出た鬱を流した終い風呂

漁火が鶯色に浮いた闇

日本も無傷で済まぬリマの色

根の色は大地の恵み忘れない

宝塚市 上 田 佳 秋

誰のため書くか決まらぬ僕の遺書

聞き返しだんだん増える耳の垢

鈍行も行き着く場所と同じ駅

阪神がリード ビールの量が増え

宝塚市 黒台 伊佐武

回復の兆し嬉しき五月晴

俄か雨いっきに呑んで夏木立

成し遂げた顔でありけり夏の空

水馬しきりに塔を揺らしおり

姫路市 古川 奮 水

花の里押すな押されて通りぬけ

ポンペイの遺跡男女の性見付け

鯉のぼり夫婦善哉孫を抱く

お喋りはトイレの水で流される

相生市 中塚 礎 石

難民へ物資とどかぬ肋骨

欲望をぎっしり詰めて諸結び

ほこ先を丸める老いの紙やすり

芽の音を聞いた地蔵の目が動く

岡山市 二宗 吟 平

役者のよう脱いだり着たり四月馬鹿

寝ていても年金となる老いの日々

整理して又整理して置き忘れ

自転車で行くドライブは老いのもの

岡山市 荻野 鮫虎狼

極楽の口で閻魔の独り言

矢印は地獄の方へ向いている

奈落から見上げる月が美しい

横に這う手もあり蟹に教えられ

岡山市 岩道 博友

宿坊で精進 亡母の味想う

長電話答の上手い妻を出す

丸腰で頼みに行けば留守と言う

用の無い雨の日SP出して聴く

岡山市 矢内 寿恵子

幸せな作句は辞書を引きながら

足跡を確と残した詩形見

鈴の音に呼び戻された深い闇

母からの便りが深いとこに着く

岡山市 山本 玉恵

うれしくて時々のぞくコンパクト

一徹を通した父に泣き所

忘れねばならぬ想いを陽にかざす

女百夜よろこびも又かなしきも

岡山市 福原 悦子

はなやいで見える花見の裏表

今日はストお昼のお茶が沸いてない

無から無へ歩きつづけている余生

六十の希望時々息切れる

広島市 森田 文

星好きの仲間ただ今サミット中

あしたまた誰かが通る山を下り

祭りすぎ日本の良さを強調す

ふるさとを守る弾んでいる顔だ

柳井市 弘津柳慶

大声がわかつたらしい笑い顔
性格さ仕方ないさとあきらめる
片目つぶれば彼女に僕の意が通じ
かと言えばつと通じる老夫婦

鳥取市 前田一枝

腹の虫よう怒るのが居て困る
どんな花咲くかわからぬ苗染し
旬よりも一足早い宅急便
丁度良い所にほくら魅力の

倉吉市 米田幸子

葱しよった鴨に狙いの的しほる
目的を果たして消えたしやぼん玉
ここ掘れと瓦礫の山を掘らされる
煩惱を捨てて余生の荷が軽い

倉吉市 山本玲子

知らぬ間にバラの蕾に蟻がつく
顔の皺隠せるうちはまだ花よ
流行も過疎にはテレビから届く
深刻になるとごめんが言いだせぬ

米子市 石垣花子

洗濯物にからんで通る五月風
小商人お世辞も小出しにして使う
ハイウエー出来ても五月は渋滞だ
代々の家紋を守る積木積む

米子市 木村春枝

ほめ言葉温い気持ち聞いて
神の前同じ誓いを並べたて
刃物より恐い言葉を受けている
犬の目が次の言葉を待っている

米子市 中井ゆき

裏のない花の言葉にとりつかれ
年ですな大事なことば出て来ない
青い空かもめ失速して落ちる
雲ゆきがあやしくなつて立ち上がる

米子市 永井三津子

虹消えるまでにあなたの愚痴を聞く
悠然と緑樹の森にある鼓動
匂うよな女夢見て化粧する
産まれ出て還る故郷の土温い

鳥取県 新家完司

薬缶の滾る音は時間の過ぎる音
つましい漁村に重油流れ着く
自慢話だんだん嘘になつてゆく
刑務所がなくなることはいり得ない

鳥取県 土橋睦子

娘ひとり恋の稽古がまだできぬ
人間の負けをみている落し穴
そば殻の枕に母の唄がある
母の日に母の十九の春のこと

鳥取県 幸家單車

点と線結ぶと謎が解けて来る
相談に來たが居留守をつかわれる
手を結ぶ振りで裏切る友もいる
当選の中にまさかの人が居た

出雲市 小玉満江

歓迎会おだてに乗った千鳥足
嬉しい日皆に笑顔分けましよう
意外だなまだまだ弾む古希の毯
老母さんと並んでうつすばたん園

出雲市 板垣夢酔

地から湧く太陽 今日も猛暑抱く
薄口の夫が妻は氣にいらす
臍出して騒ぐ浜辺の娘たち
なごやかな夫婦に風鈴する夜風

出雲市 小白金房子

大役を果す女の袋おび
タタ酒に浮かれ石段踏みはずし
再会を誓う笑顔が美しい
すんなりとみやこ忘れが庭で咲く

島根県 森茂美

みどり色の太陽と会う春の山
お洒落して逢いたい人が出来ました
補聴器に嘘の福祉は通らない
鯉のぼりこの子の明日を跳ねてみせ

香川県 池内 かつり

赤提灯他人の悩みを聞く羽目に
他人さまのカゴの中味よレジの前
家ごとの違う文化がおもしろい
バアさんになった写真を悔しがり

松山市 宮尾 みのり

言い訳をするほど見えてくる本音
他人にはきれいに咲いてくれる花
別居してからやさしさを取り戻し
精神余命いつまでですか下り坂

高知県 小澤 幸泉

病友を私の過去と重ね合い
定年後空手で生きること慣れ
微熱の中に亡母の微笑がみえてくる
度の合わせぬ眼鏡あしたを探し当て

熊本県 岩切 康子

子供の日ソフトで甘い粽かな
隣から氣さくに注いで名刺出し
薪能絵になる席で落着いた
兄弟で孫の自慢かほっほ

正本水客（大阪市）、吉田笑女（奈良市）、北勝美
（大阪市）各氏から、追悼川柳大会に金一封を拝受
いたしました。厚くお礼申し上げます。

自選集

松川杜的

花よりも一言欲しい生の声(母の日に)

あの日から母には言えぬ罪一つ

あの日から月に兎はもういない

手を添えて弥勒の笑みにある浄土

春夏秋冬 日本地図美しい

恒松町紅

うっかりと多弁浪費家とは知らず

正論を出すに依怙地に誤解され

脳細胞に指図をされる晴れマーク

法要のあとで世相を斬る話

ネクタイを偶に締めると冷やかされ

金井文秋

ぐうたらで暮らすストレス溜めぬよう

楽しさもいろいろとあり生きる張り

老人ぼけと縁はないらしありがとう

次々と挑むものある余生です

花粉症知らないうちに春も過ぎ

波多野五楽庵

許されよ悪感が妻に八つ当る

三面鏡心残りがありそうで

寡黙さの理由を聞かぬ石畳

有線の曲に酔えない耳たぶで

諦めの顔でたち去る月の暈

黒川紫香

素うどんを頼み天気のことに触れ

柔らかいお手々ですねとさわられる

鯉泳ぐ川をときどき見に来ます

片隅の空地で野菜よく育ち

屋上にもう点きましたビアガーデン

小西雄々

夢追いの邪魔する鬼がおおすぎる

返すのが嫌になるほど利子が付き

袖風呂で籠のゆるんだのに気付き

さっきまで意地張ってたに落椿

花畑へ痛む心を埋めに行く

八 木 千 代

おトイレの窓から青空が見える
むかしの絵 映すレンズを持つている
年をとってもしっかりと見る雪月花
虹を映している雨垂れのひと雫
わたくしを澄ませて水鏡を覗く

辻 白 溪 子

遺産分け意外な身内現われる
体躲す程度に逃げておく余裕
乗越しのホームで時間待ちの蕎麦
とぼけとく方が得策だと思ふ
晩酌へゆつくり愚痴を聞かせとく

月 原 宵 明

置炬燵から眺めてる水着ショー
台所譲って味見だけさされ
居眠りを羨んでいる苦労性
夢多き少年だった白い眉
海に石投げる少年人を恋う

高 杉 鬼 遊

銀行の看板白く塗り替える
保険屋がつぶれ死ぬにも死なれない
生きるのを知っているのはおんなたち
珈琲に砂糖たっぷり無頼なり
戦争がいまだに重い背のリュック

藤 井 明 朗

あたたかい励みところに沁みる詩
歩みは遅々五十年の詩のあと
老いてはならぬ健康を信じてる
つつじに佇むひとへ一札さくら土手
ころろでは情熱秘めている微笑

小 林 由 多 香

全没も気にせぬ広い海がある
潮の香へ頭もペンも冴えてくる
海猫の舞いが句になりペン走る
鯛が跳ねひらめがはねて句座はずむ
もてなしへそろそろ海へ陽が沈む

正 本 水 客

ふり向けば影が私に話しかけ
今さらに電話に出たとしてしょうがない
岩海苔の好きな友だったと土産買う
恙無いかとだけの便りの手紙くる
矢印の通りに歩けば花に会う

奥 谷 弘 朗

悪知恵が無いと政治家にはなれぬ
人柄が噛んで含めるように言う
許す気の邪魔をしている自尊心
人生にシベリア捕虜のあるドラマ
二枚舌つかう男に油断すな

生きている嬉しさ食べる物旨い
猿真似の芸で八十路生きている
花時計やさしい風に包まれる
浮草のように流れている八十路
檜山の風に年輪揺れてくる

藤村 女

予算どおりにいかない予算たてる旅
慶事弔事いずれにしても金が必要
目が覚めた今日一日を永らえる

野田素身郎

これ見よがしにつがいの蜻蛉すういすい
待ち人は今信号を渡るとこ

西田柳宏子

スキャンダルどうやらスターの仲間入り
トップにはダミーを立てて切り回し
箱庭の隅に金魚の墓も立て
妻に尻つつかれやと口を切り
協力は惜しまぬ律儀うとまれる

遠山可住

ばあちゃんの身嗜みですへちま水
どんぐりの中の頑固が憎めない
偏差値というため息が並んでる
七十の恋もやっぱり片思い
点滴のしずくポトポト過去ポトポト

橘高薫風

水濁り火も汚れ行く世紀末
嫁姑カーネーションは火の簇
羊羹を切るにもふたりぼっちなり
古稀も生きてか孫の気韻にさえ劣り
無口なる人でありしが今日の旅(悼 稲葉真郎氏)

河内天笑

ときめいてくらしの匂いさせぬ女
はじめからしまいまで口動いてる
勝負師の肩にふれてはなりません
勝負師の肩に女神が住み給う
一日に一回咲いてくれる妻

尼崎川柳大会

とき 7月20日(祝) 正午開場
ところ 園田学園女子大学図書館2階
321教室 (阪急神戸線塚口駅下車 南西10分)

お話し 園田学園女子大学短大部助教授
田辺真人氏

課題 (各題2句・午後1時締切)

「田園」	森田栄一	選
「近」(共選)	久保田半蔵門	選
	高杉鬼遊	選
「待つ」(共選)	平山繁夫	選
	村井見也子	選
「門」	墨作二郎	選
「左」	森中恵美子	選
「海」	藤本静港子	選

会費 1000円(欠席投句拝辞)
表彰 尼崎市長賞・園田学園賞ほか
懇親宴 会費3000円

主催 尼崎川柳協会

昭和十年二月号の路郎先生の巻頭言は

「何れにしても、人間の魂に点火する川柳でなければ、十七音字工作がいかにか巧みにほどこされてあろうとも、それは沙上に描かれた閑文字に過ぎない」と結ばれている。

また、編集長福田山雨楼は「川柳時評」と題し、柳壇の流れを次のように書く。

▽「きやり」の柳壇展望で花川洞曰く、「流行作家は枝葉の問題である。東京の雀郎、周魚、三太郎、大阪の水府、路郎の現役五頭目がシツカリ手をつないで呉れば当分わが柳界は万々歳である」はどうかと思う。

▽手をつなぐと言えは聞こえはいい様であるが、それは無理な注文である。早い話が右の東京三頭目についてもそれぞれ吟社を擁しているではないか。寧ろ川柳の進歩からは各独立し相闘争する方がいいのだ。只ひとつ、文壇への押出しを図ることにおいて、その精神において結合すれば足りる。

▽路郎と水府にしても、この二人に握手を求むるのは認識不足だ。第一性格の相違がこれ

を許さない。路郎は詩人肌、水府は商売人肌、到底水と油である。次に句の傾向が違ふ。水府は甘い句、穿ちの句を嗜くし、路郎は寂しい句、主観句を好む。

▽三太郎は「文壇進出は却って大阪のように文壇のないところの方がやりよい」と言うが逆だ。日本の外交が国際連盟という本舞台へ斬込んだればこそ世界が日本を馬鹿にしないのだ。東京にいる川柳家は、東になつて文壇へ挑むべし。

▽この前番傘の塊人が雀郎の説を反駁して、川柳家が川柳家の悪口を言うよりも、川柳のよさを文壇に示せと叫んだことがあるが、それは一面観であつた。雀郎は都新聞に「俳諧厄払い」を執筆して、俳人に二太刀酬っている。この論歩も必要であるが、併せて現代の川柳についても、名吟を示して迫ることを望む。

▽近來「川柳名句集」と称する出版が簇出する。結構であるが問題でもある。それは句主或は購読者への欲心に迎える、算盤玉の關係もあることながら、余りに名句に乏しく、然

らざるもの多きことだ。「川柳の名句とはこんなものだ」と威張れるような句集が一つや二つなくてはならぬ。昔、川柳新星会から出した「一九二四集」など手本にしたい。

▽「手」で町二が「僕の川柳論」をものしている。そして川柳味を棄てて自由律たるべし、と叫んでいる。これは大分井泉水あたりにかぶれているが、よき意味において、斯くの如くにして川柳園内へ後足で砂を蹴ることは淋しい。且つ苦々しい。

夢路の言葉ではないが「川柳を愛し得る素質」が歪んで来たのではないかと思ふ。

▽井泉水の文章は読みよく、著書も多いので我田引水の理論にはつい引き付けられるが、これによつて俳句を誤るものは尠くない。

(以下一章略)

▽概して柳壇が平穩である。覇氣に乏しい。今年あたりからも少しお互いに闘いたいものだ。互いに競い争ひ練り合うことが必要だ。▽東西の交歓も結構だが、真の川柳の友達は浮いた心のときより、悲しみ合い助け合ったときの方が胸を搏つ。

柳友の遊戲的社交と、吟社の籠城主義——これは川柳を毒する。

右は現在の川柳界に通じるものが多々ある上に編集者のスケール意気込みを偲ばせる。

川柳太平記 (230)

川柳の群像

大熊吉三

東野大八

大熊吉三と書いても、本誌の皆さんはご存知の方は少なからうと思う。しかし、レッキとした『川柳研究』と『川柳さいたま』同人の川柳人だ。

この吉三クンと初めて出くわしたのが、昭和42年備中高梁市で開かれた大陸川柳作家同窓会である。晩年、俗称バンダで通す。

見るからに一癖も二癖もある相当のへそ曲りの御仁とお見受けした。これからあとのこの大陸同窓会の集まりには、欠かさず顔を見せていたが、会ったたびに「此奴は大部分変っているな。へそ曲りどころか、イボ蛙なみにへそが背中へ回っている御仁」と認識し直した。

その後の集まりの中で、お手前のことを書きたいから故事来歴をつぶさに知りたいと

申し入れたところ、くるわくるわ、原稿用紙十枚から二十枚、加えてフスマの下張り用の和紙へ下手な筆書きで目いっぱい書いてくる。署名「バンダ山人」その便り原文のまま。

「小生は明治39年の大晦日に、利根川と荒川をつなぐ貝沼代用水で産湯を使った。

関東平野のどまん中で、江戸城の東北口で中仙道、日光街道、水戸街道の要衝だけに、幕府は最も神経を尖がらせ、地域各村落に厳重な見張りの陣屋を置いた。バンダの祖父は、その幕府最後の関守として苗字帯刀を許された旧家だった。

しかし、明治維新前夜、その地域一帯で民衆の一大蜂起に遭い、祖父は小判を井戸に投げ入れ、生命からがら逃げ回る羽目にあつた。父は安政生れで吉三は七人兄妹の末弟。母は

病弱で、子どもはすべて雇い女ませ。このため父は花柳界を泳ぎ回り、後家狂い。こんな親父の血をひいたためか、中学校四年生の時、寄宿先の叔母の家で女中部屋に夜這いを敢行、目的を達したものの即日追放。かくしてわが人生の野良犬的放浪の開幕となった。

ころは大正から昭和のはじめ、関東大震災の惨劇をしおに、世は不況のどん底で、失職とスト時代。学生はマルクスボーイにあらざれば人に非ずの調子に乗って、日大在学中は学業より女極道、田舎芸妓の若いのとデキて同棲、非行学生のモハンで、転校三度、親戚をクライ回しの目にあつた。

やがて徴兵検査だが、寸足らずと目の悪さで有難くも内種合格。家と親の七光りで、土方の帳場やローカル新聞の広告取り兼記者——この時、松方幸次郎が十五銀行を計画倒産させて野に下り、ソ連からの赤い石油を芝浦に荷上げした持ダネの思い出は今も懐かしい。

こんな暮しから野良犬同然で妻帯など思いもよらず、吉原、玉の井、向島辺りを土方の親分や新聞社主の腰巾着でうろつき回った。

折しもその最中に日支事変が勃発、ツテを頼って大陸は北支の天津へ渡つたのが昭和十三年、おん齡三十を越えたばかりだ。大陸へ来たからには、中国人との会話ぐらいは必要

と、天津租界のブラック建での学校へ六か月通って、どうやら中国語が通じるようになった。そこで持ち前の女好きから、姑娘朝鮮の群がる繁華街で羽根をのばした」

書けばキリがないが、パンタ吉三の書簡はエンエンと続いた。ここではしなくも上海を根城とした児玉督士雄の一味に身を投じたが、これは天津地区の右翼笹川良一の手先のツテからで、かくて児玉機関の一員となって上海中を泳ぎ回り、軍需物資のやりくりをタネに大いにくらやみパンタの本領を発揮した。往時よく知られた児玉機関は、昭和16年11月に国粹大衆党総裁で右翼の超大物笹川良一の肝いりでつくれたものである。日本軍部は、この時早くも対米英開戦を予定し、大戦開戦後に必要な大量の戦力物資確保を図る際の調達機関だったという。

パンタ吉三は、この間のことを詳細に描きぬいていたが、その中味はこの本が二、三冊あっても足らぬので、遺憾ながら割愛する。太平洋戦争はなぜに起り、何がゆえに負けたか、その最大の原因は、近代兵器戦に不可欠の科学と物量の差で、敵英米に比べて日本側の必要物資は、敵方の僅か数パーセントにすぎなかった。鉄鋼・ゴム・石油・錫・ニッケル・マンガン等は、敵方とは雲泥の差があ

ったわけで、よくも巨額にアリがたかるような戦争をオツパジめたものだ、とパンタ君は呆れかえるが、その実、物資獲得にどのような心血をそそいだかの内幕は実に面白い。

この機関の産みの親は、山県正郷海軍中将だとパンタは述べ、わしが一番苦労したのは戦闘の最重要機材を動かす「雲母」獲得作戦で、彼はその筋の有力者の指示で、中国の組織の藍衣社にまで身をさらしていたそうだ。

「海軍の西郷さんと言われた山県將軍におれは会っている。エライ人だった」というのを最後に敗戦となる。どこをどうくぐり抜けたか、パンタ君は戦犯にもならず、「ボクの大連の青春は終わった」とうそぶいている。丙種のガラクタ動員で無事ともいう。

「川柳をかじり出したのは昭和8年で、神戸へ都落ちした折、神戸新聞の柳壇選者相元紋太選に入選したのがきっかけで、気まぐれに顔を出した湊川観光会館で、ふあうすと記念大会があり、三太郎・雀郎・周魚・紋太等のソウソウたる連中の選に二、三句抜けたのがまあ病みつきだな。昭和27年だったか、

脳味噌に逆らうような本を買い 吉三が三太郎選の特選になり、誘われるままに川研同人になったんだよ」と大隈川柳作家同窓会でのずつとあとの集りの折の彼の直話だ。

この同窓会は、昭和59年秋の高野山大会で第19回をしておに解散したが、その消滅後、「どうだ生き残った新選組で、ホントの大陸人川柳作家集会を作ろうよ」とパンタが筆者に持ち込んだのをおに昭和61年ごろ、作ったのが「長江会」だが、参加者たった九人のため、筆者はこれつきりにしてしまった。この会に参加したパンタ君とは、言わばこれが永の別れとなった。

昭和62年7月17日横浜で逝去、享年81。
「おれが死んだらこの身は献体するよ」と言っていたので「ホルマリン漬けて残るは骨だけよせよせ」と言ったものだ。遺句。

象の死豚の死人もまた二一夭作 吉三
働き蜂の子で父親が映らない 〃
欲すてて貧乏一途の余生かな 〃
貧乏が楽になってマルクス映し出し 〃
身を捨てて病氣と共存もできず 〃

▼次号は「三宅 巨郎」

ジュニア川柳特選 全日本川柳三重大会で、次の作品が選ばれた。

小 赤ちゃんの心よむのはむずかしい
中 おとなりさんいたく時はいい人に
高 先生もひそかにしてるたまごっち

古川柳歳時記

7

『納^{すず}』

涼^み』

清 博 美

エアコンなどという文明の利器がなかった時代の話である。

夏に入って、酷暑に悩まされるようになる
と、人々は涼をとるために蒸風呂のようなわ
が家を捨て、月が冴え星の輝く屋外に出た。
さわやかとは言えないまでも、そこには風が
通る。多くは家の前に涼台などを出して、寄
り集まった連中が夜遅くまでよもやま話に花
を咲かせ、囲碁や将棋にうち興じるのであつ
た。

『江戸時代文化』第一巻第七号、「夏の思
ひ出」（今泉雄作）によると、「自分の家に
居ても十時までは外で涼んで居た。縁台を出
して提灯をつけて将棋をやるものもあつた。
そつして涼んで居ると門づけが、新内、常盤
津、清元などを流して来た。それ呼んで縁

台へ腰掛けさせてやらせた。近所の縁台が皆
んな其処へ集つて聞いたものだ」などとあ
り、涼みは近所に住む人々の恰好のコミュニ
ケーションの場となり、また即席の演芸場にも
なつたようだ。

街角でこうしたささやかな涼みが行われる
のとは別に、豪勢な涼みもあつた。屋形船や
屋根船に乗つて大川を遊覧するという涼みで
ある。

「両国の涼（両国橋万治二年初て掛る）

凡、納涼避暑の地、此辺を天下第一とす、川
幅百間余、水清く流れやすらか也、東に筑波
青く聳、西に不二百く立り、右は品川、永代
島、左は真乳、隅田堤、四橋永く横たり、両
路（本所浅草）広く通ず、数千の茶店軒をつ
らね、数百の遊舟ふなわたを合す、或は糸竹

管絃の曲妙にうたふあれば、音かしましくは
やすあり、酒売船は火燈をしるし、花火売舟
は闇のかたをこぐ、花火製する商人の燈籠、
火気天に衝、目に見るもの皆涼しく、聞もの
ことごとく興あり」とは「砂子の残月」の記
するところ、また「飛鳥川」には、「両国川
涼み、昔は本所一ツ目の出口の辺、一面往
来、通船も差支える程なりしが、近来左様に
は不寛、吉野丸とて大なる屋形船有、江戸橋
の舟也、今夜は吉野出し、と評判のある位な
り」とある。

これをもつ少し具体的に説明するために、
再び『江戸時代文化』より、「夏の思ひ出」
を引用すると「大川は実に賑やかであつた。
川開の花火は別として涼みの人出は毎晩であ
つた。陰芝居、八人芸、手品、人形の軽業、
咄家などが船を借りて川へ出て、涼み宿船の
そばへつけて演芸した。陰芝居は船のまはり
へ幕を張り、その中で鳴物入りで声色をつか
ひ本当の芝居の様にやつた。只の者でもそれ
／＼趣向を凝してひやうきんな事をして出
た。船の上で踊つてる踊り自慢なものも居
た。義太夫のすきな者が船を借り受け、三味
線弾をやとつて、船の真中へ見台を置いて、
うなつて居たのもあつた。これなぞは、見
よ、聞けかしとの心懸けからである。或は、

咄家、太鼓持などを同船させて出かけたものもあつた。馬鹿囃子などは人の邪魔をしたものだ。……川は船で一ぱいで、船から船へと飛んで川を渡り切る事も出来た。この人数船ならばこそ涼みかな、と詠まれたのも無理ならぬことだ。屋形船は多くはお大名の乗もので長さが七間位もあつた。両側へすつかり提灯をつけて、それはく美事なものであつた。涼みだなどと云ふけれども、実は船がやられなくて暑い目をしに行つたものだ。……大川の涼みは大体十二時まで、夜明して涼む様なことはなかつた」などと記している。涼みとはいへ、上下の隔てなくまさに乱痴気騒ぎのドンチャン騒ぎだったことが知られる。

この舟遊は、すでに慶長の頃から行われたものらしく、「慶長の比夏日照暑気強ゆへ、諸人涼の為平田舟に屋根を作り懸、是を借て乗浅草川を乗廻し、暑を忘れ慰む、是舟遊の初也。翌年の頃大身衆涼にとて是にて出給ふに、大勢の供人故舟狭く、大勢乗故すしからず、翌年より船次第々々に大く拵へ、五六間づ、有船に成、承応の頃舟の盛りにて、明暦正月江戸中大火事、翌年に至ても御城の御普請、江戸中大名衆普請故、舟はいか様の小舟迄も、木材石材運舟と成て、中々涼の屋

形舟一艘もなし、依之三四年舟遊山透と止しが、万治の末右の涼の舟造り出し、諸人炎暑を凌ぎ、過ぎし大火事の苦身を忘れ夥敷はやり、大身衆まで数多出らるゝにより、船少なく間敷すくなくならざる故、次第々々に大きく、七八間の屋形に拵へ、後には船に石川丸、関東丸、大関丸、山一丸、熊一丸、十一丸などとして、山一は九間、熊一は十間有、十一丸は十一間有」（『むかしく物語』）などとも記されている。

さてまた、船に乗らないまでも大川端での涼みもまた盛んであつた。『飛鳥川』は「昔、両国岡すゞみ、元柳橋際を隈、茶屋見世出しなり、今は、間部河岸より大橋までつゞく、文化五年、一橋様御屋敷川端迄出、新道付替候、茶屋の出方違ひ侍らむ」とあり、『絵本風俗往来』も「陸は両国橋前後其涼茶店或ひは見世物興行扱は飲食店又は諸商人の露天の夜業始まりて七月終る迄打つゞきて人出たりとなり」とある。ここもまた連夜、大勢の人々が群集し、さながら祭りのような賑いを呈したのである。

世の中、まことに平和であつた。

*

すゞみ白きしりく／＼と人かふへ

―次第／＼に人が集まつて来る。

粉のふいた子を抱いて出る夕涼

初 39

―汗取用の天瓜粉をつけた子。

―一ち日の苦をかたりあふ門トすゞみ

明五宮 2

―よもやま話に仕事の苦勞など。

はねるぞと断て立つゞみ台

明八仁 4

―涼台の端に腰掛けていた男が。

門ト涼みしつへたたきく／＼居る

一〇 9

―蚊の攻撃に応戦。

―やみにあや有て娘の門トすゞみ

一一 29

―恋も生まれる。

爰におりやすとむすめの門涼

一〇 23

―娘を心配して母親が呼びかける。

門トすゞみエモウ爰におりやすよ

四七 6

―母親の心配も度が過ぎると。

五六度ヒのぞひて娘の夕すゞみ

五 5

にげ足て娘の出で居門トすゞみ

六 5

―冷やかされるので。

もふ陣を引力ぬかといふ門トすゞみ

明七信 3

―合戦のような口調で。

妓をのせて波にまかせるいい涼み

四七 30

―踊子や芸者を乗せての涼船

五六人やねてみしつゝい、すゞみ

天元桜 1

―せんどうの足おとをきくい、すゞみ

二三 13

―いすゞみあたまの上をあかせる

傍 49

―屋根船は、船頭が屋根の上で櫓をあやつ

る。

秀句鑑賞

同人吟堀端三男

— 6月号から

定年退職と同時に誘われて、川柳の仲間入り

をさせて頂き、丁度、足かけ二十年になります。この間、多くの柳友と交流を深めることが出来、楽しい日々を送っていることを感謝している次第です。

今回、はからずも秀句鑑賞と言う大役を仰せつかり、一度は辞退申し上げたのですが、編集のご都合もあり、勉強の機会を与えて下さったと考え、引き受けて頂きました。送られて来た川柳塔のゲラ刷り、三三二名一五五二句の秀句と対峙したときの緊張は一入でした。作句者の句意に添わない点も多いと思いますが、今後ますます精進してゆくと言うことでご容赦願います。

大根の白がまぶしい汚濁の世

榊 本 路 児

毎朝、新聞を開いて、先ず目に飛び込んて来るのは不祥事ばかり、全く汚濁の世である。これに対して、庶民食生活の大根を持って来て「大根の白がまぶしい」と皮肉ったところに大きな喝采を送りたい。

来年のことふと過ぎる花の下

林 露 杖

桜前線は、津軽海峡を越え、本州は、葉桜の季節になった。喜寿を過ぎてから、毎年桜を見る毎に「今年が見納め」になるのではないかと思ひながら眺めている。作者もふと、「来年もこの桜を見るのが出来るのか」とそんな気が過ぎたのではないのでしょうか。新しい世紀も目前です。お互いに世紀が変わるまで頑張っていきましょう。

他人ごとやおまへん 私も適齢期

本 間 満津子

川柳塔誌に、毎号のように、月によつては三人ぐらいも追悼文が掲載されている。享年六十何歳などを見ると、喜寿を過ぎた小生などは「他人ごと」でありません。作者もその感をされたのでしょうか。それを「私も適齢期」とウィットに富んだ言葉で表現されているのが愉快である。作者には「銀髪になったら着たい色が有り」ですから、それを充分果たすまでは頑張ってください。ご健吟を祈ります。

笑つたら損する顔で受理される

青 枝 鉄 治

企業や商店では、美人で、愛想の良い人が受付に居て、応対の仕方、その企業の良し悪しがわかると言われるが、役所や、病院へ行くと「してあげる」と言う感覚で応対される。笑つたら「損する顔」と皮肉った表現で、その様子を描写しているのが楽しい。公僕ので精神を発揮してもらいたいものだ。

土産話ボンボンと出す旅飽

高 野 宵 草

旅行帰りの家族の温い様子が「ボンボンと出す」で表現されている。鞆から取り出す土産物のひとつひとつに、楽しいエピソードがあつて、それを話していると、一家が笑いの渦に巻き込まれている様子が想像される。とき恰も五月晴れの旅のシーズン、思い出作りに出かけましょう。

それぞれに合わぬ時計を持つ家族

川 崎 ひかり

パパは残業、姉さんはカルチャー、弟は塾通いと、夕食を早く済ませて出て行く人、遅れて食べる人と、家族揃つて夕餉を楽しむことが少ない様子を「合わぬ時計」と面白く表現している。ママさんは大変だろうが、それがまた楽しい家庭の一コマかも知れぬ。

後手ばかり歩いた過去も又たのし

石 尾 かつ乃

「先んずれば人を制す」とか、「先手必勝」とか言われますが、また、「残りものに福あり」とか「後の先」と言うこともあります。後手ばかり歩いても勝利が微笑むこともあるのです。人それぞれ個性を活かして生きてゆくことが大切です。後手ばかり歩いた過去を「又たのし」と人生を達観した所に敬意を払います。

惚けたかな愉快な話ばかりする

淡 路 ゆり子

幸か不幸かまだ惚けた人を看護した経験が無いので、本当のことはわからないが、看護した人の話では、惚け始めに、同じことを繰り返すと言う。然しそれは、食事や金銭の愚痴っぽいことばかりで、決して愉快な話ではないようです。愉快な話なら何度でもやってください。まだまだ元気な証と思います。

筋書きが無いタイガース面白い

舟 木 与根一

プロ野球は、筋書きの無いドラマと言われます。エースが打ち込まれたり、思わぬバツターがホームランを打ったりで観客を楽しませてくれます。今年の阪神は、隅一で完敗すれば、隅一で完勝するなど、幾多の話題を提供してくれそうです。大いに応援しましょう。

むつかしい頭になったと散髪屋

林 野 麴 光

何代か前に、頭に毛を一本宛並べたようにきれいに整髪した首相が居ましたが、頭髮が薄くなると整髪も大変である。ある時、「髪が少ないから半額に」と言う、「少ない程むつかしいので倍額に」と笑い合ったことです。初老の哀感がよくわかります。

子に見せる父の背中の中の正誤表

吉 川 寿 美

昔から、「子供の嫉は、背中中せよ」と言われている。子供は、言うことは聞かぬが、大人のすることは真似るものです。大人が実践して見せることが、教育の根本です。大人の一举一動が、子供の成長に係わることを心せねばなりません。「背中の正誤表」が言い得て妙なるものがあります。

震災の話題も遠くなる月日

榊 原 雪 心

平成の大災害となった淡路・兵庫の大震災より早二年半、罹災された方々の心の痛手は別として、急ピッチの復興により、諸施設の回復は、かなり進んでいる。その後、日本海油流失事故、ペルー人質事件などで、震災の惨事が遠のいた。然し震災で盛り上がったボランティアの心だけは忘れないでいたい。

戦争の話になれば長くなる

高 瀬 霜 石

若い人達に「また始まった」と笑われる戦争の話。終戦はどちらで、復員は何時などとも何回も話し合ったことを、飽きもせず話し出すと、つい時間が経ってしまふ。この間の同窓会での話、帰還したら、戦死の公表が入り、戸籍が抹消されていたとのことで、お前は、長生きするぞと笑い合ったことです。戦争の話は、大正生れのロマンです。

古稀という言葉に酔って老い早め

富 田 蘭 水

世界一を誇る長寿のわが国においては、古稀はまだまだ若いところですが、よくしたもので、個人差はあるにしても、体力、気力の衰えを痛感するようになるのは七十歳を過ぎた頃からです。この感覚を「古稀と言う言葉に酔って」と読んだところに、人生のペーソスを感じさせられる。

手帳にぎつしり書いて忘れんぼう

西 村 早 苗

今の私の心境を読んでもうださっているように楽しく頂きました。忘れないようにと、手帳や紙片に書き止めて置くのですが、それをどこへ置いたか忘れる始末。自分一人かと思うと淋しいが、友達が出来て心丈夫です。

水煙抄

高杉鬼遊選

唐津市 宗 弘

周平を悼めば外は霧の雨

人間の都合に追われムツゴロウ

「ふたりっこ」「あぐり」は妻の指定席

わたしにも賄賂の素地はありますか

チラシ攻め熱帯雨林が禿げている

丸亀市 松岡遼雲

裁判官が全部マルとは限らない

九千年亀より先に鶴が死ぬ

どうでもいい電話ばかり女から

右は崖 左谷底深みどり

吠えたい犬は吠えさせてやれ星の夜

東大阪市 谷口 義

長男の椅子背もたれがついてない

座布団が敷いてあるのは母の椅子

探しても家にお金はありません

日当りの良い場所に居て疲れている

根回しを妻がしていたとは知らず

河内長野市 大西文次

御心配無用 金持には見えぬ

様子見に来て抱き癖をつけて去ぬ

生み分けて見ても蛙の子は蛙

極楽の余った風で昼寝する

三十年経てばあんたもおばあさん

横浜市 荒井広和

散るまでは試行錯誤の騙し合い

建前は口で本音は目がしやべり

満ち足りてドライフラワー的家庭

百態の靴が改札駆け抜ける

自然保護迷彩服に惑わされ

横浜市 川島良子

スーパールの籠重くする子の帰省

シュレッダー プライバシーを切り刻む

長生きの予定表にはないおむつ

子の赴任励ますはずが励まされ

初月給エアマックスの靴もらう

今治市 渡辺南奉

情けよりお金が欲しい時がある

二人三脚足しても夫婦やっと一

着ない服ばかりタンスも老齡化

一日が長いごろ寝もくたびれる

春が逝く行つて来ますと告げぬまま

羽曳野市 安芸田泰子

埋骨へ落花も共に地に還す(三月、夫他界)

フルムーンのプランを反故に一人旅

いたわりに触れて溢れる涙壺

一人でも独りではない皆やさし

病名を隠す嘘です閻魔様

尼崎市 田辺鹿太

不器用で右へ倣えが出来ません

水着ショー妻がおんなになる季節

魂を売らずに済んだ空のいろ

疑ってかかればまずいこしひかり

紫陽花のしずくで女化身する

札幌市 三浦強一

天地有情 人それぞれの雪月花

永久保存のテープに亡母の子守唄

神様の実力絵馬に試される

メビウスの輪を這い回っている私

核こそが国家と思う石頭

三重県 佐々木森哉

耳鳴りの耳が引きずる過去の喝采

父の歳越せば手招きしてるのは

おしゃべりな陽は落ち寡黙な月昇る

熟女三人ビールの泡を吹き飛ばす

処方箋溺れる僕が掴む薬

八尾市 村上ミツ子

餌もらい野良猫愚痴を聞かされる

低金利 壺へ入れとく金もない

半分のキャベツ買うにも見比べる

油断も隙も上手に武器にしてしまう

母の日に病室の母思うだけ

八尾市 篠原いつふみ

年金で暮ししぶちん板につき

口肥えてますなと高い値を取られ

乗り過ぎてしこりを残す無礼講

パパと行くお寿しは何時も回ってる

潮干狩多目に撒いた日曜日

犬山市 早川盛夫

友達でいようね恋のむつかしさ

いい親で良い子のつまらない家庭

実力を持った二番手三番手

いろいろとある二世帯の賑やかさ

見ていると簡単そうで難しい

吹田市 石原靖巳

ローン地獄わが家が重いかたつむり
長寿日本 保険と貯金好きな国

反骨の気力も萎えた唐辛子

老いの身にライバルがいる有り難さ

五パーセントあつけなかつた通り雨

八尾市 平川幸枝

身づくろい母はヘチマの化粧水

ヘアカラー紫にして市場かご

疑つてかかつて丁度よい余生

仲人のひと押し事実知っている

裏金を作り保釈の金にする

今治市 越智青園

混んでいる医者へ行きたい病む心理

ハンガーに逢えた喜び吊しとく

全自動男が洗濯好きになる

満期まで生きて不満の保険金

手の内が読めぬ機械の相手して

川崎市 和泉見早子

コンビニのおにぎり一―一三で出来

降りるしかない階段を昇りつめ

土砂降りの私に賭ける来る来ない

看板の絵にお辞儀させ工事中

蚊いっぴき叩いて話つづけられ

富田林市 山原昭水

吞め吞めと言われて吞んで払わされ
亡父の時計 亡母の硯が宝物

ライオンにも気の弱いのがいるだろう

意地悪な神様がいて不合格

予報官傘は鞆にいられてある

豊中市 石川勝

汗くさかつた父の大きな肩車

そんなこと男の僕が言えますか

整形したそうな離婚したそうな

脇役の生涯でしたきざみ葱

諦めず養毛剤を買ってくる

八尾市 村上剛治

血圧に薬の枷をはめられる

気まま言う孫の理屈が面白い

腰据えてかかれればものがよく見える

できる子と比べてママは文句言う

妻の愚痴気が晴れるまできいてやる

大阪狭山市 伊藤尚子

根はないが人の心で生ける花

根分けしてお隣さんと同じ庭

信号のない四つ角に辻地蔵

四季あつてこの世満更悪くない

誰にでも好かれるような桜餅

堺市 上野 楽生

大阪市 一本 勇太

ヒロインになり損なつた離婚歴
扶養家族の期待も背負う経営者
目に余る汚職へ光る記者のペン
店の味 鉢に山盛り縄のれん
年金の警鐘が鳴る子の世代

鳥取県 原 みさを

パンドラの筈は港を出られない
ウインクの片手拝みにまたやられ
次元の違う女だったとそう思う
粉飾を削る自分史への嫌悪

愛媛県 黒田 茂代

これくらいですんでよかつたひざ小僧
背のフアスナー割つて女が羽化をする
八合目あたりに目安置いてある
生きて死ぬ手本が置いてある仏間
衣食足つて性善説の生あくび

兵庫県 大谷 幸次郎

ゆっくりと休んだつけが積んである
居酒屋に天下国家を置いてくる
妻の胃は賞味期限にこだわらぬ
粗大ごみネクタイすればホラを吹く
食通を気取り下手物食っている

和泉市 中川 楓

税務署で小さな声のお父さん
無駄口をたたいて命洗い合う
孫二歳 力仕事のごとく抱く
また元の二人になりし豆御飯
チャイルドシートもつたないが粗大ゴミ

スイッチを入れずに騒ぐ初歩のミス
色めがね外せば真の色が見え
正直に歩いて人に裏切られ
効能書どの病気にもあてはまり
煽てられ良くも悪くも蚊帳の外
風邪引いて弱気になった紙テープ
愛冷めて保温のままのティーポット
ゆるゆると私も伸びる花の枝

静岡市 大村 正雄
富田林市 杉本 とも子
新潟県 高野 不二

孫からの電話に妻の上機嫌
魚好き意見が合うた旅の宿
大臣をけなしどうにもならない世
口にしていいのか脳死安楽死

大阪市 三浦 千津子

後一步届かず惜しい人にされ
花に酔い人になお酔う通り抜け
老いてなおもうひと花と思う日も
迷い道こんな処にあるヒント

羽曳野市 川田 晋

不信心と言えなくなった母の死後
留守電に残る固苦しいお札
風邪だけに血と尿レントゲン検査
置いて来るつもり傘へ降りはじめ

寝屋川市 井上 すみれ

大阪弁でいびられてるとは気がつかず
宛名だけ書いて筆おく初夏のうつ
祖父が居て紙かぶとつけ兄妹
飼犬とくらべて愚痴る老夫婦

益田市 岡田 たけを

流れには逆らわないで箸を持つ
食べきれぬ竹の子貰い札を言い
庭の花眺めて欲のない暮し
慈しみ育てた花は裏切らぬ

米子市 足立 由美子

前ぶれか雲の動きが速くなる
傷浅い出直しの靴買いに行く
おだやかな目で書いてある日記帳
これからは階段一步一步ずつ

横浜市 金森 徳三

コマーシャルほどに光らぬ風呂掃除
冷蔵庫いつもおじぎをさせられる
年金の暮し朝ドラ見て動く
通帳は塵も積もらずちゃんと減り

横浜市 生坂 サト子

人混みの渦へ小心者のまれ
ヒロインの結末見たさ拾い読み
骨だけの魚を残す食べ上手
大空をたしかめてから布団干す

千葉県 大川 晩翠

雑草も踏み慣らされたゴミ捨て場
遠回りじっくり世間見えています
販売機お先にどうぞ札の皺
キティちゃんさびしがりやのエゴイズム

和歌山市 武本 碧

人生のドラマが変わるミスキャスト
シナリオに書いてなかった低金利
カップルのワインが照れるフルコース
ナルシスも横を向いてる水溜り

愛媛県 安野 案山子

中立の僕に火の粉が飛んで来る
ジェット機がひやつとさせて離陸する
ホステスの過去をほじくり出すお酒
商魂の坊主へ冷めている檀家

東京都 結城明玄

転んでも身綺麗ならば助けられ
一言が波紋になってまともならず
長寿国喜ぶことでないと知り
勘定になると女はコンバクト

鳥取市 藤 ふうこ

死ぬまでにきつと出会える王子さま
頼ってはいけなかったの通り雨
路を煮る一途に母を恋う日です
寡婦の愚痴置いておゆきと地藏さま

秋田県 湊 修水

阪神だ巨人だ楽しい口げんか
つり革に連休疲れぶらさがり
吹くままに流れる雲が妬ましい
年金でちびりちびりとやってます

横浜市 秋 元和可

初孫がバアバと言った日のシヨック
片言の孫が我が家のタマゴツチ
淋しさにつけたテレビが騒がしい
菜園にゴミとストレス埋めに行く

鳥取県 藤 山弘子

パトカーが通れば規則守れます
病んでから動ける足に感謝する
父さんの動き先取るお母さん
通勤ヘキントン雲があつたなら

鳴門市 八木芳水

雑踏に押し流されてゆく倫理
平凡と言う安らぎの茶漬け食う
反論の余地たんとある島流し
切り取り線ここから僕のちさい城

八王子市 播本充子

放つといて欲しいやる気を型にはめ
咲くも花散るも花だと他人の事
コンピューター相手に自分見失う
想像を越えた話へ茶が苦い

横浜市 長島 亜希子

世界的遺産を持った幸不幸(イタリア旅行)
散財をした気にさせるりラ紙幣
ペランダにロミオの姿こころ待ち
ナポリ見たけれど私は死ぬません

横浜市 豊田 羊子

経を読む心に打算ひつかかる
煩惱を消す経文がむずかしい
越す家の最後に採れた豆の味
彼岸花立ち退く家に置いておく

愛媛県 中居 善信

留守がちな家と郵便さん思う
此処からは私の世界線を引く
うどん食う時に気品が邪魔をする
カイワレに心の晴れぬ日が続く

落ち着かぬ初めて持った携帯電話
八尾市 砂田 八寿子

開店の賑わい粗品見当てだろ
信貴の山青葉若葉のフアッションショー

献立に迷って地下をひと巡り

今治市 中村 好恵

新入社まず辛抱を言いきかす

相談を子にすることがふえてくる

降りる度みやげがふえるバスの旅

あなたなら騙されましよう四月馬鹿

大阪府 奥野 義夫

冷戦にタオル投げたい夕餉どき

早起きもするし添い寝もする時計

本当はガタンと回る花時計

遺産分け親を引き取る者がない

富田林市 藤田 泰子

合鍵をなくしたことすら気づかない

身軽なり退屈してる暇がない

植えかえてやらねば鉢が小さすぎ

食べて欲しくて光っているトマト

横浜市 菊地 政勝

テレビ消しぼおーっとしてる時が好き

三十の娘たまごっちを良く育て

太陽の分身なのか火が熱い

佗び寂びに触れた気がする伊勢参り

目の高さ替えると闇に光るもの
西宮市 古谷 ひろ子

世話焼きの伯母さんがいて嫁ぎます
粗大ゴミ拾ってくれる人が居る

痩せないようヘルスメーター放さない

和歌山県 中後 清史

万華鏡 毒になるから覗かせぬ

妻に先立たれた友と飲み明かす

気まずいネ酒に吞まれた朝の靴

切り札を突きつけられて横になる

今治市 塩路 よしみ

白旗を掲げて素直に子に染まる

うるさいが居なくて困る妻である

四季問わず一病大事ニトロ持つ

小ちゃい靴揃えて脱いだ子のしつけ

綾部市 藤田 芳郎

ネクタイを締めてクローンを演じ切る

腕組んで正座に負けている胡坐

また寄進言う神さまの屋根瓦

経済と政治の次は死ぬ話

松江市 山根 邦代

食べ残し美徳のような癖をつけ

輸入してまで捨てている無神経

我が物の金庫のような使いつぶり

税金を返してほしい無駄遣い

泉佐野市 稲葉 洋

一年生少しはらしくなる五月

二年生ちよっとおませになる四月

砂時計老いの鼓動に早すぎる

癌だとして西から太陽昇らない

伊丹市 榎谷 郁子

遺影を胸に四国遍路はもの悲し

南無大師遍照金剛はいバスへ

遺影に手ともに鐘撞く国分寺

今日も雨 想い出ばかり道後の湯

八尾市 山本 宏

親馬鹿で気まま許した報いうけ

百までも生きよと母の背をさする

孫のよさ偏差値なんかではかれない

満月に幸せかいたときいてみる

横浜市 福田 由美子

子供の日 補正予算をして出掛け

宿題は忘れたふりの子供の日

こいのぼり夢も知らずにたれ下がる

母の日に優しさを知る子の言葉

鳥取市 福田 登美

後がない歳を忘れた色を着る

医療費のただに深々頭下げ

水掻きを付けた男は戻らない

湯の町に心を癒す下駄の音

和歌山市 木村 初子

喜寿ですがまだ燃えてます向学心

戦中派さがすすべなし青春譜

またひとり友を亡くして喜寿の春

青葉がくれに並ぶ卒塔婆花手桶

日立市 加藤 権悟

盃へ四月の税が水くさい

父さんのここがいつもの縄のれん

湯豆腐の湯気が優しい夫婦箸

薫風を乗せて華やぐ牡丹園

大阪府 井上 千代子

汗水を流した金も同じ利子

鯉幟 家族入院箱の中

迷い猫 軒下一夜だけならば

七転びしたが八起き出来ず老い

大阪市 尾崎 黄紅

散骨もしかしわたしは泳げない

慰霊碑の世話には老いと老いと老い

わが町は海老江東西線走る

医者の子は医者に役者の子は役者

米子市 小塩 智加恵

明日は晴れ行くあてもなしどないしよ

責任がないから孫の自慢する

仏様お掃除します命日に

いいところはばあちゃん似だと自負をする

島根県 槻谷 仲子

お話の糸を手繰ればお知り合い
フキにタケノコ旬を喜ぶ花見客
だだこねる孫と綿菓子買いに行く
桜散ってツツジ王者の花に酔う

東京都 井上 つよし

クラス会着痩せる服どれかしら
リハビリに一汗かいて昼食にする
しょうのない人ねと毛布かけてくれ
タンポポも風に乗る種乗れぬ種

兵庫県 円増 純子

風切って歩いた頃の肩パット
洗濯機一つ沈んだ貝ボタン
貝がらが大きすぎても動けない
うすうすの記憶がもどる里の風

西宮市 井上 俊二

春曉に起きても別に何もせず
植木市植え場ないのに見てまわる
おしゃべりの楽しい人の側に寄る
お隣の咳も聞こえる風呂の中

大阪市 立藏 信子

朝顔をかぞえているとフアイトわく
次からはおみやげ話だけでいい
太陽の贈りものですスイカ切る
潮風もロングヘアーが好きらしい

河内長野市 木太久 正一

子育ての娘夫婦がタマゴツチ
種まいて育てていますミニトマト
フジモリに明治の顔を垣間見る
薬代厚生省は匙を投げ

富田林市 中井 アキ

だんだんと笑い袋が軽くなる
価値観が違って満月欠けてくる
雑巾が絞り切れない倦怠期
花道で女はみんな蝶になる

沖繩県 杉谷 一栄

整形に来て内職の総チェック
医師やさし薬は飲んで下さいよ
海苔にお茶 家に余ったものみやげ
沖縄で那智の黒あめもの足りず

河内長野市 水谷 笙子

沖縄をみんなで売ればこわくない
特措法 改正列車通過する
未来図に赤信号が多すぎる
おばあちゃん猫笑うほどいい天気

尼崎市 軸丸 勝巳

一戸建どうだどうだと鯉のぼり
輝いたところは忘れぬ物忘れ
乗り合わすどこのどなたか同じ服
暖衣飽食見直す旅の花へんろ

今治市 村上久美子
善人と言う物差しが狂いだす

出る汽車を送ってばかり故郷の風
仏間の灯揺れて返事をしたような
加速する想いブレーキ確かめる

鳥取県 埜 寛子

幻覚のあなたと夜明け待つベッド
ゆったりと閑は出来たが席がない
赤い靴ラストダンスだふらつけぬ
月だって丸いまままでいたかろう

和歌山市 福 重美子

栄転の辞令家族を切り離す
計画中止 山の笑顔が見えてくる
世間体何時も気にして肩が凝り
頼まれて手伝う母は嬉しそう

和歌山県 中 村 君 枝

よろこばす事が苦手という夫
楽な世になお楽求む全自動
薄情なこの世に泣いたムツゴロウ
夫婦相撲軽くいなして妻の勝ち

島根県 福 間 博 利

つらければ戻れとまたもヤジロベ一
もう一度トイレへ戻り思い出し
老人が立って老人座らせる
社長なら蟻の大群雇いたい

鳥取県 近 藤 春 恵
負け犬の父へ娘が味方する
バッグから妻の秘密がもれ出した
神様もルール違反に手は貸さぬ
美人だった頃を忘れた三面鏡

鳥取県 石 谷 昭 恵

腹の虫殺して後について行く
亡母に似た顔が鏡の中にある
沖繩の海にやさしい波よ来い
七坂を越えた汗など子は知らぬ

守口市 石 森 利 昭

妻君に酒勧められ友の通夜
餞別に拘りのある名が混じる
憂さ流す雨としんみりさせる雨
黄昏の頃に今更愛ですか

島根県 武 島 ちよえ

あと戻り出来ぬ道です急がない
頂いた苦言だオブラートで包み
子に貸した金は戻るを当てにせず
重宝に使われている妻でよし

松江市 松 本 知恵子

母の日は娘の助手席でのんびりと
毛利ブーム尼子の里も人溢れ
人寄せるなんじやもんじやの白き花
摘んだ頃遠しわらびを食べながら

父の日は何の花かと聞かれても
耳よりな話は欲が目を覚ます
長年の付き合いという義理がある

高槻市 乙倉武史

ずけずけと言うてほんまは頼りきる
外れたらみじめ期待はしないこと
はめてけなして週刊誌また売れる

羽曳野市 徳山みつこ

自動化へ遠回りする僕の足
四万十に名物ひとつあおさ苔
何も彼もテレビで借りた浅い知恵

高知市 細木子龍

母の背にねだり泣いたり隠れたり
鎧など早く脱ぎたい武者人形
苦勞した事は忘れて残る皺

横浜 宮村ちよ路

ぎりぎりの譲歩で続く夫婦仲
降って湧く転勤に妻そつぽ向き
登山時季静かな山も銀座並み

滋賀県 中宗明

老夫婦欠伸やったり貰ったり
世間体気にして本音引つ込める
春が好き新緑が好き目の保養

高知県 百田幸

軽蔑も嫉妬もされぬ中ぐらい
棒グラフ最後に笑うのは誰か
病床の枕辺にあるギャンブル誌

河内長野市 妹背尽呂久

目に若葉ベッドの上でお粥さん
母の日にハイカラすぎるプレゼント
お洒落して夫と午後のティータイム

河内長野市 印藤智子

集金へ独り暮らしの長話
二三軒残る集金雨になる
メーデーで互いの無事を祝い合い

大阪市 和田和風

ブツブツと苺をつぶす孤独感
へそ曲がりほんと素直なだけで
塩味の辛さ味方にしておこう

和歌山市 山根めぐみ

私がわたしであって安堵する
陽の恵み今日も庭木と対話する
肝臓よお前も日々を耐えている

砂川市 武田正美

長生きをしたばかりに見た地獄
葉桜はもう来年の夢を見る
足弱い老母は徘徊など知らず

和歌山市 吉村さち子

大阪府 団 野 恒

風通すかたみの小袖 梅雨晴間

遠花火 音だけを聞く夏の夜

密入国 他所目ゆたかに見える国

横浜市 丹 下 智洋子

横並び意識を捨ててからの春

咲く咲かぬさくらも自我を持ち始め

青空を跨いで通る水溜まり

伊丹市 延寿庵 野 鶴

お金では買えぬ笑顔が妻にあり

通り雨さわやかな風置いて行き

たまごっち器用に使う孫の指

横浜市 近 藤 道 子

ある誤解そのままにして疲れてる

右脳を解凍しても追っつかず

シャボン玉きりなく飛ばす春の窓

富田林市 大 橋 鐘 造

もう誰も気にせず生きる無位無冠

三猿になって静かな世を過ぐす

鼻薬そろそろ効いてくる時分

兵庫県 井 上 信 子

旅仕度薬の種類増えていく

なつかしい小豆を升で買った町

スキャンダル蛙の面に降る世論

八王子市 井 上 京一郎

どんな子になるパチンコの子守唄

根回しがあった会議があつた気ない

屈辱の辞表炎の文字を書く

八尾市 井 尻 民 子

喋る声大きすぎますオバタリアン

二泊三日やっぱり家が一番や

金の事考え家にとじこもる

吹田市 野 下 之 男

サムライがここにもいるとリマの空

あの人も川の流れも帰らない

嫁はんが種を播いてる長電話

横浜市 山 下 省 子

来世もお願いしますお母さん

名店街奥様になる午前中

もう一度捨てたブラウス着たくなり

米子市 大 野 蒼 流

年輪をこつこつ刻む夫婦の樹

かもめだけ波止場に遊ぶ瘦せた海

ゆずれない位置にボタンの穴がある

八尾市 高 橋 明 子

またしても部屋中さがす老眼鏡

うちの人まだ帰らない鉄砲玉

蝶々に情け無用のフマキラー

尼崎市 尾宮弘治
膝枕言えば老婆アホかいな

みんなには内緒と祖母の紙包み
出向の辞令見つめる家族の目

尼崎市 内田美也子

突如降る五月の雨は苦にならず

風薫り若葉の木々が深呼吸

パンジーが人の顔してご挨拶

岡山市 藤原一平

いやな風吹いても回る風車

もう何も言うなと風がピタリ止む

古希が来てまだまだ憎いことを言う

羽曳野市 芦田絢子

年金の財布を守り閉じこもる

豪邸に住んでも老人医療法

長電話 娘に弱気見抜かれる

兵庫県 安達厚

老夫婦昨日と同じ会話する

大根も負けじと白い花をつけ

連休が終って二人だけの夜

大阪市 中橋恵美子

チューリップ大笑いして咲きくずれ

主婦の服脱いで宴のイヤリング

流行のリュック戦争知らない子

豊中市 みきわきみ

寺町の句会梨里は書記なりし

遙けくも梨里 霞乃を語りおり

嫁に世話かけまい我慢老い二人

静岡市 中西雅

尺取虫竿の寸法計っている

教え子の育てた愛の新茶汲む

彗星も雨にたたられ流される

兵庫県 倉垣恵美

つかの間の休息でよし泥の靴

旨いこと言いなさるからばーつと聞き

便利化になればなるほど恐くなり

尼崎市 的場十四郎

全色を溶いてまだ絵にならぬ老い

強引な男が描く春の絵図

点滴に再起の声を弾ませる

東大阪市 北村賢子

孫来てるはやるところで帰宅する

子の宝手あかのついたお人形

座れそな隙間にカバン座ってる

尼崎市 河津正治

日記にも脚色のいる時があり

一度だけ咲くには惜しい胡蝶蘭

呆けた振り器用にこなす姑の知恵

枚方市 二宮 紫鳳

着飾ってみても心がボロを出し

真実を主張しすぎて角が立ち

友の数増えて熟年なお楽し

今治市 渡邊 伊津志

気付かせてもらった事をあとで知り

吃水線あたりで絡む赤い糸

透明な海が譲らぬ思い込み

横浜市 後藤 早智

五ワットに豆球なりの自負がある

七転び八起きの朝を子と迎え

舵取りを終えて漂う老母がいる

倉吉市 田中 八太郎

ふらふらと歩く野良猫油断せず

百円均一ヒトケタ生まれよく出合う

陽が差しておせわになった傘がじやま

大阪市 川久保 睦子

過去だけの脳細胞が旅をする

妥協点パズル合せの山と川

足腰を鍛えなさいと白ねずみ

寝屋川市 瀧本 八十八

大観の富士に雲煙欠かせない

守護職も春はうららの仁王さま

禁断の木の実の魅力宝塚

横浜市 伊藤 ふみ

バリウムのいい飲みっぷり胃の検査

殺人も不倫もテレビなら見られ

MRIで自分の位置を確かめる

熊本県 増田 一乗

変声期音程合わせも一苦勞

ブラジルのみやげ特産コーヒーほか

売るもよし売らぬでもよし休閑地

大阪市 鈴木 トヨ子

明日デート ファッションの夢ひろがつて

しきたりの長男の役降りたい日

借金 of 言い訳きかぬ鬼瓦

堺市 梶本 哲平

いつの間に木の講釈を植木師に

犬が死に鯉とお話してるぼく

何も彼もあつて欲求不満です

横浜市 保田 絹子

器用だと重宝がられ使われる

どの花も緑に映える摩訶不思議

穏やかな訛りに目覚む旅枕

八尾市 神原 まさと

休耕田 今年二本の鯉幟

中の下で暮らし玉子に助けられ

思案する顔を隣の猫が見る

倉吉市 山中康子

さらさらと吐けば悩まず済むものを
揺れだした出しやばりお米口を閉じ
点と点むすび役には陽気な娘

広島県 山本示風

飽食をシベリア思い反省し
金婚が目の前に来て揺らぎ出し
雛壇はないが団子で春を呼び

和歌山市 楠見章子

帽子までタイガーウッズ気どりだね
たいやきの頭はいつもおにいちやん
芸能人もわたしも白い歯がいのち

和泉市 横山捷也

A面をかくしB面だけ話す
弔問の列に雨足強くなる
定年も間近 農園申し込む

和歌山県 藤井春子

転んでも農一本の藁を抱く
秘め事を捨てると明日は上天気
人生の根気路傍の石にきく

和歌山県 村中悦男

友人と違う意見は背のびかな
これ以上小さく切れぬ試食菓子
通夜の列ほとけの噂聞きながら

京都市 勝山美千代

丸い背に孫の温みが残ってる
年金の生計に合った似合う服
買う積りなくてもピラの拾い読み

鳥取市 近藤秋星

金欠病これが私の持病です
ただ今と幼稚園児のお帰りが
地球より重い生命を持てあまし

羽曳野市 西村りつえ

紫陽花に惑わされてる画布の鬱
恋なのか砂漠の胸に水滲む
もつれ蝶花から花へ仮の宿

大阪府 澤田和重

訳あつて電話番号のせてない
好奇心ときどき親を困らせる
童心に還り夜の灯になじむ

尼崎市 岩倉キク子

待ったなし此処で決めんと負けになる
おぼろ月何か隠しているような
一生に二度ももらった罹災証

東大阪市 松山隆

駅前の花壇がこぼす花心
足りすぎて銭で買えないものが欲し
通帳の胸算用が夢のあと

松江市 安食友子

旅プランやはりマナーが邪魔をする
花ひらり一役終えた安堵感

美術館それより老いのオアシスを

兵庫県 谷田多美子

鯖寿司の色つややかな若狭湾

母の日の手の温もりよ柏餅

低金利取りつく島もない老後

唐津市 岩崎 實

孫の息たんぽぽみんな吹きとばし

一服の新茶を先ずは仏様

ほとぼりをさまさぬうちに誘われる

豊中市 岸田知香子

男下駄天地無用の守り神

小商い子の連休もつき合えず

ドラマ見るような身近の離婚劇

吹田市 西岡 豊

いい友といい酒酌んでいい話

飄々の顔で図太いことをやる

悪口を言うたらあかんあんた負け

兵庫県 中野とよ子

春一番磯の香りとイカナゴで

線香のただよう部屋で写経する

うすうすの話いつしか消えて春

羽曳野市 森田四三郎

五パーセント儉約の死語甦る

待ち呆けくつて時計が腹を立て

空缶もサッカーのよう蹴飛ばされ

島根県 菅田 かつ子

口紅もおちてきました午後の駅

無人駅すずめも昼寝しているよ

新緑の庭だ毛虫も出たかろう

八尾市 鷺見 章

リハビリにあしたあさつて次の日も

病みながら樹々の芽ばえを見えています

病床の五月の雲は自若なり

静岡市 宇佐美 寿美

二人連れきれいな虹を置いていき

いい話一気に坂を跳ね上がる

満月の笑みから明日の灯をもらう

兵庫県 西川 一 粲

特売日サイズと柄の折り合わず

人生を二倍に生きて趣味の道

癌でないことがわかって旅に出る

交野市 山川 日出子

生命線くらべっこする患者さん

病室ではっこり友は昼寝中

退院を片目の達磨待っている

羽曳野市 山本 たけし

バスを待つ避けるとこなく走り梅雨

大法螺を吹けばすかっと五月晴れ

ちよっとした話火が付く隣組

倉吉市 大下 智子

ママの真似しながら喋る糸電話

世の中に利口とばかりがいて楽し

世直しといって空ビン拾いする

倉敷市 家守 政子

悪徳はオレンジ 牛と後たえす

パンパースつけ家長の座ゆずらない

四人目にやっと上がった鯉のぼり

大阪市 島崎 孝一

新聞のチラシが今日の予定表

悪いとこばかりが似たと娘言う

父の日は誰も気づかず何もなし

横浜市 鈴江 純子

退院を喜び鯛が焼けてくる

病得て子らの優しくなったこと

子ら集い家も生命が蘇る

岡山市 清水 金太郎

孫たちを可愛すぎると嫁の愚痴

老い二人未だけんかする余力あり

好きだった顔が見るのも嫌になり

松江市 松浦 登志子

体内の水分補給缶ビール

リストラをされそう赤い服を着る

特急の停まる駅にて待つてます

海南省 谷口 義男

生き抜いた誇りを背負う父の肩

口裏を合わせ苦汁を飲まされる

身に合った歩幅で無事に黄昏れる

松江市 浦辺 静江

万歩計寄り道多く日が暮れた

道具だけ揃えなかなか捗らぬ

気分だけ若いがもはや古希の春

鳥取県 高尾 京

むつごろう国の暴力嘆くだろう

水鳥を追う干拓に春は無く

塩抜きの地に種まきは何年後

米子市 猪森 スミエ

首出すな鬼が見ているかくれんぼ

ストレスを溜めて熱出すゴミの山

おじさんこちら魚群知らせて舞うかもめ

羽曳野市 三好 専平

大往生できないことは知っている

百円のボールペンですご自由

逆引きの辞典が出来て裏も知り

尼崎市 古川 正子

母の日に娘に連れられて松竹座

藤棚の下にベンチが置いてあり

母の日に石南花くれる娘も五十路

高槻市 江原 秀夫

五月晴れ母系家族に鯉のぼり

武士道は地球の裏で生きている

年下が次々ふえる計報欄

尼崎市 小川 富江

病葉の仏になって一周忌

征くときと逝くときバンザイ有り無し

老いの息 吹けど草笛音を出さず

富山市 酒井 輝

辞める気で叱る教師が頼られる

子の家で暮らしのリズム狂わされ

見えぬ目に金銅仏の掌が温い

今治市 野村 清美

見上げれば思案している月の暈

ぶつぶつと何が不満か葱坊主

寝転んで遠慮会釈もない我が家

北海道 中里 つね一

屑糸の魔法祖母の知恵袋

マンションが出来て雀は宿さがし

五月晴 蝦夷の峠は雪まじり

鳥取市 岸 本孝子

いつ見ても砂丘は心広くする

鬼の留守癖になる酒飲んでいる

精一杯まごころ包むのし袋

鳥取市 岸 本宏章

飽食の付けが来そうで畑を打つ

町おこし鬼が山から下りて来た

僕の背に気分屋ですと書いてある

和歌山市 木村 親路

おばさんと呼ぶおじさんの憎らしさ

貴金属いつも一桁まちがえる

そのうちに男だてらと言われそう

和歌山県 杉山 精子

美しい別れもあっていい月夜

抜け道を捜す火傷をせぬうちに

一鉢の花が息吹をくれる今朝

和歌山市 松本 良

貝になりいい年寄りになります

保険屋も銀行も来ず軽い袖

息子より娘に架けるいのち綱

米子市 池尾 保子

リストラの闇でわたしの首がない

年金がもたらえる齢になつてきた

おふくろの味が待ってる里がえり

鳥取県 山本正光

引き出しのドラマときどき出て踊る

脳天にセツトしてある火打ち石

冥土までチャーター便があるらしい

兵庫県 北川とみ子

くしゃみ三回続き噂の中にいる

金婚へ計画通り行かぬまま

自由ですひとりよがりの遠い耳

香川県 神保坊太郎

娘を取った男と酒を酌み交わし

出しゃばりに頼みもしない借りができ

指揮棒を振りたがってる持参金

鳥取県 吉田孔美子

浅学を恥じる心がまだあった

悪友にされてしまった午前二時

家中に言葉飛ばしている母だ

高知県 桑名孝雄

六無齋ほどではないが死はいやだ

童顔の医者が保証をしてくれた

善悪の境あたりが面白い

大阪市 塩谷徳子

淋しいね鐘と話すわたし

寮に住む孫へお菓子とお小遣い

一日の無事をよろこび筆をおく

八尾市 與田明

褒めておいておいしい料理食べ残し

葬儀屋を苦笑させてる内輪もめ

和歌山市 和田美寿子

円安のくせに品物高くなり

母の日だ娘が揃い里帰り

兵庫県 仲井素水

春うららハンドル握る手に睡魔

牟寿来て永いドラマも未だ未完

島根県 松本聖子

日記帳今日の出来事もう忘れ

亡兄の庭花をつけたよ鳴子百合

池田市 木村一笛

赤い鼻びくびくすれば匂う酒

棧橋で男待つ身の港町

岡山県 土居ひでの

雨に陽にノルマに耐えて来た靴だ

カラオケに歳を忘れて酔いしれる

大阪府 杉澤汀

あんなことこんなことして生きてきた

極楽へ土産話を整理する

鳥取県 橋谷静江

年々に衰えてきた農作業

どの川を辿って見ても親の道

檀原市 西 本 保 夫
待ちぼうけいきなり道を尋ねられ
立ち話この家でも改築中

出雲市 加 藤 スズコ

岩肌に若葉が映える鮎の宿
下駄箱に靴が威張って下駄がすね

香川県 向 山 治 延

観光の地図を片手にフルムーン
空海の慈悲にすがった遍路杖

鳥取県 国 森 武 子

初孫だ五本の指も揃ってる
一人地に還り一人が生を受け

北九州市 岡 田 幸 生

妻と見る水平線や握りめし
止まり木でポックリ死などふと思う

鳥取市 森 明 美

ふるさとへ春の小川をききに来る
限らない日差しよ春をありがと

姫路市 服 部 一 典

特売日一人一個へ駆り出され
勤めより長い年金黄信号

高槻市 執 行 稲 子

日の丸弁当決められていた水曜日
うっとりギャルが見とれるにせ舞妓

唐津市 林 公 一 朗
使途不明マジックペンに指示を出す
レストラン仕上げは家のたかな漬

宝塚市 飯 西 ミサヲ

猫走る忙しければ手を貸すよ
万歩計狂い私を喜ばせ

唐津市 松 本 圭

連休も私はひとり喫茶店
家事繁多サラリーマンの日曜日

兵庫県 高 見 末 野

物言わぬ仏に生きた花祭り
老いばれも田植えだけはとしやしやり出る

鳥取市 石 上 悦 子

貯金箱ゆすり希望の音を聞く
筆不精ですが葉書のコレクション

鳥取市 富 山 雄 幸

オリンピック東西の傘揺れ出した
珍しい土産でお金借りに来た

兵庫県 緒 方 美津子

亡父掛けし納屋の帽子も三回忌
夫婦こそ時にズームをひいてみる

高槻市 傍 島 克 治

万が一ということもあり美女誘う
手加減をしてくれる父しない母

羽曳野市 内田 さとみ

六十路坂弾んでいます趣味百科
舵取れぬ夫に凭れて揺れてます

富田林市 欄 智久

清濁をあわせ吞むほど度量なし
疲れ癒やす百薬の長に頼りすぎ

兵庫県 西山 八重子

年金のくらしに軽いのし袋
背伸びしたばかりに泥がはねかえる

大阪市 平井 露芳

ホームにも御座候で並ぶ列
相談に何時でものるよ金以外

唐津市 江川 青琴

おこづかい値上げてやる子供の日
ペットとは思いたくない家族です

熊本市 北川 一進

見る人を楽しませてる造花展
落ちるのも覚悟試験をうけてみる

岸和田市 亀井 皎月

足許にゴミの昼寝が邪魔をする
まだ修理利きそうとみて外科へ行く

枚方市 大昇 隆広

男一匹きつとこのまま宮仕え
客商売と気付いた医者の子定外

兵庫県 徳平 穂子

初孫の泳ぐ鯉見て幸祈る
上は夏 下は冬着の春衣装

島根県 岩田 三和

七曲り登れば天の駅に着く
キケン個所上した横を見て渡る

和歌山市 森口 美羽

おだてられ張り切りすぎて伸びている
素晴らしい歌聞いてから出直そう

愛媛県 宮本 末子

生きて行くためのゲームはおこたらず
年金の額にくらしもついてくる

高槻市 左右田 泰雄

新緑の引き立て役か山つつじ
連休は入場無料をはしごする

出雲市 梅 ミツエ

だんだんと名前忘れた花談義
大正は強く生き抜く風便り

尼崎市 長谷川 佳山

宗教を語れぬ坊主ソフィー読み
この朝はフレキシブルな時の始まり

徳島県 安宅 美代子

消しゴムも知らんふりする誤字脱字
指導権妻が握っている様ざ

東大阪市 今岡 貞人
沈丁花春呼ぶ役を終えて散る
花いっぱい仏さまにも春が来る

岡山県 富坂 志重
どうしてかわたしお金にきらわれる
あそび下手な私は仕事大すぎだ

大阪市 中井 正秀
今日もまたコロツケにする独り者
頑固者融通さんへいつてくる

松江市 川本 畔
花冷えに思い直して髪洗う
お通じがあつたと孫のこと知らせ

鳥取市 山本 益子
自家製の旬の野菜を子に用意
キープしたボトルが縁で狂い出す

鳥取県 権代 康女
荒れた手は人の苦勞を知っている
空港の手荷物リボン結びつけ

堺市 井崎 ミサ子
見舞客来れば元氣な顔になり
くたびれてテレビと共にする食事

高槻市 小林 一閑
日本が危なくなってきた気配
ハローページ読みものとして面白い

泉佐野市 大工 静子
躓いて気付き旅先から電話
植え替えに花好きが来て話しこみ

静岡県 増田 扶美
腕白の子が持て余す雨三日
無器用に歩き続けた太い脚

鳥取市 宮脇 道子
退職で開いた心花でうめ
大国が傘ふり回しいやがらせ

岡山県 国米 きくゑ
射程距離と思ったのに狂わされ
血の滲む素足に母の百度石

松江市 佐野木 みえ
千羽鶴群を離れて翔ぶ一羽
スマイルがいつか悲しい癖になり

鳥取県 奥谷 彩子
お針箱母の苦勞が聴こえます
散り際の美学花にも男にも

会費 500円
締切 午後7時
。席題なし

番傘本社水府忌
句会 (33回忌)

と き 8月6日(木)
午後6時
ところ 三井アーバ
ンホテル(弁天町)
宿題 (各題2句)
「脱ぐ」 今川 乱魚 選
「捨てる」 細川 聖夜 選
「一番」 外山 あきら 選
「良い」 加藤 翠谷 選
「言う」 橘 高薫 風 選
「父」 磯野 いさむ 選
会費 500円
締切 午後7時
。席題なし

沙湖抄

八木千代選

自分史へ心の位置は一読者

うとましい花だ 整いすぎている

合わせ鏡に映る後ろ首の油断

他意はないけれど爪磨く癖がある

鏡が効かなくなつて来た仲間

水草の靡く狭間へ潜みだし

満点の顔で椿が落ちてゆく

続編は喜劇だ両目あけなさい

影二つ いずれは闇に沈むもの

とび立った蝶が枯らしたとも知らず

梅の実が落ちて誰も拾わない

日焼け止め塗り前向きに生きている

世の中がおかしくなつた紙吹雪

カーテンコールがつづくヒロインの柩

肉ジャガを食べ飽きたのか帰らない

酒のさかなには欲の皮を裂こう

主義主張変えろと桃が手に入る

ボクはまだ軍隊手牒持っている

絮ふわり自由というのはこのよう

どなたにも実物大で立ち向かう

八王子市 播本 充子

西宮市 奥田みつ子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 川上 富湖

米子市 林 荒介

和歌山市 桜井 千秀

鳥取県 新家 完司

鳥取県 鈴木 公弘

尼崎市 春城武庫坊

西宮市 牧渕富喜子

八尾市 高杉 千歩

八尾市 宮西 弥生

松原市 小池しげお

富田林市 池 森子

和歌山市 古久保和子

鳥取県 乾 隆風

米子市 鷺見 正子

豊中市 田中 正坊

尼崎市 春城 年代

鳥取市 春木圭一郎

カトレアのひとりで咲いた顔をして

水平線が波打ってきたわたしの眼

春愁や電話嫌いの膝を抱く

交差点 裏と表の面白さ

人混みが今日は私の味方です

花の名をたずね出遭えたのか花に

うかうかと戻せない日を生きている

素人にとつても解る見積書

水木咲く門に黄色の憂いあり

雑誌読む痛みこらえている時間

車座の下座で城がよく見える

一句だけ残したいとは欲がない

残しては逝かれぬ子です お月様

邪魔ばかりしながら腐葉土のつもり

藤衣ゆさりゆさりと招かれる

嘘のないくらしに軽いうつがある

風葬の墓標は雲ときめている

立て板に水 真実を聞きもらす

誘われても断る勇気もっている

桜の葉伸びる 満足しましたか

壺の中ことわりなしに覗かない

ボウボウと風吹くとおい身内たち

たいした事はちよつとも書いてないノート

ふとある日 妻が鏡台磨き出し

埃出た頃は勢いあつた僕

つかずはなれず甘え上手なまりである

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 岩本美智子

和歌山市 木本 朱夏

弘前市 一戸 ツネ

唐津市 久保 正剣

和歌山市 田中 輝子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 玉井 豊太

和歌山市 野々 圭子

吹田市 山本希久子

弘前市 斉藤 島

和歌山市 川上 大輪

米子市 木村富美子

羽曳野市 川田 晋

和歌山市 福井 桂香

海南市 三宅 保州

鳥取県 岩崎みさ江

寝屋川市 森 茜

大阪市 本間満津子

鳥根県 松本 文子

堺市 志田 千代

米子市 中井 ゆき

鳥取県 土橋はるお

米子市 石垣 花子

宇部市 平田 実男

西宮市 西口いわゑ

泳ぎきれば先はどうにかなるだろう
 鈍刀を振り回すから近寄らぬ
 キッチンでピカピカにして迎えうつ
 しあわせに霞がかかりだす油断
 終電を見届ける金筋の帽子
 競い合う芽を雑草と言わせない
 雑踏の中で泳いでいる孤独
 小さな庭小さな仏壇守るだけ
 ころぶたび大きくなっていく息子
 送電線誰が死のうと生きようと
 だんじりの大屋根に追い風がふく
 花粉症まだ解けそうもないパズル
 花の種届いてわたしねむらせぬ
 会いたいとサイン出してる回忌札
 九条に平和の期待などしない
 猫ことば陽気に騒ぐ子猫たち
 咲ききってシクラメンの無防備な
 切り捨てたつもりの影が喋り出す
 表彰状もらってこれでいいのかな
 留守電が一オクターブ上がってる
 冷静になるまで保留する道理
 大股に歩くと世間広くなる
 正直な目と約束をしておこう
 親と子の絆のような古き辞書
 決断をしたら性根が一度揺れ
 とときめきが欲しくて土と戯れる

米子市 青戸 田鶴
 八尾市 村上ミツ子
 西宮市 門谷たず子
 寝屋川市 籠島 恵子
 米子市 林 瑞枝
 鳥取県 乾 喜与志
 茨木市 藤井 正雄
 枚方市 森本 節子
 寝屋川市 江口 度
 今治市 矢野 佳雲
 堺市 上野 楽生
 松原市 玉置 重人
 鳥取県 さえきやえ
 唐津市 仁部 四郎
 出雲市 竹治かし
 倉吉市 淡路ゆり子
 東京都 山口 新子
 羽曳野市 吉川 寿美
 倉敷市 田辺 灸六
 米子市 小塩智加恵
 広島市 森田 文
 寝屋川市 太田とし子
 米子市 足立由美子
 八尾市 生嶋ますみ
 米子市 白根 ふみ
 鳥取県 土橋 螢

笑った笑った 私のミス覚えてた
 定年の皿に媚薬が盛ってある
 海よりも深い訣れをしてしまふ
 味方です じっと見守るだけですが
 人生いろいろエスカレーターの流れ
 リサイクル死後の私を考える
 缶詰をあけ損なつてばかり居る
 雑踏で出逢つた鬼は神なのか
 モチーフをしつかり視野へ入れておく
 どくだみ茶作りまだまだ生きる気か
 担がれてその気で一人舞う舞台
 下車二分赤い喫茶で待ってます
 薬草干して生きる努力をしています
 賭けすぎた愛が罪だと思ふ時
 一瞬の希望大きなしゃばん玉
 言い切つて軽くなりたいたいと思ひ
 相性の悪い花粉をつける蝶
 夏ですぬ寒い話をしませんか
 言い訳のうまい時計が動かない
 解毒剤ほしい地球の裏表
 鬼あまた この世のものが恐ろしい
 気にいった仮面 簡単にはずせない
 雲行きは新車が欲しいだけなんだ
 包丁の切れ味秘めて研ぎ急ぐ
 ふり向けば常に走っていた私
 お互いに綱引き合つて生きている

寝屋川市 井上すみれ
 美禰市 安平次弘道
 和歌山市 福本 英子
 箕面市 岩津ようじ
 尼崎市 長浜 澄子
 砂川市 大橋 政良
 寝屋川市 岸野あやめ
 米子市 光井 玲子
 鳥取県 西原 艶子
 鳥取県 田村きみ子
 和歌山市 青枝 鉄治
 鳥取市 武田 帆雀
 出雲市 園山多賀子
 米子市 茂理 高代
 大阪市 神夏磯典子
 鳥取県 石谷美恵子
 黒石市 相馬 一花
 尼崎市 田辺 鹿太
 富田林市 片岡智恵子
 岡山県 矢内寿恵子
 兵庫県 大谷幸次郎
 八尾市 高橋 夕花
 岡山県 小林 妻子
 貝塚市 池田寿美子
 和歌山市 堀畑 靖子
 米子市 澤田 千春

誘惑は異性ではなし 缶ビール

一ひらの雲の行方よ母の忌よ

カラフルな薬宝のように飲んでいる

手持ちぶさたで持病ひとつ飼っている

良く回る舌にヒントがありそうだ

たまごっちわたしの鬼を遊ばせる

母の日の包みを父が開けている

素直になれるふつくら姑の卵焼き

わたくしの時間あなたに使い切る

デザートの苺が少し赤すぎる

筆不精友に伝染してしまう

ふんふんと心はあちら向いて罪

激論をしてまで欲しくないプラス

生きのびて苦いお水も飲んでいる

水琴窟今日もコトコト鳴っている

それからの上司抹香臭いこと

ソムリエのおっしゃるがまま飲むワイン

肚決めてからは平気な丸木橋

赤い服着るがはけない赤い靴

響くものもって真水に会いにゆく

迷うたら水平線に教ええう

簡単に解ける謎なら知れている

多情仏心悟り切れない鐘をつく

パソコンが入力迷う二〇〇〇年

何もかも神のご加護と信じよう

そして夜仮面はずすとよく眠る

寝屋川市 平松かすみ

岡山県 山本 玉恵

大阪市 鍛原 千里

京都市 都倉 求芽

高槻市 乙倉 武史

横濱市 近藤 道子

大阪市 小林 周信

松江市 川本 畔

和歌山市 森口 美羽

横濱市 清水 潮華

和歌山市 山口三千子

大阪市 渡部さと美

大阪市 一本 勇太

堺市 宮本かりん

香川県 木村あきら

和歌山市 宮口 克子

大阪府 榎山 隆盛

愛媛県 中居 善信

羽曳野市 芦田 絢子

富田林市 中井 アキ

今治市 月原 宵明

寝屋川市 堀江 光子

羽曳野市 田中 透太

横濱市 豊田 羊子

鳥取市 岩原 喬水

兵庫県 遠山 可住

娘の部屋でドレミファソを弾いてみる

待つことにならされたのは花時計

総会の決議は先にきめてある

献金も庶民ワイロと仮名を振る

歯の治療 組上の鯉になりきれず

靴ぬげば砂鉄の砂のほこりかな

クレインにつかまれビルは高くなる

笑顔には笑顔が似合う 手を握る

誇るべし苦楽と共の土踏まず

一枚の紙の重さよ君が好き

豆の蔓伸びて約束果たしきる

花嫁の父にライトは当てないで

わたしにも賄賂の素質隠れてる

ポイ捨てと轢き逃げ共通点がある

最高の学府が沖に浮いている

幾山河越えて素顔のない私

出雲市 石倉美佐子

鳥取市 森 明美

鳥取市 植田 一京

唐津市 井上 勝視

和歌山市 玉置 当代

弘前市 佐治千加子

唐津市 市丸 晴翠

綾部市 藤田 芳郎

大阪市 三浦千津子

和歌山市 榎原 公子

和歌山市 吉村さち子

泉佐野市 稲葉 洋

唐津市 宗 弘

仙台市 川村 映輝

唐津市 相葉 あき

和歌山県 杉山 精子

播本充子さんの決定打は一読者だと思ふのです。心をどこに置く

かということとは日常どんな場合に於いても大切で、周囲の中の点と

考えれば、自己満足に終わらず媚びる事もないでしょう。一読者の

眼は原点の眼です。奥田みつ子さんの花も「これは川柳だな」と。

作品を自分なりの型に嵌めると一応は整いますが魅力がありません。

うとましくなった時がチャンス。骨格から壊しましょう。難しい事

ですが、それでも全力で壊しましょう。花に勇氣と活力が戻ります。

政岡日枝子さんの合わせ鏡は首すじの油断を見付けてくれた有りが

たい鏡でした。これで完璧と思った隙の心理を良く衝いてあります。

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

木本 朱夏

スイッチポン ポンポンで日が暮れる

川島 良子

先だって経済企画庁の調査で専業主婦の家事労働力を金銭で評価すると、二七六万円にのぼると発表されました。その金額を安いとするか、高いと思うか人それぞれでしょう。スイッチポン ポンポンと小気味よいリズムがこの句のいのちと言えましよう。余白にはお国の余り者と書き

神保 坊太郎

私の亡父は一徹で頑固で真つ直ぐな男でした。当然生き方も無器用で、人に泣かされた事はあっても人さまにも世間にも、迷惑はかけませんでした。

国勢調査アンケートか、何の余白でしょうか。お国の余り者とうそぶきながら、作者の毅然とした生きさまに、亡父の面影が重なって、ほろり微笑を誘われた一句でした。

陰干しと言う優しさを干している

倉垣 恵美

さき程の経企庁の調査ではありませんが、主婦の一日って結構大変なんですよ。お洗濯ひとつとっても、薄物はネットに入れ、色物は別にして、絹・木綿・ポリエステル・アクリル・レーヨン等全部洗い方が違います。勿論干し方だって。

恵美さんの句はただ単に、干し物のことをうたっているのではなく、作者の家族への愛、思いやりを詠まれた深い一句だと思います。

六月の花嫁となる雨おんな

田辺 鹿太

ジューンブライド（六月の花嫁）は幸せになるとは西洋の言い伝え。それを湿気の多い梅雨期の日本では、花嫁も参列者も難行と言えましよう。

一読して叙情句にも見えますが、軽くエスプリの効いたお洒落な一句だと思います。

嫁の来ぬ淋しさが乗るトラクター

松本 良

トラクターに乗っているのは、老いた父母か、はたまた孝行息子のやるせなさか。現代日本の農家のお家の事情をふと垣間見せてくれた一句。中七の「淋しさが」の「が」の使い方に頷いてしまいました。

尻尾振る癖が五十で直らない

中居 善信

お父さんの働いているうしろ姿を見たことがありますか？ 薄くなった後頭部、心なしが丸くなった背中。正面からは傲然と構えていても、うしろ姿は意外にも隙だらけ。

お父さん いいじやありませんか、家族のためですもの、思いきり尻尾振って下さいな。「五十で直らない」の措辞に、作者の哀しみが滲んでくるようです。

ベテン師にバツジを売ったのは誰だ

湊 修水

議員がベテン師になったのか、ベテン師が議員になったのか。バツジを売ったのは、ほかならぬ私達国民の一人一人かも……。

五パーセント引きになっている春気分

中川 楓

さくら散り消費税にも憤れてくる

岡田 たけを

五の段の九九がとびかう消費税

福田 由美子

有料となったらゴミも惜しくなり

伊藤 ふみ

最近の日本人って怒ることを忘れているのか、忘れたふりをしているのか。時事吟を武器に大いに世相を斬りましようよ。

尚香のむ

西出楓 楽選

コンビニの弁当愛はいりません
妥協する障子が少しあけてある
知恵の輪が解けて孤独になつてゆく
広口の瓶 手を入れて見たくなる
断わりが下手でコーヒー掻き回す
自信過剰の鏡の裏を覗きたい
失うものまだ多くある幸せよ
教会の鐘はやさしく人を打つ
三枚におろしすりにした未練
賞罰ゼロ特技は前に進むこと
熟睡の首ヒクヒクと無防備に
生きて来た証に届くカーネーション
黒牡丹 愛が怨みにかわるとき
まな板のくぼみは母の一本気
鏡の中へ女の歴史積んでゆく
うっかりを見つけ親しみ増してくる
十五夜の月の円さになわなない
峰打ちの愛をじっくり噛みしめる
聞き流す耳は左に決めている

大坂市 神夏磯典子
今治市 野村 京子
大坂市 鍛原 千里
米子市 石垣 花子
大坂市 三浦千津子
羽曳野市 芦田 絢子
吹田市 山本希久子
和歌山市 木本 朱夏
弘前市 肥後和香子
和歌山市 川上 富湖
米子市 政岡日枝子
富田林市 藤田 泰子
和歌山市 福井 桂香
和歌山市 吉村さち子
西宮市 西口いわゑ
西宮市 奥田みつ子
藤井寺市 高田美代子
羽曳野市 吉川 寿美
出雲市 園山多賀子

指切りが多すぎました春財布
本物にしては光がまばゆすぎ
猜疑心抱いて鏡へ自答する
鬱の日は風の誘いに乗ることに
厭なこと言うまいすまい花の下
欲求不満 糖分ひかえ塩ひかえ
二世帯に洗脳をしてついでゆく
信じる明日がきつとくるから種を蒔く
絶頂の背にも前にも敵がいる
幸せのキープは素手で受け取った
春探訪ふわりふわりとスニーカー
ものの判り好すぎてどうも嘗められる
再会の友へよき日の走馬灯
我慢がまんこれが私の隠し芸
玉手箱開ければ夢の燃え残り
その話ジョークとしとこ春の月
ゆとりある心が悩み聞いてあげ
夢無限あしたは明日の風が吹く
頭まだ柔らかいかこの迷い
体験を積んだ余裕のいい笑顔
みどりの日 心耕す土を耕す
脳死論また法律に委ねられ
いくつ鯖読もうか美容院の椅子
からみあいぶつかりやがて出る答え
見くらべてあわてることもある時計

岡山県 矢内寿恵子
米子市 白根 ふみ
今治市 塩路よしみ
尼崎市 長浜 澄子
芦屋市 黒田 能子
大坂市 日阪 秋子
西宮市 門谷たず子
富田林市 片岡智恵子
大坂市 辻川 慶子
鳥取県 田村きみ子
和歌山市 古久保和子
西宮市 牧瀬富喜子
横浜市 豊田 羊子
大坂市 稲本 凡子
今治市 村上久美子
和泉市 中川 楓
大坂市 町田 達子
岡山県 山本 玉恵
寝屋川市 堀江 光子
和歌山市 宮口 克子
鳥取県 土橋 睦子
和歌山市 玉置 当代
和歌山市 山口三千子
和歌山市 桜井 千秀
吹田市 栗谷 春子

御堂筋の緑はわたしの青春だ
球根に予定と違う花が咲く

化粧品手にする顔に年はない

ゆずります少し余熱のあるうちに

告白をした日 心はクリスタル

抜けそうな乳歯にくまれ口たたく

心経へ悟りきれない鬼が住み

損をして得してこれも浮世なり

何事もない日がいっちゃん良い日なり

旅にきて風との出合いまた楽し

余命表どの本能がひかるだろ

何もなかったように暦は去ってゆく

秒針の動かぬ母の胸がすき

水溜りとびこすさらの靴を履く

磨いたらしわがくつきりコンパクト

あれは嘘これは本音と聴いている

されて嫌なことを嫌いな人にする

しあわせは二合の米を研いで寝る

菜の花ロード春をたぐって旅に出る

愛犬と泊まれる宿のある平和

生きていてよかった母の日の私

他人さまに知恵を借りつつ暮らす日々

これ以上手抜き出来ない怠けぶり

地球ぐるぐるのちいばいごみいばい

熱の目に映るナースの皆美人

安物の指輪でけじめつけられる

門限にこだわり婚期逃げました

涙した数で咲かせた芸の道

五パーセント何時も思案の暮し向き

うすうすの噂を運ぶ蝶が舞う

ポケットのない女です袋好き

連休が済めば動き出す予定

座るのは厭 膝小僧拗ねている

葉桜に一息つける病み上り

生きる欲大阪オリンピックまで

子の巣立ち本音の夫婦歩みだす

保育器で背伸びしている自己主張

無料バス女の齢をあばき立て

鳥取県 石谷美恵子

大阪府 松尾柳石子

岡山県 大石あすなろ

弘前市 一戸 ツネ

兵庫県 中野とよ子

堺市 志田 千代

守口市 結城 君子

大阪市 本間満津子

和歌山市 福本 英子

大阪府 板東 倫子

米子市 小塩智加恵

寝屋川市 坂上 高栄

大阪市 藤田頂留子

典子さんの句―事情があつて、あるコンビニを数か月利用し

たが、日常生活に必要最小限のものが安直に入手でき、大変便

利であつた。食事時ともなれば、若い世代に混じり高齢の客も

お弁当を選ぶ姿が見られた。独り暮らしを快適なものにするため

。愛はいりません」と割り切るのも、時には必要かも知れない。

京子さんの句―感情の行き違ひがあつたのは、家庭の誰とであ

らうか。まづ先に浮かぶのは息子の嫁なのだが、こんな情景を

くり返しながら、理解しあえるようになるのだらう。少し

がよく効いていて、登場人物を浮き彫りにしている。千里さん

の句―物事すべてを明らかにするのが最善とは限らない。人生

の甘さも酔っぱささも、幾度か紙めたからこそ詠めた、奥行き

のある句である。花子さんの句―既に曾孫をお持ちの作者が、佳

句を発表される原動力となっているのは、この好奇心であらう。

猿真似に慣れて卑屈に乾く日々

エプロンの母の暮らしを真似る娘ら

もの真似がうまくて主役にはなれぬ

なんば真似しても及ばぬ母の味

真似しあい中流ごっこしています

金持ちの真似は息切れひどくなる

猿真似が上手で森を出られない

真似て画く丸にほんとの丸がない

流行を真似れば笑いだす鏡

山頭火真似て私の自然体

流行へ右向け右をする喜劇

馬鹿な真似だけはするなと子を送る

反発をしながら親の所作に似る

生きざまを真似ても父を追い越せぬ

反省の真似なら猿にまかせよう

佳

今にして思えば恋の真似だった

弟が真似をするぞと叱られる

才もなく群れて真似して生きてます

格好がつかず提灯屋を真似る

人間の真似して河童流される

どう真似てみても私の絵は未完

父の背の原風景を描きつつす

地

天

軸

猫八を真似て鶯谷渡る

田口 虹汀

愛 論

章 久

大 輪

あ き

智 洋

富 美

玉 恵

哲 子

良 子

めぐみ

俊 子

ちかし

満 秋

高 夫

圭 一郎

保 州

しげお

雅 楓

隆 風

芳 郎

寿 恵子

岳 水

山 口

虹 汀

果 た す

山口 高明 選



捨て石がやっぱり生きてきた不覚

平なりに役目果たして定年日

責任を果たすと腹がすいてくる

地球からそのうち届く果たした状

人酔わす役目果たして花が散る

義理果たす役は気のつく妻まかせ

とりあえず電話で果たす軽い義理

責任を果たした案山子ほっとかれ

合鍵の役を果たして野にくだる

約束は果たしていると花手桶

初孫の笑くば嬉しい里帰り

指切りの再会果たす北の駅

洞 庵

やすお

智 加 恵

あずき

久 美 子

喬 水

鉄 治

と 子

玉 恵

幸 夫

潮 華

一 風

約束を果たせば態度でかくなり

脇役のつとめを果たす妻がいる

人生を使い果たした頃悟り

閉山で御役ご免の黒タイヤ

頂いたお布施の分を果たす経

ほどほどの出果たした酒の功

草取りの日課を果たす老いの午後

ファイナル成功に酔う赤いバラ

ばれて元々追徴金は払います

軸

天

高明

清 芳

あずま

雅 楓

悦 男

良 知

つね一

芳 郎

寿 美

安美代子

実 島

正 雄

可 住

よしみ

克 治

高 夫

智 洋

初歩教室

題 — 丸

吐田公一
ばだきんいち

川柳は人間を詠む、つまり人間のくらしや感情（感動）……を詩う短詩文学だけに幅が広い。ですから、その中でご自分に合った世界を選ぶ必要がある。

滑稽な句を好むタイプ、情緒の世界を好むタイプなど人それぞれである中で、ご自分の体質に合った表現方法を選択する必要があると思う。また多くの川柳を読んでも、自分の体質に合うか合わないかで、理解のできる世界とそうでない世界がある。

ただ、選者の場合は自分の殻に閉じ籠ることなく、幅広く理解に努めるよう勉強しなければならぬと思うし、私自身もそのように努力する所存です。

添削句

○丸木橋よと見していると渡れない 美子

至極当然のことを述べている句

▽渡れてもやっぱり怖い丸木橋

○いばら道過ぎれば丸くおだやかに 郁子
丸くとおだやかにには類似語といえよう

▽いろいろとあったおかげで丸くなり

○丸い背を丸く米とぐ祖母八十路 志重

「祖母八十路」は不要。後ろ姿もの「も」で心が丸くなっている意を含む。

▽米を研ぐ後ろ姿も丸くなり

○ボール追う人生たんとスタジウム 芳水

たんととはたらんとか或は方言のたんと＝沢山の意なのか。いずれにしても難解すぎて相手に分からないのでは

▽ボール追う人生もありスタジウム

○リタイアも丸三年の目玉焼 泰雄

面白い。ただ「も」は時間的経過を表わしているが、「が」とすることによって擬人法による表現となる。

▽リタイアが丸三年の目玉焼

○表向き丸く治める腹の虫 みやこ

いい着想。添削句のような表現も

▽建て前で丸く治めている本音

○輪の中に仲間を売ったのがひとり ひでの

原句もいいが、ややインパクト不足

▽輪の中に仲間を売ったユダひとり

○日の丸に見合う知性の政治待つ 公一朗

句がやや固い。時事吟としては面白い。

▽日の丸に恥じない政治待つ庶民

○近頃は丸くなったと親父注ぎ 隆

上五は冗長。中七は酒癖がよくなったの意か？ 少し遊離している感否めない。

▽親の目に角とれて来た子の育ち

○繰り返す話に女輪が丸い 智加恵

輪＝丸。繰り返すがどういう意か分からない。省略はいいが、読む相手に解るように

▽お喋りに夢中女の輪が温い

○教わって地球は丸いと信じてる 弘一

内容に乏しい。人間の疑問や欲望を詩う。

▽ロケットで地球の丸さ見てみたい

○丸い背が悪事するなど叱ってる 八尋子

中七以後が説明的

▽今の子は駄足りぬと丸い背

○丸刈にされて野球部一年生 純子

原句は残念ながら説明句に終わっている。

▽甲子園目指し丸刈ボール追う

○日章旗かかげて悪い今世代 よし子

右翼のことと思うが、これは今世代に限らない。同じ詠むなら明い句を

▽日の丸をあげた嬉しい金メダル

尤も人心を扶けるような句であれば問題は別

（参考）手と足をもいだ丸太にしてかへし 鶴彬

○パチンコの玉が私を丸くする トヨ子

ストレス解消の一つ。原句もいいが

▽パチンコの玉に運勢賭けてみる

○辛酸をなめてようやく丸くなり 君江

○過去刻む明治の父の丸い背 君江

○場合よくやくとか明治のは省く。君江
さんの二句を取捨選択すると次の句に

▽辛酸をなめた老父の丸い背

○丸文字で青春謳う日記帳 宏

▽丸文字が青春謳歌する日記

○児をあやす丸い背中に愛を見る 美也子
下五が少し甘い。

▽児をあやす丸い背中有る絆

○ひとつ詰るとあと出てこない丸暗記 ミツ子

わざわざ上七にしなくても。できるだけ上

五になるよう言葉を探す努力が必要

▽あせるほどあと出てこない丸暗記

○背を丸め浮世の風に立ち向う つよし

上五に対する下五に難

▽せちがらい浮世の風に背を丸め

○丸丸と国の宝の孫育つ まさと

少子化時代には「国の宝」という言葉はそ

ぐわないのでは。川柳も時代の流れは無視

できない。この句が半世紀前なら納得でき

るのだが――

▽丸々と育った孫を抱きあぐね

○角とれて丸い心になるわたし

原句は全くの説明句

▽背も丸くなって心の角もとれ

美寿子

○丸々と太った罪でボランティア 正志

厚生官僚の時事吟だと思つが、時事吟であ

ればもう一步踏み込んで欲しい。

▽丸々と太り借金踏み倒し

○丸い石拾つて見たら腰がない 雅子

下五の意味が上句とどのような関連がある

のか？ 智恵恵さんのところでも述べたよ

うに、句意が人に分かることが大切。参考

句は原句とは全く違つて視点だが、これには

人間の姿が詠み込まれているはず。

▽激流に揉まれて石も角がとれ

○冗談をつい丸呑みにしてしまふ 剛治

原句は説明のままで終っている。

▽丸呑みにした冗談にあった刺

○孫の書く顔目鼻口皆丸い 捷也

中七が冗長すぎる。一点に絞ること。

▽どの顔もまあるく画いた園児の絵 一乗

○世話役の苦勞で人が丸くなり

▽世話役の苦勞で人が丸くなり

○山盛りで好物苺丸盆に 徳子

▽丸盆に盛った苺が食そそる

○しみじみと出合いに感謝丸く老い テル子

▽あの人に逢つたおかげ丸く老い

佳句

大人にも時には欲しい二重丸 早智

(久しぶりの佳句。よかったですね)

聞かぬ振り丸く治める姑の知恵 玲子

(姑をうまく使われた)

五重丸もらつて急ぐ母のひざ 楽生

(上手にまとめられている)

丸々と腹ふくらませ鯉のぼり 多美子

(やや川柳らしくなりました)

腹割つて丸くおさめる老いの知恵 専平

(この調子で頑張つて下さい)

丸木橋渡る二人に明日がある 八重子

(下五はよく使われる句だが)

義母送り自分にあげる二重丸 孝子

修羅いくつ愛の形が丸くなる アキ

消えるまで見送る母の丸い背な 一典

(いくつになつても母は母)

丸はつのテストで決まるひとの価値 てる代

(痛烈な官僚批判)

丸まると肥つてからのダイエット 幸次郎

(二回目の佳句。よく頑張られた)

もめ事を丸くおさめた母の蛇 りつえ

(下五がいい。続けられた成果)

母の背の丸さに不孝詠びている トキ

(進歩のあとが見られます)

花丸を貰つて弾むランドセル 彩子

(すっきりと詠まれたのがいい)

私の句

二重丸五重丸への意欲みせ

編輯部

— 90 —

嫁した娘が利子を背負つて里帰り
低金利ばあちゃん弱気になつて
年金の利子から税を差し引かれ
ちっぽけな夫婦の夢消す低い利子
利子に夢かけた計算みな狂い
借りた子に月一利子を払われ
ご馳走を食べたらよき低金利
目減りする利息でわが身はそくなる

はびきの市民川柳会

菅田

絢子報

塩砂糖と貼つて奥様旅行中
お天気の話ぐらいのお付き合ひ
勉強嫌ひ鉛筆だけをとがらせる
おおらかな妻で空気を軽くする
りハビリに二十五円の消費税
一日中氣を引きしめる四月馬鹿
お互ひに一笑に付す四月馬鹿
四月馬鹿毛生えぐりが効いてきた
美しい嘘ばかりの四月馬鹿
四月馬鹿笑つてます嘘がよい
なにもかもすべてあけます四月馬鹿
サラリーに妻の権利も少しある
サラリーは皆貯金する親がかり
汗で得たサラリーの価値しかと知る
父の汗見せず機械が金を吐く
一戦を妻と覚悟の給料日
振り込みになつて威厳のない父よ
悲しみは時効に思ひ出は永遠に
勘当も時効になつた父の呆け

盛之 富士子 けい子 さよ子 甚一 辰郎 金太 洞庵 扶美子 一壺 昭子 美喜 是るよ 二南 専平 たけし 志洋 重人 悦子 庸佑 晋 吐来 金太 絢子 模杳

侵略史すべて時効のように言う
時効来てやつと青空見る無実
犬と猿合はす恩師のお巾着
割り符持つ人を尋ねて旅に出る
好きだから向ひ合はすと喋れない
合はす顔ないと頭を刳つてくる
迷ひながらも合鍵を持つている
刃こばねを研いで過去去の傷癒えぬ
妻の留守慣れぬ手付きで米を研ぐ
人生の凸凹研いで今日も暮れ
包丁を研ぐと自慢の腕が鳴る

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

背泳の背なに神経失はせる
身の内を枯葉が泳ぐとても静かに
スランプへ開き直つた泳ぎする
泳ぎ方教えて欲しいかたつむり
青空を泳げ泳げと鯉に言う
大かきも猫もおぼれるから泳ぐ
下手な泳ぎで浮き上がれない貝である
鯉のぼり男を空に泳がせる
カエル泳ぎも出来ないで川に棲む
服のままで泳ぐ稽古しておこ
泳ぎつかれて笑い袋の修理する
無冠になつて抜手を切つて泳げない
腰までの雪を泳いだ国境
ただ今はゴール目指して泳ぐだけ
川下に向けて泳いでばかりいる
煩惱と背中合わせて泳いでいる

ゲン吉 利武 かつみ 一屯 りつえ しげお 美代子 洞庵 四三郎 辰子 さとみ 日枝子 てい子 保子 玲子 寿々子 ゆき子 品子 春枝 八重子 なみ 千春 花子 天雀 恵子 ふみ

群れをなす泳ぎの中の反逆児
足の立つあたりで泳ぎ溺れない
立ち泳ぎしてしがらみを抜けてきた
大かきは海が風ぐまでやめられぬ
繰り返し泳いだ疵を舐めている

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

裏庭の西日で育つ花ひよろろ
過ぎし夢落日追つて鳴くからす
いさかいて主なき部屋に西日さす
西日さす窓の座席が空いたまま
円空仏は離れに 西日射している
鶏さばく男に西日強すぎる
少女ときめいて西日に光るレモン
宙返り出来ずに堕ちてゆく西日

佳句地十選 (6月号から)

菱田満

秋

一生を晴着で過ごす内裏ビナ
釣針の油断見つめている魚
かぞえ唄十から先は子にゆずる
要求はメザシ一匹父の酒
困いなどするから雑草生い茂る
ほめ言葉抱いてスキップして戻り
見舞客みな口々に酒にふれ
二十一世紀も自転車こいでいるだろう
捨てようとも誰も言わない父母の杖
亀の勝つ話信じて油断する

吟笑 シマ子 静子 仁清 度子 道子 朱坊 希久子 透太

漂泊の西日にさらすのど仏

西日射して海はやさしい母となる
朝目ざめ今日のプランをたしかめる

まささらな朝を洗面所でたたむ
身の丈に余るおほめにはてる頬

約束を果した小気味よい火照り
今日の火照りを静かにさます春の雨

頬つべ火照らせ好きな子がいる一年生
水平線沈みゆく太陽あたり火照る

あっち向いて何やら言うて居る女
つかめない陽炎追って春の円周

いちめんの葉の花となり耳ひらく
半袖がちらほら街に白いこと

二次会はラバウル小唄勇み立つ
母さんはみんな若いね幼稚園

何時までも水に流さぬ国ばかり
税金を納めた来たが愛想ない

寮長さんに御挨拶して父母帰る
川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

知恵子 吉太郎

寿美子 白漢子

日出子 とみ子

明子 一笛

勝平 昭三

鶴丸 義芳

煩悩児 薰

長吉 紫香

光穂

比ろ志

正子

芳子

久子

澄子

武庫坊

すみ

三代子

義香

芳

一笛

昭三

義芳

薰

紫香

芳

一笛

昭三

壁なしにしてから風が抜けてゆく
娘との壁は笑いの中で消す

児らの描く壁画未来の道しるべ
悪友が誘う日暮れのコップ酒

誘われる時が花よと旅に出る
蝶々の誘いに甘い豆の花

誘惑はわたしと同じ淋しがりや
誘われていやと言えなく義理を立て

過労死におののく森へ誘われる
くやしいがそろそろ年貢の納め時

そろそろと歩いてみたい星月夜
順番がそろそろ来てる回り椅子

暮れかかる夕日へそろそろ策を練る
台所そろそろ嫁に預けたい

世代交替そろそろ父の樹も細る
思惑があつて道草してしまふ

すぐ曇る眼鏡で思い出が揺れる
武器だなと思うが涙には負ける

歳月は思い出さへも風化する
思うことは一樹葉の下で

思い出し笑いコーヒー飲みながら
西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

元氣よく出掛けた靴が帰らない
靴姿えて新風に翔ぶ用意する

母の日よ無性に欲しいベビー靴
履き慣れた靴をかばんに旅に出る

試歩の靴はやる心について来ず
階段の一段毎にある踏み絵

邦代

きみ子

茂美

房子

清子

きみえ

畔

静江

とも子

民子

可女

与根一

義良

米子

桂子

多賀子

太泡

芳枝

みえ

文子

町紅

哲子報

房子

階段に今日の体調知らされる
頑張りよりハビリの靴知っている

オフィスビル裏階段でうわさ沸く
階段というに優雅な段畑

まだ上る階段があり頑張れる
階段の途中で漫画本を読む

階段の途中で愛を確かめる
階段を一気に上るテロリスト

靴音に今日の疲れをためている
それぞれの生さざまりて薄暑来る

薄情な男の飯を炊いている
羊羹がひとり立てぬほど薄い

オブラートの薄力を頼っている
薄給の頃は嫁さんやさしかり

幸つすき亡母の形見の夏衣
薄い封書の中から落ちた果し状

罪の意識うすれて今日を生き延びる
腕時計さて一日に何度見る

咳込めばそつとのど飴くれました
ないようである自動扉の存在感

生きてると不安ばかりがわいてくる
減塩減糖一さし毎に愛も盛る

白い歯を見せて本心見せぬひと
ローズ川柳会

山崎 君子報

すし種も話題も豊富趣味仲間
そろそろの味も知らずにもう終点

散る桜残るさくらに見送られ
ミサヲ

キク子

貴代子

涼子

道胤

能子

佳秋

文

正坊

曙蝶

春蘭

諷云児

石舟

とみ子

てる

トミエ

美智子

鹿太

澄子

求芽

萬的

絹子

江美

春蘭

純情な告白湯気が立っている

告白ができずコーヒー冷めている

思いやるならそつとしいてやんなはれ

白いカラス告白すると黒くなる

告白をしてからバラを買いにゆく

ひまわりの告白愛はおおらかに

告白へドギマギしてる河内弁

あの日からナンバーツは急がない

急がねば追い風すぐに止まるから

急ぐから女結びにしておこう

急がねばバトンタッチが絵にならぬ

急いでもコビーの速さ変らない

娘より嫁の料理が口に合い

擦れ違わざま衣装比べるのも女

父よりも母との別れ身に応え

丸ごと愛し母は比べること知らず

美人画は何故か私にみな似てる

不揃いのいちごも同じいちご味

比べずに感謝しておく握り飯

まだ残るがまんくらべの柿二つ

どの部屋の時計も気まま落ちつけず

ふるさとの母へ気ままを言いに行く

古稀すぎて女に気まま許される

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

鍋物が家族のだんらん聞いている

味けないレンジが鍋のお株とり

ブランドの皿で鯛が寝ています

シルバー車私と共に生きており

泰

剛治

頂留子

度

金太

森子

朝子

とみを

一風

夕花

年人

白洋

春子

三男

宏

たもつ

弘一

柳弘

洋

祥一

雅文

まつお

シマ子

聖子

好栄

ちよえ

英子

鍋みがくピエロの面を脱ぎすて

鍋焼きが好きな頭をならべてる

つき合いがにがてで今日をもてあまし

割箸に叩かれ喰う皿である

名人の気取りで皿に絵を描き

何ひとつ入れたことなし飾り皿

川柳塔わかやま吟社

宮口

罪深い私を包み込んだ空

百歳の寝息ときどき確かめる

自らに勝たねばならぬ鞭を打つ

葬送の曲はワルツと言っておく

勝敗にこだわらず友が減ってゆく

今日の自分に勝つため善を一つ積む

人と勝負しない自分に勝っていく

長生きで態度のでかいうちの猫

長生きはしたいが呆けるのはいやだ

晩年を送るわたしに溺れまい

深いふかい森へみどりの風送る

折たの花が見送る無人駅

星空へ妻か腕を組みにくる

母の日の空だ優しく晴れている

折角の好意無にする上の空

嘘ひとつ五月の空に恥じている

青空へむくむくと湧く力瘤

大空を満喫してるリマの空

長生きの秘訣知らずにまだ生きている

父の年越え長生きに欲が出る

長生きで何か迷惑かけたかい

はるみ

鈴江

かつ子

博利

清泉

白汀

克子報

たつお

保州

富湖

三男

紀久子

泰子

萬的

金太

豊太

寿子

佐代子

しげお

柳宏子

二南

光代

輝子

富美子

利治

和重

淳太郎

一合の酒欠かさぬという長寿

長生きの秘訣は古老小指立て

長生きをして散骨をしてみよう

長生きの梓で散骨をしてみよう

ふり向いて見送る亡母に似た女

嫁がせせた子に米送る味噌送る

録画再生悲しいとは早速送り

ダムの水五月の空を遊ばせる

見送りは母一人なり無人駅

川柳ささやま

酒井

靖子報

ふる里によもぎ香っている安堵

桜月少女の頃の夢を追う

愛妻の弁当ピンクの香りする

花嫁に花束もらう涙粒

よき嫁を選び不足の多い母

ダム工事一つの駅が消えてゆく

まだ脛をかじる子がいて寝ておれず

特急も温泉駅を忘れてない

好物を互いに知ってみやげ送る

野の花を束ねて孫の誕生日

年金を当ててその日の餌を漁る

橋渡る時の味方を選んでる

米びつがあしたの命守ってる

着んと捨て選んで買ったはずなのに

選ばれてからの風向き背なへ来る

病床へ四季を見せた花選ぶ

石投げて敵と味方を選び分ける

ネクタイを選ぶ春ですぬ恋ですぬ

吞天

正博

英子

栄美子

紫香

射月芳

大輪

稚代

美子

恵美

純子

とよ子

芳乃

美智子

多美子

末子

一繁

八重子

素水

とみ子

つや子

ヒサ子

和子

富美

芳郎

可住

花東の余韻がいまだ掌に残る

溝口川柳会

小西

雄々報

靖子

料理に愛ひとにぎり振りかける
手料理の料理マナーに出る疲れ
洋食の料理マナーに妻と棲む
幸福は料理上手な妻と棲む
舌鼓さすがホテルのフルコース
スパイスの効いた料理へ誘われる
披露宴豪華料理へ箸迷う
揚料理子供釣った川魚
奥ゆきの深い料理は母の味
台所嫁に譲って食べるだけ
他人には優雅に見える料理食う

川柳大坂

坊農

柳弘報

弘子
正光
鈴木
久子
智恵子
豊枝
信敬
康女
静江
雄々

近郊に住めど息子は嫁のもの
眩しい親父の頭光ってる
人だから風に心も揺れるだろう
結婚式眩しい新婦に妻重ね
梅干と納豆じゃユーモアでてこない
春の夢亡母の笑顔の眩しさよ
ユーモアは神が授けた潤滑油
み仏の眩しく見えた花会式
ユーモアにからますためのなる話
体裁が重たい家系父の顔
体裁が愛のボタンをかけちがう
叔父の家近くなったよ東西線
成績は言うな割軽な子に育ち
ユーモアでみんなを円くさせる人

美鶴
信醉
喜楽
多香
美すゞ
叭笑
河南子
雅巢
青道
朝子
司
いづみ
美花

おてんばが今日は眩しい角かくし
三分間待てとラーメン妻の留守
過労死は気にせぬ蟻の列の中
あわす目が眩しくなつて恋を知る
気の抜けぬ相手だユーモアも霞か
眩しさは大掻きで来た定年だ
ユーモアのあるカナリアは歌が下手
爆笑を誘うピエロの影裏し
ユーモアがあり金持ちで男前
近郊の仮設神戸に戻りたし
曲がまだ鳴っているのに歌おわる
逆立ちをしたのも混じる蟻の列
ユーモアに飢えた男のひとり言
体裁は構わぬ母のはつれ髪
近郊の蝶が都会に憧れる
五バーの主役眩しい五円玉

川柳岩出

児島与呂志報

鉄心
洛醉
しげお
柳昌
比呂志
希久志
元紀
かよこ
まつお
一歩
本蔭棒
ダン吉
笑風
金太
重人
柳弘

蛙の子蛙にならず田は荒れる
よく聞けば自慢するだけ波に乗り
道端に咲いてる花に教えられ
広い道私の通る道はない
自慢には多少の嘘がまじつて
武勇伝ばかり出てくる戦中派
噂とは恐いものだ道をさけ
竹原川柳会
時広
一路報

正義
智恵子
英子
たねえ
重徳
神一郎
与呂志

味自慢手抜きの間が見られない
道標を頼りに進む未知の道
雨あがり蛙としばし見つめ合い
この道の行くてに幸を信じてる
年長が自慢話をほめて聞き
雨蛙鳴いて出かけに傘を持ち
さりげなく賞状飾る応接間
路地裏の道にやさしい風を受け
親離れ子供の道が気にかかる
目覚めれば蛙の苑に吾も住む
思いやる孫の自慢に花が咲き

和子
正直
昌子
悦男
愛子
ふみえ
千鶴子
保子
哲雄
良一
春子

抱え地蔵に幸せ願う旅の人
棒瓦古しい時間を溜めている
照蓮寺も春なり静水さんに逢う
新畳ステンコロリと老いの足
ケンケンで童にかえる石畳
一畳の広さの紙が見当たらず

貞子
現代
喜美子
菁居
静風
房子
比呂子
淑子
喜久恵
清水
節夫
栄恵
静佳
笹舟
夏喜
蝸牛
蘭幸
高千枝
高史子

読み捨ての本の鳴咽をきく畳
一枚の畳の中で安来節
ほっと一息あぐらかいてる畳
緑の無い畳へ背負い投げ決まる

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

一枝
美佐雄
笑子
一路

読経より布施が気になる末寺僧

千羽鶴幼い指も願ひこめ

映画館消えて文化を興すまち

悪党と肩をよせ合う弁護団

御魂達と呼びかけ村の慰霊祭

米寿なお僕は我が家の避雷針

折り鶴に女心が詰めてある

お馴染みの宿は我が家をだぶらせる

露天風呂稲田飛び交う螢たち

嫌煙権煙の来ない席選ぶ

減塩ですこれでいいのと押し切られ

山茶花の宿は不倫と今気付く

家と家結ぶ大役頼まれる

またたかぬ星を叩いているいじめ

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

静江
とし子
ルイ子
薫
庸佑
マツエ
よ志子

三十石船川生きているくらわんか

ドンクリの転びそこねた狭い川

神の棲む源流汚れ許さない

夕ぐれの川ゆつくりと疲れた電車

安心をさせたい嘘を押し通す

山越した知らせにほっとする夜明け

安心を買っうにもセコム高すぎる

母系家族安心させた鯉のぼり
すぐ消えたボヤで安心して眠る
顔見たら安心よも肚がたち
安心をするとネクタイゆるみだす
たんを飲みうっとり眠る母の胸
うっとり小磯抒情の絵に見とれ
落花粉々うっとり尼僧手を止めて
捕われて蟹は直訴の泡をふく
5%反対署名山ほど積んだだけ
赤ちゃんの訴えママは肌で知る
幼子の目元は何時も訴える
核廃絶ドーム無言で訴える
訴えるその眼差しに嘘はない
日記帳開けて気づいた誕生日
雑踏の中で確かな万歩計
何事も水に流せるよい家族
行く人の心も和む花時計
関病の出口が見えぬ模様様
古くても一時間が来たら一つ鳴る
カーテンで仕切るわたしのティタイム
中流の心貧しき放置自転車
零ほどの情も税務署持つてない
不況にも雨にも負けず花むしろ

川柳東大阪

森下

愛論報

愛だろかひと味違ふ妻の鍋
箸割つて別れ話の膳の味
嫌いですけど心に残る人
好き嫌いなく食べさせる母の知恵

波留吉
メ女
柳宏子
紫香
稲子
比呂志
萬の志
艶子
東雲
克治
一笛
高榮
泰雄
宵草
漢沓
吉太郎
あきら
英一
しげお
節人
重人
白溪子
秀夫

超音波キライ私を裁くから
あなたの持つお金以外は嫌
五百羅漢人間様が嫌いです
人待ちのボーイズを嫌う水芭蕉
幸せな雀は天守閣に住み
欲捨てて雀の宿を訪ねよう
好きなだけ喋りや舌は切らへんよ
米あまり都会の雀も肥えている
娘さんおとなになって肥りだし
ホームバー家でおとなの時間来る
おとなになったんだ心をバラ色に
試し斬り舞台竹光身構える
いやな奴ばさつと斬つた夢の中
風を斬る父の太刀から黄昏る

岩美川柳会

羽津川公乃報

ばっは
一志
真柳
雅文
晋吾
朝子
賢子
柳宏子
東雲
信博
恒明
文子
三代子
湖風

きみ子
單車
公乃
和歌子
一夫
帆雀
大漁
美恵子
忠良
多哥由
節子
薫

香典のあと半分は月賦だぜ
苦しみを半分にして耐えている
半分の幸を家族で分かち合う
味方の顔半分ぐらいの敵もいる

ふくべ川柳会

橋本多哥由報

母性愛何時も女の底にある
可愛い子誰に似たのかよく動く
散るさくら追いかけてながら咲く桜
焼香の謎が今でも解けて来ぬ

よく動き老人会の華でいる
老いてなお時々光る心持つ
揺れ動く心鎮める座禪組む
桜見でいつものあなたを見失う
指先の動きに謎がありそうだ
親の傘骨粗鬆でも子にかざす
時々でよいから言つて愛してる
芹の花咲く頃花子嫁になる
夫の炊く芹粥がまんして食べる

三幸川柳教室

三宅

保州報

喉笛をならして飢えをしのいだ日
命綱かけて合図の笛を吹く
笛吹けど踊らぬ人の金庫番
父と子のいつか別れる祭り笛
酸欠の夫婦響かぬ笛となり
記憶剝落 鳴らなくなつた母の笛
神さまの笛にゆられてる余生
塾の子へしかと見せたい広い海

はるお

螢

芳江
孝男

和歌子
一夫

輪多朗
美恵子

明美
孝男

信子
睦子

一瑤
寛子

きみ子
多哥由

よし子
昭枝

孝子
親路

三千子
さち子

正一
鉄治

太陽ぼつん太平洋のと真ん中
街角の広告塔はよくしゃべる
来る者は拒まぬ悪の広い門
狭い日本にひろい基地がある

散骨は水平線の見える海
スキャンダル別れた後もプラスにし
住所録に愛犬ボチもプラスする
雪跳ねてプラス志向の路のとう
プラスな面も多分にあると同居する

花の芽にBGMをプラスする
引いて足して女でいようもう少し
生きがいに良きライバルをプラスする
描き足した眉でちよびり自己主張
断ち切つた愛をプラスに光らせる

百歳がプラス志向の腹八分
一つまみ塩プラスしていい男
カメラアイ意識している蛙の子
雑魚の群一匹気どる奴がいる

氣取つても姿知つてる影法師
氣取つてもピエロは殻を破れない
氣取つて矢尻は的を射抜けない
ベレー帽ちよつと氣取つて持つ絵筆

春風の影響翾んでみたくなる
乱開発の影響熊が里へ来た
小さい箱選んだのには訳がある
ぶつちやける雨に延期のないドーム

得手のないおとこのそばで飯を炊く
正 匍
美寿子
百合子
保子
和子
健三郎
初子
登美代
みね
章子
和代
貞子
町子
美智子
嘉平
公子
朱夏
美子
悟
起世子
千秀
桂香

南大阪川柳会

寺井

東雲報

楓 楽

萬 的

庸 佑
信 治
朝 子

正 匍

美寿子

百合子

保子

和子

健三郎

初子

登美代

みね

章子

和代

貞子

町子

美智子

嘉平

公子

朱夏

美子

細く長く太く短くどれにしよう
退院の延期は母に嘘を言い
あの投手出れば私にある出番
体制に影響はないぼくの椅子

得手勝手自分の道をゆずらない
入選を夢みる春の絵の具皿
選ぶ票白紙するとは無責任
干拓は延期蛭の笑い顔

悦楽にふけると高いつけがくる
駅うどん上手にたべるコツがある
列車事故通勤地獄に輪をかける
もてもて悦に入ってる落し穴

お酒さえあれば満悦父の膳
あきらめる頃まで延期する気かな
悦に入る笑いこつそり皐月賞
車椅子自力で二歩あるき初め

得意氣にパソコン前に子があぐら
ハイチース校ほろほろ悦な風
坊さんの都合で年忌延期され
得手勝手言わしておこうもう齢だ

教育改革生徒の得手を握り起こし
選りすぐり値札ながめて買わぬ女
パソコンで敵の不得手を探り出す
やりくりは得手だがいつも火の車

本人の意志で選んだ尊厳死
川柳クラブわたの花 吉村

一風報

直子

憲佑
公一
智久
勝美
三美
哲郎
真砂
柳伸
頂留子
秋子
文秋
柳宏子
千里

章久

志華子

重人

たもつ

東雲

寿美

悟郎

ダン吉

度

千 里

柳宏子

文 秋

秋 子

頂留子

柳 伸

真 砂

哲 郎

正 博

わがままな送り迎えも布団中

日焼け止めおんないそいそ野良仕事

身づくろい母はへちまの化粧水

猫にまだ引越すことは言っていない

厚化粧しながら不況猫に向ける

留守の日には化粧も手抜きしています

本当のわたし化粧の下に棲む

鏡まで騙したような化粧する

水溜り子の長靴を誘う初夏

薄化粧お出かけ祖母の若く見え

面接の化粧を父に見て貰い

厚化粧酒を相手の夜の蝶

たまごっち祈るだけでは育たない

水溜り雲が浮いてる雨上がり

あばら家もつぐいすばりの廊下です

化粧品娘のおさがりで若がり

疑えば妻のカルチャー気にかかる

あしんどやっぱり家が一番や

琴線に触れて告白深くなり

疑いの目で見やりみんな疑わし

エエトコへ行きやと母に紅をさす

ほんのりと匂う娘の初化粧

高いほど美人に売れる化粧品

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

お座敷で飼ってはいても犬は大

電話口妻がもてる話ぶり

幸せな返事くるまで戸を叩く

見せる顔隠す貌ありドア一枚

君江

春子

幸枝

隆風

一盛

友甫

朝子

ますみ

幸子

トシエ

まさと

明子

けいこ

いつみ

春江

知佐子

美代子

民子

明子

八寿子

宏

剛治

鬼遊

宮崎シマ子報

清芳

弘直

シマ子

田実子

お相手によつては扉全開す

大転換昨日とちがう今日を生き

昨日今日いずれも私の顔じやない

仲直り昨日のことにしてしまふ

昨日までイントロだったかも知れぬ

川柳塔おつぱこ吟社

木村あきら報

五パーセントずつしり重い市場籠

まだ夢を捨てぬ六十路のイヤリング

地蔵さんの笑顔に今日も救われる

そんな事ぐらいが笑いとばせない

お父さん叱つておいて座を外す

三文の徳を信じた朝詣で

倅せは苦しい峠越した時

高血圧今日も日課の薬飲む

朝シャンは寝ボケながらも欠かさぬ娘

一枚の辞令に迷う桜守

背を丸め歩く友見て老いを知る

朝焼けに雨具の用意論す母

友がいっとう老いのブランは草むしり

朝モヤにかすれて消えた山桜

世界地図 所どころにある汚点

温い風吹きそな旅の途中下車

底辺で計算なしに住める幸

飽食に溺れて医者薬漬け

倉吉川柳会

谷口

次男報

喜美子

香住

欣史子

能子

あずき

くに子

マツエ

吟笑

かおり

文仙

坊太郎

輝夫

あきら

よしみ

治

治延

放任

チカエ

なみ子

ひかり

はつ恵

フミ

正雪

次男報

谷口

次男報

ゆり子

菩句

山が呼んでいる俘虜にされている

呼び水に生氣もどった子の命

呼びもどす女に紐が付いていた

呼び物は悪代官の逮捕劇

亡母の名を呼べばこだまが返るだけ

とりあえず先生と呼ぶことにする

過去恋し呼んでも木霊かえらない

手の届く場所にながら妻を呼ぶ

芋満月亡母の呼び声聞こえます

呼んだのに返事をしない僕の妻

オイと呼ばれハイと答えて半世紀

ひとり居の風呂で受話器が呼んでいる

余裕出来それから軌道狂いだす

考える余裕もなくて子をたたく

試験場右も左も余裕見せ

死ぬことをみつけ余裕ができてきた

よそ目には余裕と見える暮らしぶり

余裕ある時は料理の具をふやす

金も欲しい余裕もほしい五連休

百歳人生まだ余裕だね飛んでいる

ゴールデンウィーク陽気ゴミの山

川柳塔おとり

上田

俊路報

ゆき代

友子

孝子

清子

荒介

山康子

よしえ

次男

節子

天雀

喜美子

秋草

和歌子

一夫

和枝

瑞枝

明美

御前

幸子

ちよ子

智子

睦子

玲子

小生

上田

俊路報

ゆき代

友子

孝子

清子

静枝

幸次郎

古里は包みきれない愛くれる
忍の字を包んだ紐が弱くなる
法要にしびれるのきれるほど包む
袖の下包み裏門から入る

お祝いの包みへ義理も入れておく
子は育つ家族の愛に包まれて
いつだって無言で包む人が好き
オブラートに包むのも苦い粉

老い包む色は明るい方を選ぶ
災いは海に流して福を抱く
災いになるから口を開かない
災いへ掛けた保険が物を言う

不用意な口が災い連れてくる
お隣の火事で我が家は水びたし
海草もなんの因果か重油浴び
すべらせた口が人生変えさせる

災いを山ほど負わせ難流し
災いの予告朝から茶碗割れ
これくらいですんで良かったヒザ小僧
震災の瓦礫それでも陽はのぼる

天災は神の戒めかもしれぬ

翠洋会

柴田英壬子報

からかいすぎて猫に絨毯よこされる
拳手をして隠せず異議を言う若さ
右の手で握手左の手で謀反
うるさいが友に真の情け知る
いいやすい人でうるさくせかされる
出来もせぬ事を外野でゴチャゴチャと

登美 愛恵 野草 銀嶺 宏章 半畳 由多香 ひかり 艶子 黙光 風花 舍人 道子 せつ子 敬之介 伝住 みさを 芳子 俊路

口うるさい妻に寝込まれ昼の酒
お人好し内に帰ればうるさ型
階段を音も立てずに遅い夜
幽玄のむかしに戻す新能

小うるさい上司へラフな仕事する
遅かった子に恵まれた吹流し
遅い春三高追つた甲斐があり
罪にならぬ程度時々手をよこす

まだ欲があつて手の鳴る方へ行く
電気代たためて世の中闇になる
キャンパスに喜寿と思えぬ野心作
お薬もきくのが遅い頑固者

言いすぎてたちまち闇に囲まれる
洗つても落ちぬ両手のこの染みよ
次の手はとくに打つてある余裕
手のひらの虹がなかなか絵にならぬ

反主流閥將軍を盛り立てる
プラス思考閥と上手に手をつなぐ
その先は闇なり弥陀の手にすがる
手の届くところにおいて見つからぬ

シャカシャカとラッシュアワーのウォークマン
五月闇ことさら深くなる祈り
一寸先の闇へ小石を投げてみる
手の届くところにあるのに呼んでいる

富柳会 池 森子報

名もなくて貧しく円く母が居る
母さんの気ままはとて小きなこと
方円の器しだい水心

絹子 綾子 会美 靖巳 英壬子 志華子 周信 喜美子 凡子 東雲 光子 義 さと美 佳秋 宣司 蛙 正雄 澄子 希久子 千歩 恭昌 みつ子 楓楽 鬼遊

どんどんと歩けば悩み消えていた
円満は嘘も隠しもせぬ家庭
円い輪の中で心を遊ばせる
耐えるだけ耐えた涙が美しい

春爛漫負けじと上げた消費税
長々と影に甘えて生き延びる
どんどんと茶髪も混じる村祭り
今黄門テロを殲滅無辜救う

長い道仏や鬼になる夫婦
わたしにも一つだけある泣き黒子
真っ直ぐの道を歩いて来て迷い
円周を一巡すれば晴れた空

死角から伸びてくるのはきつと悪
慣れたのか少し汚れたランドセル
曖昧を串刺しにする一本気
花野からどんどん遠くなるわたし

ブクブク生れた泡は空を恋い

川柳藤井寺

高田美代子報

余生とは聞けば返事はボランティア
主婦という二十四時間ボランティア
気配りの届いた人に助けられ
生き甲斐を求めて走るボランティア

ボランティア仮設の人と友になる
砂漠の地肥やす緑を植えに行く
今日だけは天使に見えるボランティア
急ぐようでゆるゆる歩く太郎冠者

こぶし咲く汽車はゆるゆる無人駅
おさがりはゆるゆるだった兄の靴

昭子 智久 紅紫朗 花梢 (伊) 勇 文子 トシエ (田) 勇 昭水 登子 鐘造 絹歌 美代子 悦子 欣之 勝子 恒雄 和子 キミ子 三夫 三郎 絹歌 和樹 宗一 侑子 悦子

ゆるゆるといこう人生長い道
ゆるゆるに伸ばし鎖は放さない
連休明けゆるんだネジを巻き直す
そばに居る妻が抱いてる火を知らず
馬耳東風 大物なのか鈍いのか
鈍くても悲しいことはたとある
鈍くても銭にかけてはすばしい
辞表の裏鈍い社長は読み切れぬ
別れた心が鈍る子の寝顔
夫婦そろって鈍感で睦ましい
どんくさい事をもうらに見抜かれる
財産をゆずつてからは鈍くなる
海鳴りが鈍い男をかきたてる
ふかふかの椅子が良心鈍らせる
傍観者の位置で瞳が鈍くなる
反応の鈍さ お国も痴ホウ症
このままでゆく和日本縮みそう

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

利武 美房 昭子 桂子 志洋 扶美代 智久 修六 史郎 吸江 六点 敦子 花梢 かつみ 美代子 一屯 みのる 凡々子 井蛙 しげる 大吾 黙人 ツネ 北歩 あかり アサ 生恵子

花びらを包んだ拳そつと開け
散りだした花びら敷いて花の宴
雨降って流すに惜しき花筏
花びらを泥から掬うしたたかさ
花びらが散ってしまつて厚化粧
また逢えは許してしまふ花の芯
花びらを散らしたくなる嫉妬心
カルメラ焼き余生に夢を老童子
悪役は憎まれながら拍手され
少年の画紙にふくらむチューリップ
妻も子も知らないネガが胸にある
月見草未練の駅に咲き乱れ

尼崎尾浜川柳会

前田いわお

哲郎 隼人 柳々 順三 隆樹 岳水 一花 花匠 龍人 島叶 五楽庵 鈴 いわお 向西 正治 勇次郎 年代 ハツエ 満寿蔵 江美 まさ 一閑 澄子 石舟 十四郎 昌子

バーゲンの女ヒップが揺れている
留守電に嘘を教えたのは貴方
プランコを片手で揺らし本を読む
川柳高知 川竹 松風報
澄み切った空に煩惱すい込まれ
深呼吸空の無限も我のもの
さよならを風に押されて絶つ未練
ほころびを繕う母が側に居る
旅人の目にはのどかな千枚田
日記帳伏せ字を残す青春譜
二三日ためた日記に天気書く
みかんの花咲いて空気の甘い声
ウインドを横目に妻の甘い声
甘党の店で肩身を狭くする
甘い声大の男を料理する
身についた善意余生が美しい
善人を騙し易いというサギ師
善人が今日も貧乏続けてる
さわやかな気分献血車を降りる
善人の仮面が日々に重くなる
善人の顔が楯の中にある

京都塔の会

松川

杜的報

弘治 鹿太 紫香 菊野 みのり 春枝 千恵子 有佳 幸泉 悦子 孝雄 快風 竹萌 子龍 京風 佳風 朱坊 松風 波留吉 吉之助 百合子 女

泣くこともたびたびあった夫の乱
 不要です喪服の背なに慰めは
 伊豆伊東三日にあけず揺れている
 愛のシグナルたびたび放つ恋遊び
 花束に勝るあなたの愛がある
 たびたびは来ないと言った福の神
 金運に縁なし我が家子沢山
 赤提灯にたびたび悩み捨てに行く
 耳よりな金運がきた異だった
 仲人は不要だ二人に愛がある
 金運はないが幸せ神がくれ
 金運はついてまわるとあぐらかき
 失敗の花を摘み摘みきた小道
 金運が向いてこの先恐ろしい
 ひな鳥を捨てる親などありはせぬ
 とときめきをたびたび貰う恋をして
 目に見えぬ壁にたびたびぶち当る
 お節介不要二人の四畳半
 助っ人は不要自分の足で立つ
 金運に恵まれ余裕ある笑い
 花束に思いを寄せる愛一途
 努力して金運つかんだように言う
 不要品の一歩手前で生きてます

川柳ねやがわ

江口

睦子 陸子 石花菜 しみ子 節よしえ 富枝 明美 御前 孝恵 ひさ子 信子 克枝 一京 妻子 螢 かつみ 勝見 帆雀 仙岳 幸子 弘朗 猿杵 度報 静江 時弘 順三 勇太郎

大の字になって優しい寝言いう
 真っ直ぐな針と糸です君と僕
 釣り合いをとって待針うつ裏地
 足して割りうまく収める処世術
 天秤が絶えず揺れます胸の底
 夕焼の山に釣り合う寺の鐘
 止まったらこける自転車漕ぎ続け
 我慢しな耐えろとくくの山が言う
 鏡に映る顔は我慢を越えている
 我慢強いのか頑固か判らないお人
 仮設暮し何時まで我慢さす気だろ
 八起き目の晴れを信じている我慢
 我慢強い母の残した火吹竹
 社のためと言う先輩の若い声
 先輩に火の酒恋の酒があり
 先輩の彼女にお茶をさそわれる
 先輩を超えると肩が重くなる
 先輩に教えてあげるOA機
 先輩の知らない穴場持っている
 先輩の失敗談も活かす知恵
 沖繩の嘆きを他所に平和ぼけ
 呆けたなと自分でわかるとかのボケ
 病院で二ツや三ツおどかされ
 蹴いた石を思わず叱ってる
 閉山を知らぬ桜が乱れ咲く
 父さんの我慢でいつもうまくいき

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

小路 小西 重三 あやめ とし子 仁清 一風 礫 亜成 ルイ子 朝子 たもつ 頂留子 冬葉 英子 弘一 恵子 光作 庸佑 波吉 文秋 博泉 三郎 黎之助 度 正三郎

定年後小さな歪み持つ夫婦
 息子の病巣より小さく祈る日々
 親しすぎ時々風が吹き抜ける
 悪友と呼び親友が吹いている
 親しすぎあいさつ抜き電話口
 回診に病室の空気が硬くなる
 後継ぎを得意回りに連れ行く
 回廊の闇で仏の声を聞く
 人生の四つ辻に立ち迷う
 辻々の惨劇見た地蔵尊
 事故起こる辻は何時でも決つて
 やるときはやらねばならぬ辻の風
 別姓でないが骨は一心寺
 好きなのに逃げられ厭なのに追われ
 夢の色あせてきたので絵の具買
 直ぐ吠える男を三杯酔に漬ける
 脳死は人の死 青葉に雨しきり
 万緑の重さに沈む白い杖

オール川柳大賞決まる

第2回オール川柳賞記念大会は、5月25日
 三井アーバンホテル大阪ベイトワで開かれ
 オール川柳賞各賞が決定した。大賞は山倉洋
 子（新潟県）、新人奨励賞は境一子（大阪府）
 の両氏。佳作に本社同人の政岡日枝子さん、
 川上富湖さんが入選した。

また、記念大会では、小島蘭幸・河内天笑
 両氏が特選に選ばれた。

萬的 登代子 武庫坊 ただし 悟郎 英子 吉太郎 一笛 明光 重人 知香子 柳宏子 落児 しげお きく子 博史

■各地句会だより

横浜あおば川柳会

菱田満秋

あおば川柳会是一般の句会というよりは、川柳教室のようなものです。なにしろ平成六年横浜市に新しく誕生した、青葉区の生涯学習の一つの試みとして、翌年六月に開催した川柳初心者教室の受講者の中から、引続き川柳を勉強したいという人たちが十四、五人を集めて作られた出来たてはやはやの川柳会です。川柳雑誌社時代には東京支部というのがあったようですが、今はその面影もなく、川柳雑誌に関東地方から出句している同人は、私を含めてやっと四人です。平成六年同人に復帰したその年に路郎賞を頂いた席で、西尾栗主幹に神奈川支部を期待していると言われましたが、その時は冗談きついなあと思っていましたもの、最近はまだに川柳塔社横浜支部さながらの状況を呈しております。

昨年も青葉区図書館の好意により、一回目の初心者教室を開き、また新しい会員を得て、

現在は賛助会員を含めると四十人を超え、月例句会にも三十人以上が出席しております。

会員の内訳は、青葉区の住民が七割を占めていて地域の趣味の会の域を出ませんが、八割が女性であることのほか、若い方も多くて前途洋々の観があります。

初心者への指導を重点にした句会運営を心掛けておりますが、正しい川柳を広めたいという私の気持ちに賛同する、柳友数人が積極的



となく句会を持つことが出来て、私は幸せ者だなあと感謝しております。

句会は宿題二題、席題一題で、選句の間は初心者向けのお話をするようにして多読多作を奨励し、それを実現させるため川柳塔誌の購読を積極的に勧めております。句会は勉強と交流の場であり、自分自身の川柳は雑詠によって価値が決まると思っておりますので、誌友となった会員には水煙抄、茴香の花、渺湖抄欄等に投句をうながし、二十名以上の会員の名が連なるまでになりました。

しかしまだ初心者だからと、他所の句会を覗く者が少なく、井の中の蛙とならぬように誘いあわせて他の会へ引っぱり出そうと思っております。

さらに青葉区生涯学習係の応援を得て、今年また第三回目の初心者教室が、青葉区図書館との共催で、五・六月に開かれることになっております。路郎先生のご遺志に添い、栗前主幹のご期待に、あおば川柳会の発展をもつて報いたいと思っております。またこの小さな句会にもかかわらず、薫風主幹をはじめ川柳塔社事務局の応援にこの場で御礼申し上げます。川柳塔系の句会としてお仲間入りをした、「あおば川柳会」を今後も宜しく願っています。



坂本仙吉郎さんを偲ぶ

吐^は田^だ公^{きん}一^{いち}

は舌を巻く。

NHK文化センターの川柳入門講座で、橋高薫風先生のご薫陶を受けられた時、八十歳をすでに超えておられ、旭区に在住のご縁で、故川口弘生氏が主宰なさっておられた、城北川柳会へ所属されたからのご縁である。

建築畑一筋で来られた氏は、豪放磊落な方で、句会の席上でもじっと皆の意見を聞きながら、最後に貴重なご意見を述べられていたことを思い出す。

氏の旅行好きはみなのお知悉するところで、その足跡は全国津々浦々に及び、城北川柳会の吟行の際も、その健脚さにはしばしば驚かされた私達である。一九八九年一月に編まれた氏の米寿を記念されての、句集『ふたり旅』の題名からしても、その片鱗が窺えと共、氏のお人柄を余すところなく伝えて下さる貴重な一巻でもある。と同時にこの句集を續くと、齢八十歳を超えてからの手習いの作とは思えない、見事な句で集大成されているのに

早立ちの旅はお茶漬けかきこんで
たどり来てこれがと祖谷のかずら橋
手を打てば応え集まる鯛の浦

足摺は海荒れてこそ絵にもなり

また氏は大の酒好きのようだが、血圧が高かったせいか晩年は自重しておられたようだ。自重してビール一本分けて飲み

木曾谷の地酒うれしい七笑

旅好きに地酒の瓶の数が増え
高山に恐い名の酒鬼.ころし

秋深し酒仙の詩をば思い出し

第一線を退かれてからの旅三昧も、やはり
几帳面なご性格は

旅日記五日もすれば家のこと

城北川柳会にとって今年は凶事と慶事が隣り
合わせのよう。と申しますのは、この二月
二十七日に会員の今西静子さんを亡くし、今
また仙吉郎さんを亡くしたことで、この十月

に発刊予定をして居ります『城北川柳』第六集にも、是非ご参加いただきたかったからである。この刊行を目前にお亡くなりになられたことは全く残念でならない。

城北川柳会の吟行でも、氏は

吟行は梅雨の晴れ間の菖蒲園

とそれはそれは会員諸氏と楽しんで居られた姿が思い浮ぶ。

うから(家族)を大切にされた氏は

指切りの約束孫へ旅土産

その味をいまだに二人で話し合い

ああこれがアベック写真の最後かも

『ふたり旅』を開けば、昭和四十九年六月に奥様と二人して、阿寒湖で撮られた写真が眼を射る。

足弱をいたわり足らぬ今を詫び

目覚めても寝息いびきも聞かれなく
どこへ行くにも手を取り合つて二人連

享年九十四歳。齢に不足はないとはいっても、の、同じ年代に近い城北川柳会諸氏にとって、氏のご逝去は胸を打つ。

先達の亡妻が手をひく黄泉旅 公一

合掌



稲葉眞郎さんを偲ぶ

湯 浅 馬 洗

本年も無事にと思ふ年賀状

苦も楽も支えになって五十年

今年二月金婚式 五月十一日、八十二歳の

誕生日。お喜びのお顔を想像出来ます。お別れ会で奥様のお言葉に、内輪誉めで恐縮と断つて「優しく穏やかで誠実。行雲流水のような人柄で過去四十年一度も荒い声を聞かなかった」と。句会で接した眞郎さんを私なりの表現をすれば、気負ったところがなく、しかも気取らない生き方に親しみが持て、「兄貴」と呼びたい方でした。

五月二十日、趣味の囲碁クラブに行かれる途中、脳出血で倒れられて、救急入院の治療中に肺炎併発により、二十八日早朝お亡くなりになりました。二十九日のお別れ会は、生前からのご希望であった、無宗教で営まれ、遺影と檜、献花台という清楚な会場内で遺影の眞郎さんと語り合える設えでした。

川柳塔社から橘高薫風主幹、ほたる川柳同

好会から井上直次会長はじめ、十数人の柳友の方々が白菊を一人ひとり献花してお別れを致しました。

尊厳死 自然葬と消えるのみ

なけなしの相続思ふ齡となり

眞郎さんの川柳歴は、はっきり分かりませんが、古川柳がお好きだったように思います。朝日カルチャー川柳で勉強され、ほたる川柳同好会には結成の早期からの大先輩でした。ある時、川柳の定型が気になるという話から私達戦中派の中で軍隊の洗礼を受けた体臭と思っていると話し合ったことがありました。

言葉だけの聖戦が火を噴いた日

戦友を励ます電話大晦日

五月十三日の句会を思い出すままに書くとき、席題「親しい」の互選の司会を私がした時に「さついいことって言われて親しそう」（博史）への眞郎さんの句評が「長年の夫婦でしよ」和真面目な顔でおっしゃったことが印象的で

した。句会が終って「親しい友また飯と言ふ処世術」の私の句に「あの句のまた飯の処世術はうまく言えましたなあ、いい加減な人が多い世の中ですよ」と、体験を通しての評を頂いて感激。川柳塔誌の眞郎さんの句に：

エリート猪突猛進とばかり

自分史を貫つて空し我が思い

お別れ会の奥様によると、旅行・古代史・川柳・囲碁・庭仕事の趣味を楽しまれ、大和銀行・三高時代のお友達や戦友会の方々とのお付き合いや、お子様お孫様などの日々充実した生活であったことを聞いて、羨ましい限りです。

メモしたら安心をしてまた忘れ

新学期始まり我が家夏休み

春毎に孫は大人に見えてくる

同窓会自分の座の席探す

咲いた小菊色とりどりに話し合ふ

甲 吟

無口なる人でありしが今日の旅

眞郎と静かに呼名耳朶にあり

五年ほど眞郎さんをお手本に

はたる会 高所の見物なさいませ

太陽の流れに沿った眞郎忌

あじさい忌眞一筋八十二

心から冥福を祈ります。

薫風 直次 博史 英子 明光 馬洗

柳界展望

部は鎌田知子の各氏

★創立四十周年記念・時の

川柳交歓川柳大会は5月11

日、神戸市立福祉センター

婦人会館で開かれた。本社

関係では、同人の小島蘭幸

氏が兵庫県議会議長賞、林

荒介氏が神戸市議会議長賞

を獲得、次の二氏が秀句賞

に輝いた。

花道は知らず書齋に閉じ

こもる 奥田みつ子

稲妻に打たれたことのある

幹だ 林 荒介

★川柳北上500号記念誌

上全国大会は次の要項で開

かれる。課題は「続く」で

1人2句、応募受付期間は

7月1日～8月31日、投句

料1000円、応募先は024

北上市上野町1-15-5高

橋春造方・大会実行委員会

★第21回茗人賞川柳大会は

8月24日午前10時半から鳥

取市白兔会館で開く。兼題

と選者は、策吉岡美房▽

爪宮西弥生▽眠る小島

蘭幸▽穴ニれいじ▽馴れ

る小林由多香▽糊政岡

日枝子▽鉢石谷忠良。各

題2句、会費2000円

★第4回さんま川柳全国誌

上大会は、川柳けせんぬま

吟社の主催により次の要項

で行われる。課題は「さん

ま、はがき1枚に2句(1

人2枚まで)、住所・氏名・

電話と氏名、募集を知った

柳誌名を付記、7月31日ま

でに〒988気仙沼市九条49

4-15・谷幸四郎方「さん

ま川柳係」へ。入賞60

句に生鮮さんま一箱が贈呈

される。

★第1回展望賞を発表する

川柳展望全国大会は、8月

24日午前10時半から神戸市

垂水区東舞子町の舞子ビラ

で開く。参加費2000円

宿題と選者は次のとおり。

勝つ高瀬霜石▽悪くな

はられいこ▽頭佐藤岳俊

▽恩金築雨学▽乗る若

草はじめ自由吟▽窪田久

美・石森騎久夫・高杉鬼遊

斎藤大雄・森中恵美子・天

根夢草、席題は新家完司で

各題2句、午後零時半締切

★川柳宮城野社は9月28日

午前9時半から仙台ガール

ンパレスで創立50周年記念

川柳大会を開く。宿題と選

者は、続く佐藤岳俊▽テ

ープ工藤寿久▽行方猿

田寒坊▽屋根黒沢かし

▽耳今野空白▽結ぶ斎

藤大雄▽時代大野風柳▽

夢森中恵美子▽もくもく

寺尾俊平▽虫片柳哲郎

「各題2句」で、席題はち

ば東北子、会費4000円

▽出版版△

■川柳憶い出集「明朗」(藤

井明朗著・A5判40頁)作

品集と写真集で構成

■合同句集「集い」(三幸

川柳教室開講二百回記念・

B6判386頁)188人

の各10句を収録

■川柳句集「続・みかん船」

(大矢十郎著・B6判18

4頁)還暦句集「みかん船」

以後、平成7年死去までの

句を女婚の川上大輪氏が収

録し、印刷・製本して発行

した手づくり句集

▼計報▲

■坂本仙吉郎氏(同人・大

阪市)5月15日、老衰のた

め死去、95歳

■稲葉真郎氏(同人・豊中

市)は5月28日、病気のた

め死去、82歳

■寺澤みどりさん(同人・

米子市)は6月8日、病氣

のため死去、73歳

▽訂正△

■6月号P34下段7行目

「桜井千季」↓「桜井千秀」

急 告

本社理事長小出智子さんは 平成九年六月二十二日午前二時十一分
肝臓ガンのため 大阪市天王寺区湯川胃腸病院で逝去されました
葬儀は六月二十三日午後一時から大阪市生野区勝山南の乗願寺で営
まれました 喪主は夫小出常晴氏

法名 智光院浄誉妙重大姉 行年七十一歳

ここに急告申し上げ 生前のご交誼を感謝いたします

川 柳 塔 社

全日本川柳大会各賞決まる

第21回全日本川柳三重大会は6月8日、三重県総合文化センター・中ホールで開かれた。今回は各題秀句が2句ずつとなり、事前投句3題・当日出句4題、計7題について選句の結果、秀句13句が選ばれた。続いて、第2次選者によって各賞が決定、発表された。受賞句は次のとおり。

文部大臣奨励賞

神々のパレードを見た天の川

石川 板倉みのる

参議院議長賞

遠ざかる子の足音を信じよう

愛知 河原 房子

川柳大賞

鬼も蛇もみんなまあるくする民話

神奈川 斉藤よし一

全日本川柳大会賞

パレードの影絵に銃と角帽と
いくつもの波藍襷は動かない
波を背景に独裁者の右手
民話からもう情の太い糸
理想論流れの中で瘦せていく
水の底を水が流れている輪廻
太陽のない町飯の話する
太陽になるかも知れぬ子が生まれ
破らねばならぬ羽音が強くなる
ムツゴロウと昔ばなしをする漁港

奈良	東京	愛知	東京	大阪	神奈川	三重	三重	三重	鹿児島
阪本	おかの	澤	伊藤	前田	原田	伊藤	坂倉	奥野	橋本
高士	蓉子	啓司	正紀	咲二	順子	多恵	廣美	誠二	比呂

暑中お見舞申し上げます いずも川柳会

会長 尼 れいじ

事務局 〒693 出雲市松寄下町284

吉岡 きみえ 方

TEL (0853) 22-1068

本社 六月句会

六月九日(月)午後五時半

メゾンファッションセンター

近畿地方の梅雨入りが報じられた九日、午前中の風雨もようやく治まり、八十六名の出席により六月句会は定刻開催された。

はじめに同人三氏(稲葉真郎・寺澤みどり坂本仙吉郎)の計が告げられ、謹んで一分間の黙祷を捧げる。

河内天笑氏のお話は、奇しくも四先生の年忌が揃った本年の追悼句会への呼びかけから始まる。

路郎先生の三回忌追悼句会は昭和四十三年七月に光明寺にて催され、出席した思い出を語る。九十二名の出席、うち現在生存者二十二人と言つ。本年三回忌に当る葉先生には

八十五点という人生でありしよな

ほか八句当日の入選句があった。当時の川柳塔誌を読み返していると言つて忘れると言つ。月間賞は岩佐ダン吉氏(岸和田市)に輝く。

(司会)隆盛 (記名)月子・弥生

(受付)美房・弥生 清記・希久子

席題「虫」

土田欣之選

太陽の魔法に蝶がおどつて
腹の虫焼酎ばかり呑んでいる
定年近く毛虫次第に角がとれ
虫好きのボクで園でも人気者
虫籠と走る子がない塾だらな
素うどんで納得させた腹の虫
ふるさとのぬくみくわがたかぶと虫
老母さんはやさしい虫を飼っている
無人駅留守番させる虫の声
練習の虫に輝く打撃王
正確に時を知らせる腹の虫
ネックレスのあたりで遊んでる毛虫
消費税の分だけ蟻が荷を運ぶ
充電をしてくるか今宵鳴かぬ虫
出しぬけに虫が知らせる胸騒ぎ
丸虫が言う君丸くなりたまえ
矢印の通りに歩くかたつむり
虫つかぬ葉つ葉は買わぬおかささん
垂り換えの駅でホタルの舞を見る
だんご虫集め大将になっている
父さんが掴めぬ虫を子が掴む
悪い虫大事に一匹飼っている
みの虫の落ちる辺りに愛がある
夜動く虫と仲よく住んでいる
好きと書き泣き虫とかくラブレター
虫干しの形見の品は七回忌
虫たちの嘆きを聞いているシヨベル

信子 洞庵 たもつ 一風 風雲児 笛生 朝子 勇太 靖巳 悟郎 天笑 シマ子 隆盛 二南 ダン吉 美代子 月子 美代子 冬葉 紫香 弘一 森子 東雲 寿子 隆盛 鹿太

煮ても焼いても食えない虫を身の裡に
伏兵がかくれているそう蜂が舞う
月の出を合図に虫が恋の唄
蟬七年耐えて子孫を残すだけ
疑いの深さを探る虫眼鏡

佳

虫ビンにいのち託して並ぶ虫
梅雨ごもり老いの二人は本の虫
白いとんばにお墓の位置を知らせよう
虫のいい話とうたたねばかり梅雨
虫けらの意地を束ねたストライキ

人

蝶ひらり夢ふわり私の詩

地

螢火のロマン二人の距離がとれ

天

一匹の蚊のためにされている座禪

軸

一寸の虫に滾っている命

兼題「脳」

吉川寿美選

足腰を鍛えて脳を忘れ勝ち
使わなない脳があくびをして困る
優秀な頭脳が悪いことをする
脳からの指令がなくなつて古稀
脳低下かなわぬ夢を閉じ込める
ロボットにそのうち出来る脳細胞
脳細胞半減度忘ればかりする
一言で改革できる軽い脳

寿美 武庫坊 正雄 あやめ 二南 愛論 シマ子 英子 森子 大輪 桂香 典子 弥生 欣之 正嗣 正治 剛治 一風 寿子 佳秋 柳宏子 女

あせつたらあかんと脳が囁いた
輪切りみてこれが私の脳ですか
どたん場で脳が萎えてる木偶の坊
脳錆びていくらか人間丸くなる
本読んで脳のすき間を埋めてます
錆びついた脳へベレー帽着せる
脳からの電波が少し遅すぎる
臓器売買やがて脳みそだって売る
失楽園脳のどこかが眠れない
錆びついているが脳死じゃないつもり
脳からの指令今夜は酔えません
隔世遺伝期待している孫の脳
脳みそがまたも私を裏切った
夢無限しばし脳ミソ遊ばせる
脳みそが熟れすぎたのか物忘れ
催眠術わたしの脳波弄ぶ
脳みそとは別で強気な河内弁
ベストセラー脳内革命昼寝中
臓器移植 脳死待つてるわけじゃない
頭脳ではハナドルきかぬ恋の道
もう逢えぬ人を脳裏にきざみつけ
脳を洗いに風に抱かれる刻が好き
友急死 脳天に降る寒い雨
疲れた脳とたたかっているペンよ
頭脳の解決即席ラーメン

佳

美房 保子 愛論 シマ子 富湖 典子 澄子 美房 月子 英子 寿美子 大輪 朝子 柳弘 萬弘 正雄 柳弘 靖巳 靖巳 いわゑ 太茂津 たす子 いわゑ 冬葉 狸村 絹子 とし子

抜群な頭脳で詐欺師やっている
ばんこつでよけりや脳死で差しあげる
人
あなたならどう答えます脳死論
地
脳裏すでに二十一世紀の構図
天
脳内革命残った春が甦る
軸
耳学の脳で転んではかりいる
兼題「スープ」
八十田 洞庵 選

しげお 満州 美代子 萬弘 章久 寿美 照子 金太 森子 寿美子 典子 萬弘 東雲 隆盛 鬼遊 楓楽 満州 萬弘 稚代 狸村

熱かったスープへ舌の先あわて
スープなど出るから期待してしまふ
コンソメのスープにうつつ髪おしゃれ
スープだけ飲んで微熱の床にいる
評判のスープで流行るラーメン屋
実だくさんのスープに貰う母の愛
即席のスープがうまい受験バスの
客にゆき固型スープと知らずはめ
デーサーヒススープの冷めぬ愛を受け
スープコトコト愛も煮つめる片手鍋
味噌汁でお口直しをしている妻
退院も間近のスープも濃ゆくする
何の反発朝のスープが水臭い
嫁が来ていろんなスープしてくる
ほな食べよスープはとくにさめている
キャンパ地の朝のスープは具がでかい
スープストック企業秘密は鍋の底
スープ鍋かきまぜながら人を恋う

佳

笛生 美房 絹子 房子 美代子 たす子 狸村 保子 高栄 寿美 月子 柳宏子 武庫坊 いわゑ 哲夫 正雄 正雄 正雄 シマ子 しげお 章久 月子 楓云児 いつふみ 鹿太 富湖

天

具沢山のスーブを嫌うきやしゃな方

満州

軸

スーブの本片手に持ったおきな妻

洞庵

兼題「ほめる」

福本英子選

写真うつり良いねとやたらほめられる

満津子

豚ほめてみたけど木には登らない

幸生

叱るよりほめてやる気を出してやる

螢

ほめるにも尺度が違ふ父と母

愛論

見込みないのでほめるだけほめておく

楓楽

ほめるから遠くへ飛んだブーメラン

森子

ほめるとこ探しがしている同居

千歩

ほめられて男はレジに立ちたがり

あやめ

ほめられたコスモス風によく靡く

鬼遊

ほめるのは切羽詰ってからにする

正雄

行間の隅でひとことほめてくれ

二南

先生にほめてもらたランドセル

寿子

梅干をほめるとラッキョまでくれる

笛生

器用だとほめて夫をこき使う

一步

人前で家内をほめたことはない

鹿太

だあーれもほめてくれないうたってる

金太

君はできるあれから光る子ども目

たず子

ほめようがなくてあんなは筋がよい

グン吉

ほめられているから仮面外せない

美房

仏さんになったとたんにほめられる

大輪

たんとほめ少し鞭打つ父の愛

典子

稲云児

稚代

散りぎわがよいと敵からほめられる

英壬子

基地ほめる基地で働く労働者

度

下心が見え透いているほめ言葉

萬的

ほめ言葉ばかりで挙式無事にすみ

笛生

ほめ上手ちゃんと手綱は握ってる

いわゑ

よう我慢したなと負けをほめられる

美代子

頑張りをはめてうれし絵馬も揺れ

重人

仁王様だってほめると笑い出す

富湖

ほめ過ぎるから翻るなど怒られる

文秋

人助けほめて賞状だけくれる

白溪子

美しくほめると花は華になる

森子

父親にほめてもらったことがある

岳人

女房の料理はほめてから食べる

落児

わからないからほめておく抽象画

正坊

美人でもないのに美人とは何だ

鬼遊

抱いている猫だけほめて行き過ぎる

絹子

ほめられてからはほめられることをする

しげお

ほめること知らない夫の飯を炊く

人

かかわりもないので全てほめておく

地

口封じだったううべのほめ言葉

天

うっかりとほめたら大に手を噛まれ

軸

兼題「やっぱり」

田中正坊選

出会いから今もやっぱり好きになひと

満津子

長電話やっぱり最後愚痴になる

剛治

危機一髪 やっぱり神は信じよう

清史

回り道してもやっぱり君の店

稚代

見えないがやっぱりこわい活断層

狸村

栄転にやっぱり動く金づつみ

稲云児

通夜の席やっぱり謎の女が来た

典子

多数派工作やっぱり裏で動く金

萬的

やっぱりとまさかの中にある噂

美代子

欠席の理由やっぱり風邪にする

あやめ

さすが名水やっぱりお茶もコーヒーも

保州

面影がやっぱり皺の奥にある

太茂津

胸さわぎやはり事実と一致する

勇太

なんやかんや言うてもやはり身がかわい

隆盛

やっぱりと思いたくない親心

たもつ

よく聞けばやっぱりあった裏の裏

頂留子

父の日の希望やっぱり酒にする

重人

故郷はやっぱり温い顔がある

保州

母の味やっぱりいいな里帰り

澄子

やっぱりと言われたくない嫁の意地

一風

少しならと医者もやっぱりいける口

柳宏子

俵せはやっぱりここに茶漬け飯

靖巳

父の日はやっぱり酒がよい国だ

絹子

あの時の酒がやっぱり効いてきた

昭子

死に水はやっぱり妻に頼んどく

月子

最後にはやっぱり金がものを言う

一歩

切り札のウイंकやはり効いたよう

たもつ

父ちゃんがやっぱり好きと糸電話

隆盛

悲しみの時もやっぱり食べて眠る
酔ったとてやっぱり寂し友の通夜
献体はやっぱり脳死ではできぬ
夕茜やっぱりみなも淋しいか
やわらちゃんやっぱり女化粧する

故郷はやつぱりいい星が出る女房がやつぱりええと言つておく氣がつけば父の背中を追つてゐた母の來た道をやつぱり歩いてゐる密約がやつぱりあつた核兵器

次の世もやっぱり彼と手をつなぐ

泣きに行くところはやっぱり橋にする

振り向けばやっぱり味方妻ひとり

あの人も僕もやっぱり花粉症

兼題「鳥」

橘高薰風選

鴉鳴き祈りつづけた日もあった
人情も変ったなあと渡り鳥
飛ぶ鳥を落した人が被告席
鳥の声はじめに書いて旅だより
渡り鳥空のぬくみをおぼえてる
病窓を開けさす鳥が今朝もくる
押売りが来ても愛想よい鸚鵡
鳴く鳥も鳴かない鳥も飼っている

昭子 恭昌 楓樂 みつ子 武庫坊

美楓大落金
房樂輪児太

い
わ
る

紫香

希久子

正坊

風選

照子

正電

一步

稚代

章久

白溪子

7
—
—

自由にもなりたし怖しかこの鳥
鳩の歩と合わせて孫が歩き出す
インコ二羽手のりにしてる寂しがり
かわせみの雄がプレゼントをくわえ
信号が青になると鳥が啼く

小鳥屋で生まれて飛んだことがない
鳥かごの中の自由も捨て難い
鳥一羽書き添え花は赤くもえ
喪の家の九官鳥の置き処

いわゑ
希久子
信子
英壬子
大輪

大輪 希久子 絹子 寿美

第二回大砂丘川柳大会

とき 7月13日(日) 午前11時開場

ところ 砂丘センター（鳥取県福部村）

Tel 085712211

お話 「川柳いろいろ」 河内月子

題と選者（各題2句・席題なし）

「心かけ」

「ありったけ」

近所

「一」

「あぐろ」

「もの好き」

破丘

12時30分（欠席投合拝辞）

句会費	2000円	(発表誌呈)
懇見会費	2000円	

懇親会費 2000円

主催 ふくべ川柳会

愚痴られてインコが首を曲げたまま
いつふみ
人
千歩
放埒のはてにカモメになったとき
地
英壬子
手の中の切符が青い鳥になる
天
ダン吉
基地は移転カラスは黒いままにいる
軸
時を告げる雄鶏の覇気すでに失せ
薫風

同人特集

海百句

平成六年～平成八年
同人吟から 編集部

寝転ぶ癖の僕に海上雲遠し
そも何のうれいぞ海の鉛色

勅題
麻生 路郎
麻生 葭乃

初日の出海の玉ゆえ滴るか
息吹たつ海の光に掌を合わす
海山を越えて絆をたしかめに
ブルでは泳げ海では泳げない
少年が海を見つめてばかりいる
島の宿 海に入る日のおもてなし
荒海を蹴って命の笛を吹く
海峡を越えて旅人蝶になる
沖縄の海へ飛び立て千羽鶴
先ず海へ一札をして魚釣る
砂浜の焚火紅さす海女の肌

橋高 薫風
土橋 螢
中井 ゆき
梶本 路児
岩佐 ダン吉
木村 貴代子
最上 和枝
光井 玲子
小玉 満江
新家 完司
椎江 清芳

人を恋う角度に炎える海がある
瀬戸風いで素顔の海がやわらかい
大海の真つ只中に見た太古
海には海の風の掟があるのです
青い海ここは平和な魚泳ぐ
瀬戸の霧 島の暮しをひた隠す
海は洋々ひと山なんぼのうしろ指
海を見るだけに岬の先に立ち
海の絵に好きな群青惜しまない
海浜にときめきがある水着ショー
海暮れて佳境に入る薪能

松原 寿子
時広 一路
都倉 求芽
波多野五楽庵
阿萬 萬的
月原 宵明
千葉 風樹
菱田 満秋
石谷 美恵子
寺井 東雲
佐治 千加子

海鳴りに強く生きろと諭される
 散骨よ海鳴り遠く遠く聞く
 落陽に大海原はたぎりそう
 海鳴りは慟哭 亡兄は若かった
 日本海わが庭にして大ジョッキ
 相談事を提げて海辺に立っている
 本当の海に溺れた負けいくさ
 白鳥が来てしばらくの海の彩
 鳴き砂が鳴き止みそうな海の荒れ
 聞き上手なぐさめ上手 海は母
 父母逝きてふるさとの海遠くなる
 大海原 不意に故人を思い出す
 子の海の灯台守で終りたい
 瀬戸の浜 金波銀波が寄せて春
 海の底まで春の野は続いている
 妻の名を忘れてしまふエーゲ海
 春の海 竜神さんに逢いに行く
 山ひとつ越えたら母の海が待つ
 決断へ男の海が満ちて来る
 沈黙の海で互いを悟り合う

米田 恭昌
 山本 希久子
 榎山 隆盛
 奥田 みつ子
 白根 ふみ
 八木 千代
 小林 妻子
 桑原 道夫
 佐々木 鳳笙
 海老池 洋
 山本 義子
 森川 まさお
 野坂 なみ
 木村 あきら
 鷺見 正子
 板尾 岳人
 羽津川 公乃
 石尾 かつ乃
 吉岡 美房
 米田 幸子

水平線 背負う夕日が温かい
 群にいて海の広さが判らない
 泣きに來た海の深さは測れない
 十四番目の旗日に決まった“海の日”
 海で泳いだ記憶も遠いものになる
 街なかのことは知らない海の蒼
 いのちとははかなきものよ海の蝶
 ふところの深い海にも怒濤抱く
 秋の夕陽ぼんとおちる瀬戸の海
 病棟の松の向こうは瀬戸の海
 日本海が唸って冬がやってくる
 ともかくも海へ海へと急ぐ水
 満ち引きはしない自分の海がある
 ムルロアアの海から逃げた深海魚
 荒海を漂う苦節五十年
 海光るわが逃げ道を見つけたり
 充電の海へ大きな呼吸する
 ときたまに海見て心広げてる
 海の青 手にとるように讃岐富士
 五十年待った南海散華の地

井上 喜醉
 赤川 菊野
 稲本 凡子
 川村 映輝
 小島 蘭幸
 田中 輝子
 田中 正坊
 八十田 洞庵
 近藤 豊子
 新川 マサエ
 田中 亜弥
 小砂 白汀
 野村 京子
 岩崎 みさ江
 津守 柳伸
 吉田 あずき
 大橋 政良
 島田 昭治
 安永 暁子
 秋元 てる

冬の海は男で白く絶叫す

四海波静かなれかし初光

失ったもの多く遠くの海光る

養殖魚 海の恐ろしさを知らず

春の海 男は沖へ出る決意

慣れた海 三角波に油断する

山を消し海を汚して開発か

青春の海で彷徨う難波船

風化したいくさにグアム海碧し

生かされた幸せ七つの海を訪う

ムルロアの叫びか知れぬ荒い波

クレヨン海いつまでも穏やかに

母の海いつもないでるさざ波に

満ち潮の激しき音を聴いている

太陽を押し上げ海の朝が来る

壊れそうな球形 海を見ている

決心がついたか海がないで来た

掌の中にひとりの海を握っている

陽を生んだ数ほど海は強くなる

林 瑞枝

矢内 寿恵子

永田 俊子

荻野 鮫虎狼

田中 透太

玉置 当代

古谷 節夫

小寺 花峯

門谷 たず子

板東 倫子

酒井 一壺

藤解 静風

津村 八重子

高須賀 金太

梅田 宣司

田中 薫

野口 節子

政岡 日枝子

寺澤 みど里

桜五分 御崎の海は潮干狩り

広い海 愛に気付いた日の鼓動

訃報聞く涙を見せぬ海が荒れ

目を逸らさないと魅入られそうな海

海が好き海は男の貌作る

日本海静かな夜もたまにある

まだ舟も出ぬ間の海に願いごと

夏の海 子供の数が少なすぎ

海へ向く先輩の墓うれしそう

海の日波止場へ行つて船を見る

いろはから出直す海の音優し

群衆の海に溺れている個性

オーイオーイと流されてゆく月の海

花びらのような月見る海の家

海の日夕日 天保山で見てる

海の夕日と只ひたすらに歩いた日

ゆりかもめと夜明けの海で逢うつもり

沖縄の海から届く鎮魂歌

海からの風に水仙さからわす

植村 喜代

森田 文

西川 和子

堀畑 靖子

春城 武庫坊

石垣 花子

栗谷 春子

岩本 笑子

林野 甦光

指宿 千枝子

小野 克枝

三宅 保州

亀岡 哲子

山崎 君子

町田 達子

西口 いわゑ

福井 桂香

上田 俊路

正本 水客

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

〒725 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

山	古	古	岩	藤	古	石	岡	森	岩	時	小
内	田	田	本	解	谷	原	本	井	本	広	島
ほ	房	比	太	文	静	節	淑	清	菁	笑	一
か	子	呂	虚	晴	風	夫	子	水	居	子	路
同		子									幸

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

坂上 高栄
小糸 昭子
岸野 あやめ
喜多 佐津乃
籠島 恵子
川久保 睦子
神夏磯 典子
叶岡 史風
柏木 八重
太田 とし子
上田 柳影
上田 登美子
井上 白峰
池田 寿美子

吐田 公一
森 扇帆
松本 ただし
松岡 久留美
町田 達子
本間 満津子
板東 倫子
長谷川 春蘭
野呂 右近
野村 美代子
中田 あい子
高橋 一枝
高杉 千歩
鈴木 政子
鈴木 トヨ子

連絡先 〒665-01

加古川市平岡町新在家2006-8 吐田 公一方

電話 0794-22-3681

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井 千秀

暑中お見舞い

申し上げます

京都塔の会

松川杜的	都倉求芽	松川芳子	渡辺圭坊	山海友熙	高沢栄	山田葉子	本荘福子
------	------	------	------	------	-----	------	------

暑中お見舞い

申し上げます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉	原さよ子	島崎富志子	古野ひで	田中文時	寺田甚一	林春恵	村垣鹿太郎	井齋一齋	内田一弥	長谷川呂万	善野盛之	堂免路子	加藤基	原苑子	松村松風	楊井二南	藪野ケイ子	田口穰一	山岡孝三	高須賀金太	芳地狸村
-------	------	-------	------	------	------	-----	-------	------	------	-------	------	------	-----	-----	------	------	-------	------	------	-------	------

暑中お見舞い

申し上げます

川柳クラブ

わたの花

高杉鬼遊	川崎友甫	服部春子	平川幸枝	松葉君江	田中トシエ	二瓶道子	榎山隆盛	生島ますみ	吉村一風	内田龍	高橋明子	大内朝子	村上剛治	村上ミツ子	神原まさと	中島春江	西村幸子	奥田けいこ	山本宏	八倉知佐子	乾美代子	花柳吉吾進	篠原いつふみ	井尻民子	砂田八寿子	與田明
------	------	------	------	------	-------	------	------	-------	------	-----	------	------	------	-------	-------	------	------	-------	-----	-------	------	-------	--------	------	-------	-----

デカンショまつりは8月17～18日です

川柳ささやま社一同

代表 遠山可住

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

川柳若葉の会

吉	山	宮	宮	宮	古	中	椎	黒	橘
田	内	崎	崎	本	川	島	江	田	高
あ	香	シ	弘	欣	喜	田	清	能	薫
ず	住	マ	直	史	美	実	芳	子	風
き		子		子	子	子			

暑中お見舞申し上げます

暑中お見舞い申し上げます

西宮ローズ川柳会

暑中お見舞申し上げます

とっとり川柳会

宮	前	橋	春	武	武	坂	石	岩	岩
木	田	本	木	田	田	田	上	原	田
一	一	多	圭	粗	帆	和	悦	喬	輪
夫	枝	哥	一郎	粒	雀	歌	子	水	多
		由				子			朗

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

ほか会員一同

前	松	藤	古	中	玉	滝	田	酒	嵯	栗	黒	北	岡	江	上	池	一	月	湯	井	橘
田	本	原	川	山	置	北	中	井	峨	田	崎	村	本	口	田	田	瀬	原	浅	上	高
昭	た	桂	喜	キ	英	博	螢	瀧	根	久	恭	正	吉	明	佳	善	福	方	馬	直	薫
子	だ	子	美	ヨ	子	史	柳	小	保	子	子	安	郎	光	秋	守	一	郎	洗	次	風

定例会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞い申し上げます

う み な り 川 柳 会

会 員 一 同

鳥取市相生町3丁目204

電話 (0857) 23-4672

暑中お見舞申し上げます

児 高 福 武 楠 赤 高 川 大 福 中 高 吉 笠
他 島 田 田 部 木 津 端 槻 元 島 田 岡 原
一 与 治 悦 敦 昭 和 三 六 一 み の 志 美 美 吸
同 志 子 子 子 子 子 郎 点 屯 る 洋 子 房 江

川 柳 藤 井 寺

暑中お見舞い申し上げます

大阪川柳人クラブ

会 長 磯 野 いさむ

副会長 橘 高 薫 風

幹事長 西 田 柳宏子

暑中お見舞

申し上げます

はびきの市民川柳会

森清塩酒榎吉山橋西徳川内芦安芸田
田水満井本原本村村山田田田
四利 一吐辰た敏りみ さと 泰
三 郎 武敏壺来子し子えこ 晋み子子

暑中お見舞い申し上げます

夏バてになりませぬよう

1997年 盛夏

私たち“川柳塔鹿野みか月”の第18回大会は
今秋、11月16日（日）に開催をいたしたく
皆様のご支援を心からお待ちしております。

※ 詳しくは改めて御連絡したいと存じます。

川柳塔鹿野みか月

事務局 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原 諷人方
〒689-04 電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

										同人	顧問	主幹
北山好笑	川上富湖	川上大輪	柿花紀美女	尾田綾子	小山太一	小倉アサ	内芝登志代	岩倉天彦	野村太茂津	牛尾緑良		
富上光代	天満三千代	寺田裕美	千原淳太郎	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	塩谷佐代子	澤田和重	坂部紀久子	桑原道夫
ほか会員一同	横垣忠翁	森三枝子	宮園射月芳	宮口克子	松原寿子	堀端三男	細川稚代	福本英子	福田和子	中村君子	中田誠子	中井栄美子

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

TEL 0734-46-2855

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

黒	久	木	菊	亀	川	門	小	小	奥	奥	上	浅	秋	黒
田	保	村	池	岡	見	谷	倉	熊	山	田	田	野	元	川
能	ま	貴	ト	哲	絹	た		江	美	み	佳	房	て	紫
子	さ	代	ミ	子	子	ず	藍	美	智	つ	子	秋	子	香
	お	子	エ			子			子					

吉	山	山	牧	藤	春	春	林	長	西	西	長	富	小
田	本	崎	渕	村	城	城		谷	田	口	浜	山	池
								川					
笑	義	君	富	メ	武	年	は	春	柳	い	澄	ル	し
女	子	子	喜	女	庫	代	つ	蘭	宏	わ	子	イ	げ
			子		坊		絵		子	ゑ		子	お

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
常 任 理 事

橘	小	河	板	岩	奥	河	田	高	西
高	出	内	尾	佐	田	内	中	須	口
薫	智	天	岳	ダ	み	月	正	賀	い
風	子	笑	人	ン	つ	子	坊	太	わ
				吉	子				ゑ

宮	西	宮	宮	山	吉
口	出	崎	西	本	岡
笛	楓	シ	弥	希	美
生	樂	マ	生	久	房
		子		子	

川柳塔社常任理事会

7 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	3 日(木)午後 1 時から 頼る・笑顔・差・毎朝	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後 1 時から 夕方・着る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3F 阪神尼崎南西徒歩 5 分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
ほたる 川 柳 同 好 会	8 日(火)午後 1 時から テープ・笑う・大切	豊中市立蛍池公民館 阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町 3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	11日(金)午後 6 時から 汗・浴びる・予言・明日	八尾市文化会館 4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北 1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 まつえ	12日(土)午後 1 時から 街・エプロン・鉛筆	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後 1 時から 核・屋根・育てる	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後 1 時から 切符・放つ・いつも・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から 本音・こっそり・短い・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南 大 阪 川 柳 会	18日(金)午後 6 時から 気構え・機知・期限・共感	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)午後1時半から 誘惑・余暇・落第・流儀	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地埋村
川 柳 ねやがわ	20日(日・祝)正午から ポーズ・裏目・毛・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	21日(月・振替休)午後1時から 軸・抜く・仲間・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩 5 分 〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番5-801 田中正坊
富 柳 会	24日(木)午後 1 時から 雲・折れる・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京 都 塔 の 会	24日(木)午後 1 時から 栓・憩う・検査	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
東大阪市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後 6 時から スマート・色・夜明け・宝	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉 3 丁目 3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	27日(日)午後 1 時から 味わう・のびのび・スマイル・「家庭」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲 8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太 (0724-43-4889)へご連絡ください。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（9月号）

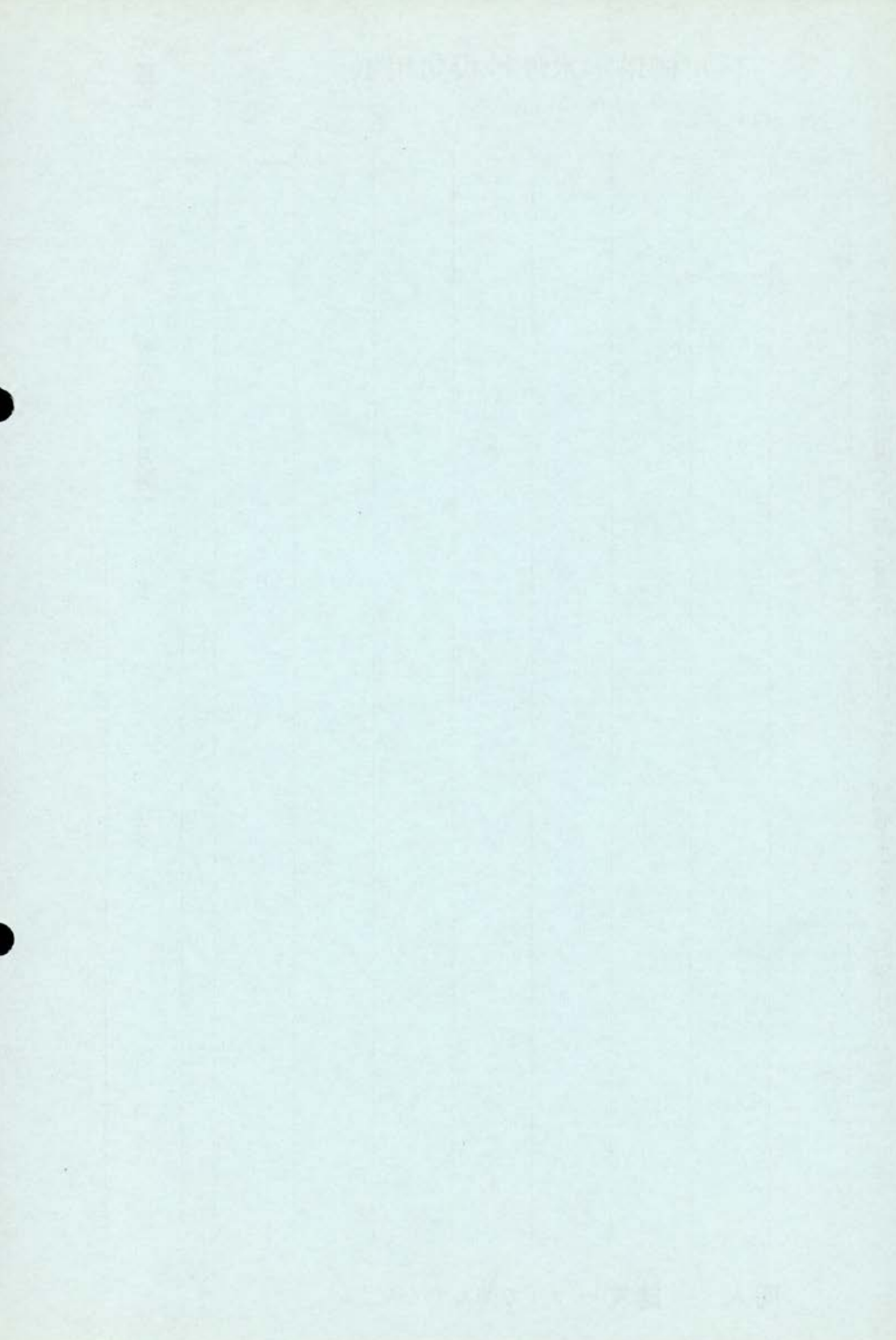
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室	課題吟 (3句)	「あきれる」 「露」	「肩」 (3句)	吐田公一担当
「あきれる」 「露」	「あきれる」 「露」	「あきれる」 「露」	「あきれる」 「露」	「あきれる」 「露」
新川中宮八西橘 家端井西木田高 実一ゆ弥千柳薫 司歩き生代宏風 選選選選選選選	新川中宮八西橘 家端井西木田高 実一ゆ弥千柳薫 司歩き生代宏風 選選選選選選選	新川中宮八西橘 家端井西木田高 実一ゆ弥千柳薫 司歩き生代宏風 選選選選選選選	新川中宮八西橘 家端井西木田高 実一ゆ弥千柳薫 司歩き生代宏風 選選選選選選選	新川中宮八西橘 家端井西木田高 実一ゆ弥千柳薫 司歩き生代宏風 選選選選選選選

9月号発表(7月15日締切)

10月号

課題吟「店」「柿」
「かじる」
初歩教室「触る(さわる)」

夜市川柳募集

題	選	者	締切
①「顔」	小島	蘭幸	6月末
②「礼」	田中	新一	7月末
③「群」	藤田	泰子	8月末
④「足」	土橋	瑩	9月末
⑤「迷い」	柏原	幻四郎	10月末
⑥「ごはん」	大西	泰世	11月末
⑦「無理」	奥山	晴生	12月末
⑧「大」	高杉	鬼遊	1月末
⑨「張る」	天根	夢草	2月末
⑩「駄目」	森中	恵美子	3月末
⑪「声」	大野	風柳	4月末
⑫「徳」	橘高	薫風	5月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

本社8月句会 7日(木)

兼題 「忘れる」「発見」「マンション」
「現役」「稲妻」

◎7月句会はありません。

本社句会の投句について

川柳塔社本社句会への投句を、4月句会から復活いたしました。

投句者は句箋(19×4cm)に1葉1句、各葉ごとに裏面に氏名を明記し、投句料(80円切手5枚)を同封、必ず句会の前月末までに到着するように、川柳塔社事務所へお送りください。

NHK川柳作品募集

課題「友達」 河内天笑選
ハガキに3句 7月10日締切

投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 7月26日(土)午前11時5分
からラジオ第1放送(予定)

〒545

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百円(同)

平成九年七月一日発行

編集兼 発行人 橘 高 薫

印刷所 美研アト

大阪市阿倍野区三好町二(一〇一六ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六六)一六九一四番
振替〇〇九八〇一五(三三三六八番



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 941-9631

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 **教育情報出版**

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代) FAX. 06-652-2928